二丈・浜玉道路関係
埋蔵文化財調査報告
Ⅱ

糸島郡二丈町所在遺跡群の調査

1982

福岡県教育委員会

序

二丈・浜玉道路は，国道202号線バイパスとして福岡県道路公社が昭和49年から建設の計画を進めてこられたものであります。県教育委員会は道路公社から委託を受けて，この道路建設計画地内に埋蔵する文化財を昭和49～54年までの6年間にわたり，道路建設計画に応じて発掘調査を実施してきたのであります。

この報告書は，この間に実施した糸島郡二丈町所在，広田遺跡・水付古墳等の調査記録であります。その内容は，弥生時代墓地，古墳，奈良・平安時代の集落跡等です。本報告書を学問研究に，文化財愛護思想の普及，あるいは学校教育等にご活用いただければ幸甚に存じます。

本文中に記名した方々はもとより，種々のご協力をいただいた地元の関係各位に深く謝意を表します。

昭和57年3月31日

福岡県教育委員会

教育長　友　野　　隆

例　　言

1. この報告書は，二丈・浜玉道路（一般国道202号有料バイパス）建設によって破壊される予定の遺跡について行なった事前調査の糸島郡二丈町所在の各遺跡の調査報告書である。
2. 先に刊行した「二丈・浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告」（1980）の続編にあたるため，調査の経過や環境，及び調査体制等の詳細は重複を避けた。上記書を参照されたい。
3. 本書の執筆・編集は，中間研志が担当した。

目　　次

頁

Ⅰ　水付古墳……1

1　墳丘と石室……1

2　副葬品……1

3　小結……14

Ⅱ　広田遺跡……15

1　Ⅰ・Ⅲ区の調査……15

2　Ⅱ区の調査……55

3　小結……58

Ⅲ　多々羅遺跡……59

1　遺物……59

2　小結……61

I　水付古墳

背振山塊から延びた舌状台地が，福吉漁港裏まで突出する。そのやや奥まった丘陵中程の，福吉中学校南側の最頂部に当古墳は占地する。標高25.3*m*，東・西の水田面よりの比高20*m*前後の好適地である。この丘陵は，海岸近くの他の丘の例に洩れず，段々畑でかなり削平されており，当古墳の約 200*m*北の頂部には上水道貯水池が設けられる等，同丘陵上の他の古墳の存在は推定はされても確認はできない。

1 墳丘と石室

墳丘（第2図）

丘陵頂部に，南北11*m*，東西7*m*の畑が一段高く残され，周辺は段々畑に削平整地されている。その中心に横穴式石室が残る。石室自体が後述する如く，腰石のみ残存する有様で，この部分の墳丘は全く認められない。北・北東・北西側の一段下の畑に2*m*幅のトレンチを設定し調査したが，周溝等の施設は見られない。石室部上部より糸切り底土師器小皿数個が出土しており，この時期に既に，石室上半が破壊，墳丘削平されたものかとも考えられる。

石室（第3図）

主軸をN24°Eにとり南南西に開口する，両袖式単室横穴式石室である。玄室はやや規模の大きめの寸の短かい長方形プランを呈する。玄室の計測値は以下の如くである。

長さ	右側壁寄り……2.65*m*	幅	奥壁寄り……1.85*m*
	中央玄門框石まで……2.83*m*		中央部……2.06*m*
	左側壁寄り……2.55*m*		玄門寄り……2.00*m*

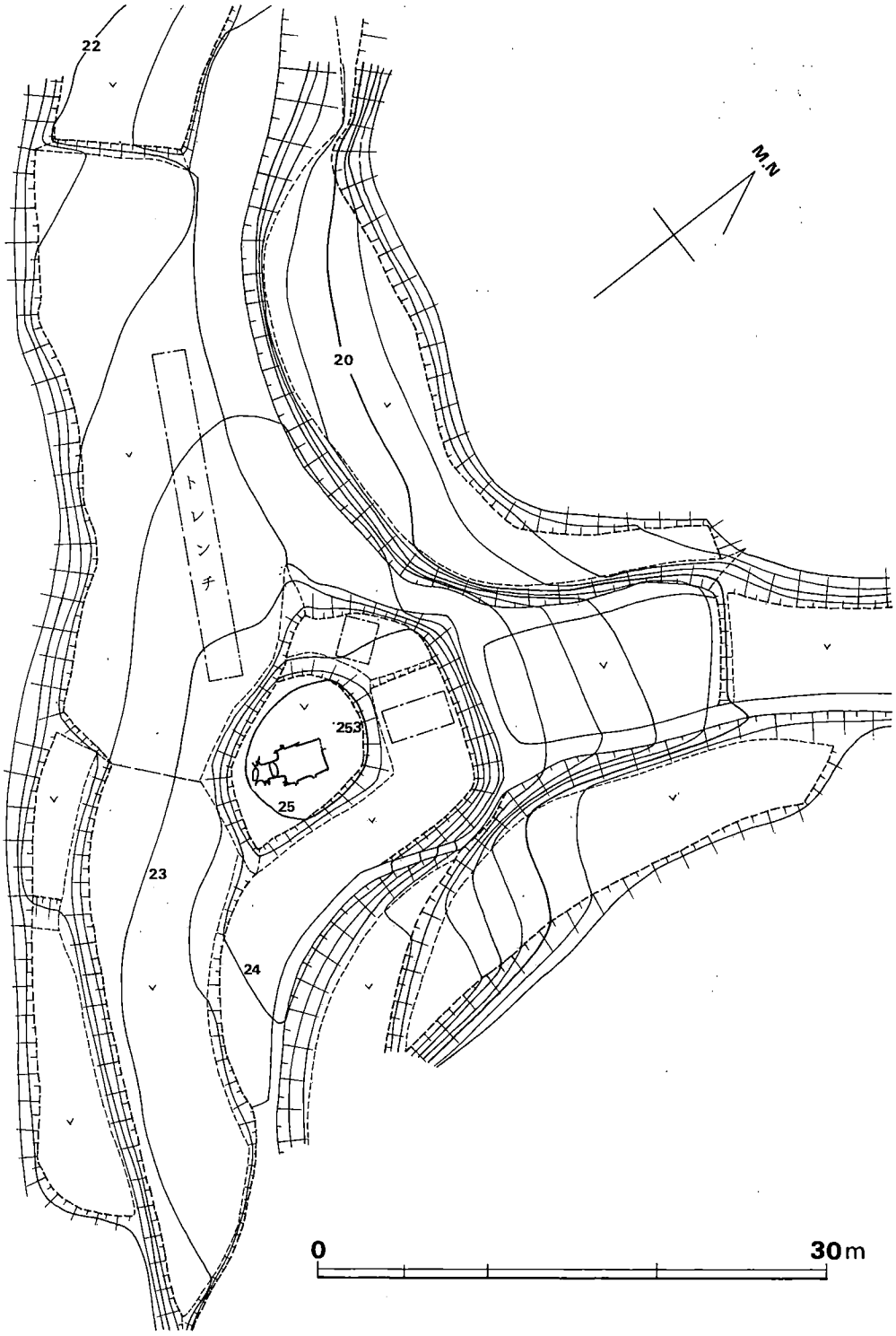
腰石は，奥壁2個（うち東側の1個は欠失），左右両側壁に各々3個の大石を横位に用いる。袖部は玄室の腰石1個の高さに合わせるように2個を横位に重ね積みする。羨道の残存長は1.5*m*で，墓道側は欠失する。袖石より羨道側に約30*cm*引込んで，框石が据えられ，玄室と仕切られている。更に，65*cm*間隔を置いて羨道部に仕切石を据える。腰石上の積石は殆んど残存しない。玄室床面は，30～10*cm*大の平石・礫を全面に敷いていたものと考えられるが，中央～奥壁側は全く残らない。

玄室中央部は既に盗掘を受けていたが，玄門近くと羨道部は，不思議と荒されておらず，副葬品が土器を主体に多量に検出された。副葬品の種類と数量は下記の如くである。

2 副　葬　品

(1)装身具　耳環　1　(2)武器　鉄鏃　10＋α　(3)工具　刀子　1

第１図　水付古墳周辺地形図(1/2,000)



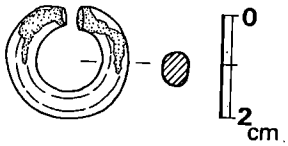
第 2 図　水付古墳墳丘測量図 (1/400)

第 3 図　水付古墳石室実測図 (1/30)

(4)須恵器　杯蓋12，杯身６，高杯５，短頸坩２，脚付坩１，平瓶８，提瓶６

(5)土師器　杯身３，椀３，高杯１，直口坩１

耳環（第４図）径2.45×2.2㎝で，断面0.7×0.5㎝の楕円形をなす。銅胎に銀張りで，部分的に銹出して銅が腐蝕する。重量9.1ｇ。



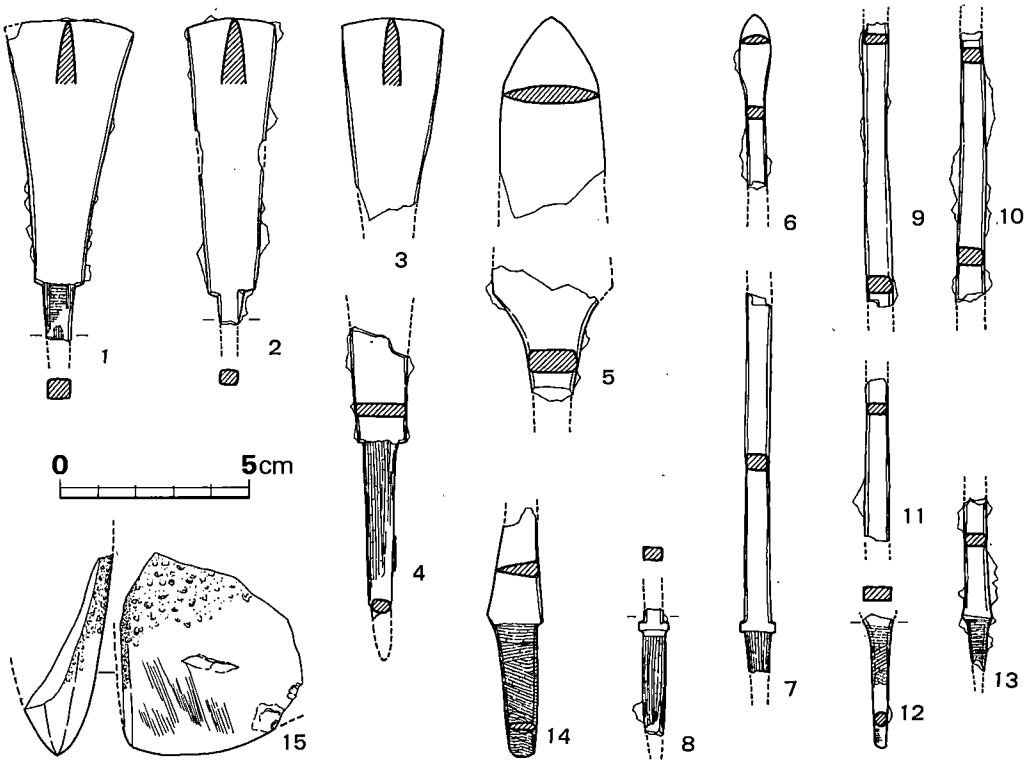
第４図　水付古墳出土耳環実測図（2/3）

鉄鏃（第５図１～13）方頭広根斧箭式に属する１～４と，広鋒両丸造圭頭式の５，片丸造鑿箭式の６に大別できる。６は，７・８の棘篦被の類に接合されるものである。１には樺皮巻上に縦方向杢目の木質が残り，４・７・８も木質を残す。８は棘部直下に横方向木質が認められる。12・13は樺巻きがみられる。

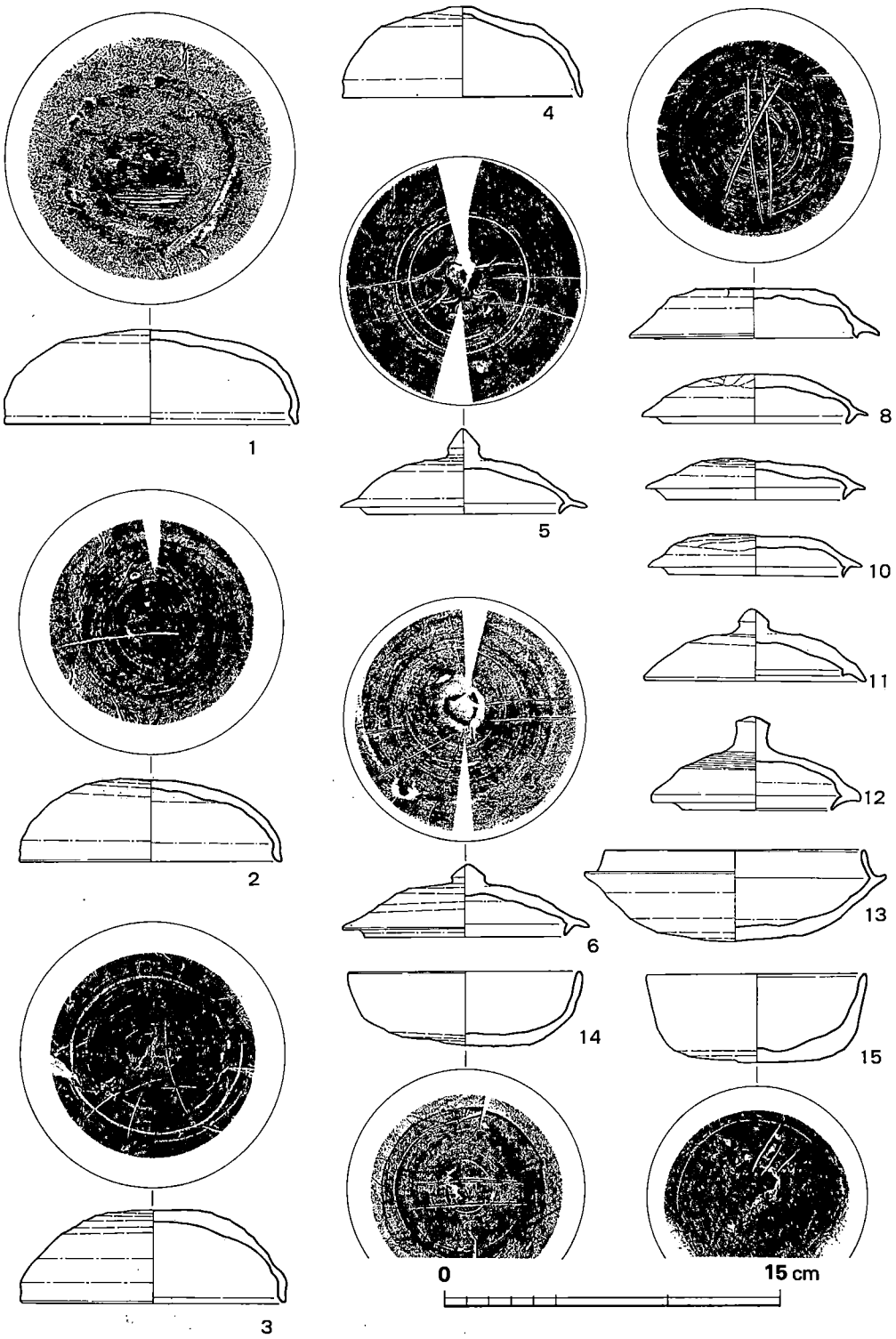
刀子（14）　茎部に対して身部の短かいタイプである。茎長3.5㎝で，木質が残り，樺巻きかと思われる。

須恵器（第６～11図）

杯蓋（第６図１～12）その器形の各特徴と法量により５類に分けられる。Ⅰ類（１）口縁内端に段をつくる類で，天井外面にはヘラ削りが施され，更にスノコ状圧痕がみられる。焼成堅緻で青灰色を呈する。口径13.0㎝，器高4.2㎝。



第５図　水付古墳出土鉄器・石器実測図（1/2）



第 6 図　水付古墳副葬須恵器実測図（その１）（1/3）

Ⅱ類（2～4）天井部から丸く口縁に至り，口縁部は下に短かく直口する。天井部外面にはヘラ削りが施され，径11.7～10.6cm，器高4.1～3.6cm。2・3は天井外面にヘラ記号あり。

Ⅲ類（5～7）身と蓋が反転した後，扁平な器形に返りをつくる類である。5・6のように擬宝珠形撮をつくるもの（a），7のように付けないもの（b）に細分される。天井外面にヘラ削りを行ない，口径11.0～11.1cm，器高3.7～2.2cmを測り，いずれも，ヘラ記号をみる。6は14の身と焼成・胎土・整形とも全く同じで，セットをなす。焼成堅緻で，作りは丁寧である。

Ⅳ類（8～11）Ⅲ類より更に扁平となり径も9.6～10.0cmと小さく，小さなかえりをつくり，天井外面はヘラ削り。天井に撮を付けないもの（a），付けるもの（b）の2類に分けられる。8～10は，胎土に細砂多く含み，黒斑粒多くみられ，焼成堅緻で灰黒色を呈し，天井外面の削りは，回転方向ではなく一方向への粗い類で，全体に歪み，粗製。11も粗製で軟質。

Ⅴ類（12）高い柱状の撮をつくり，天井外面にカキ目調整を施し，短かいかえりをつくる。特殊なタイプであり，杯蓋というよりも坩・瓶類の蓋とみられるが，一応ここで取り上げた。胎土にかなり粗砂を含むが，焼成極めて堅緻で灰～黒色を呈する。

杯身（第6図13～15，第7図16・17）　その法量・形態により3類に分けられる。

Ⅰ類（13）口径11.6cm，器高4.2cmを測り，内傾する立ち上がりをつくる。底外面はヘラ削りの上を一方向へナデつける。焼成良く，青灰色を呈する。

Ⅱ類（14）口径10.5cm，器高3.4cmを測り，蓋Ⅲ類の6とセットをなす。

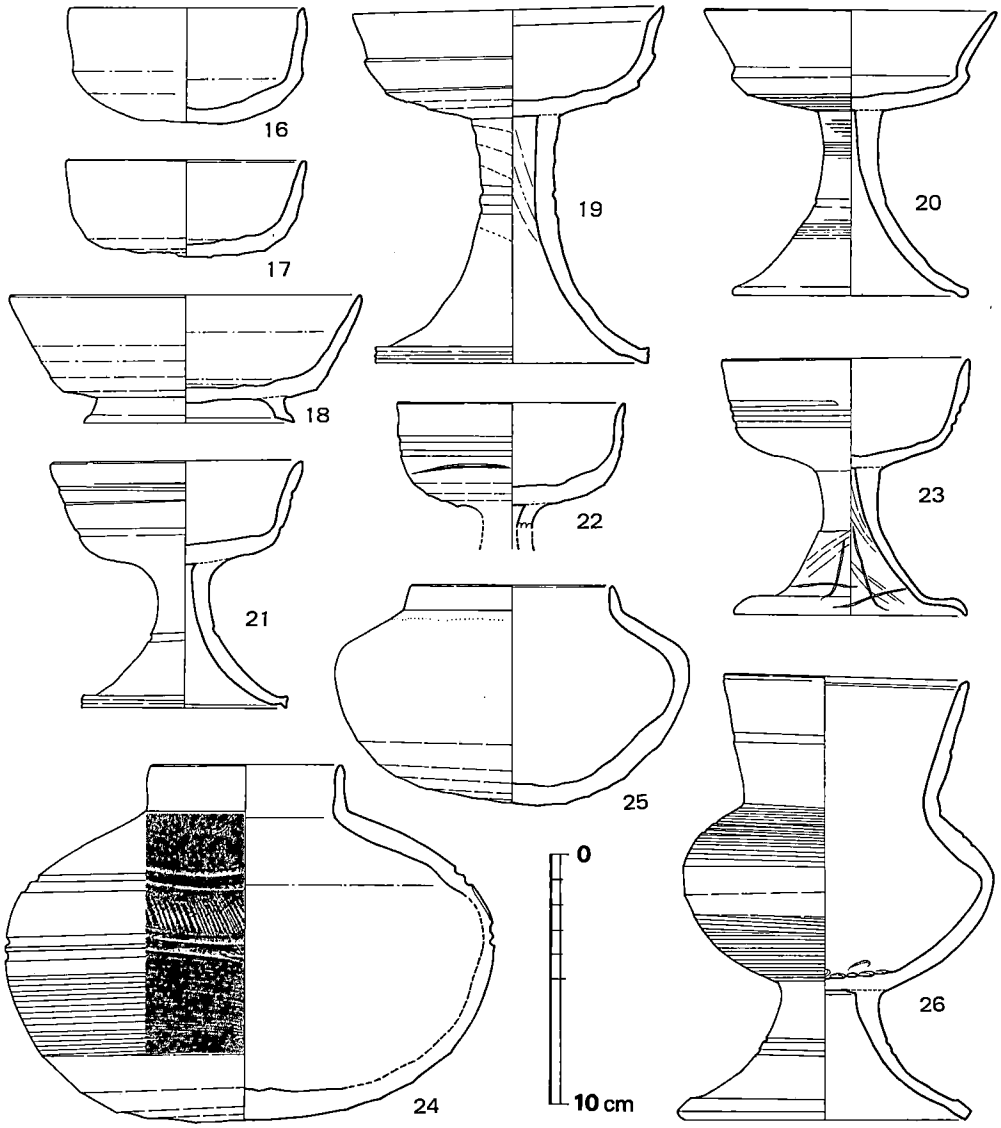
Ⅲ類（15～17）口径9.8～9.5cm，器高4.5～3.9cmを測り，やや深めの椀形の器形。15・17は，底外面にヘラ削りがみられ，15には「川」字状ヘラ記号をみる。胎土は大旨精良で焼成硬質。

以上の身と蓋とは，蓋Ⅰ類が6C中頃，蓋Ⅱ類と身Ⅰ類が6C後半，蓋Ⅲ類と身Ⅱ類が7C初頭前後，蓋Ⅳ類と身Ⅲ類が，それに続く7C前半頃とされよう。

高台付杯（18）鋭く外に張り出す高い高台を付けるもので，体部下端にヘラ削りをみる。焼きは甘く，淡褐色を呈する。7C後半代の所産。

高杯（19～23）19は脚柱径がやや大きく，杯部外面に2段つくり，全体にシャープさを感じる。焼きやや甘く，赤褐色を呈する。20は，杯部でくびれ，くびれ直下にヘラ削り，更に下にカキ目を行なう。脚中央には段状をなした不明瞭な沈線をめぐらし，カキ目の上を回転ナデ調整を行なう。21～23は小さな杯部に，細く低い脚柱つけるもので，21は，杯部には不明瞭な沈線を巡らす。22外面には，一本線のヘラ記号がみられる。23は，脚裾の内外面表裏の位置に同様な十字形ヘラ記号をつける。

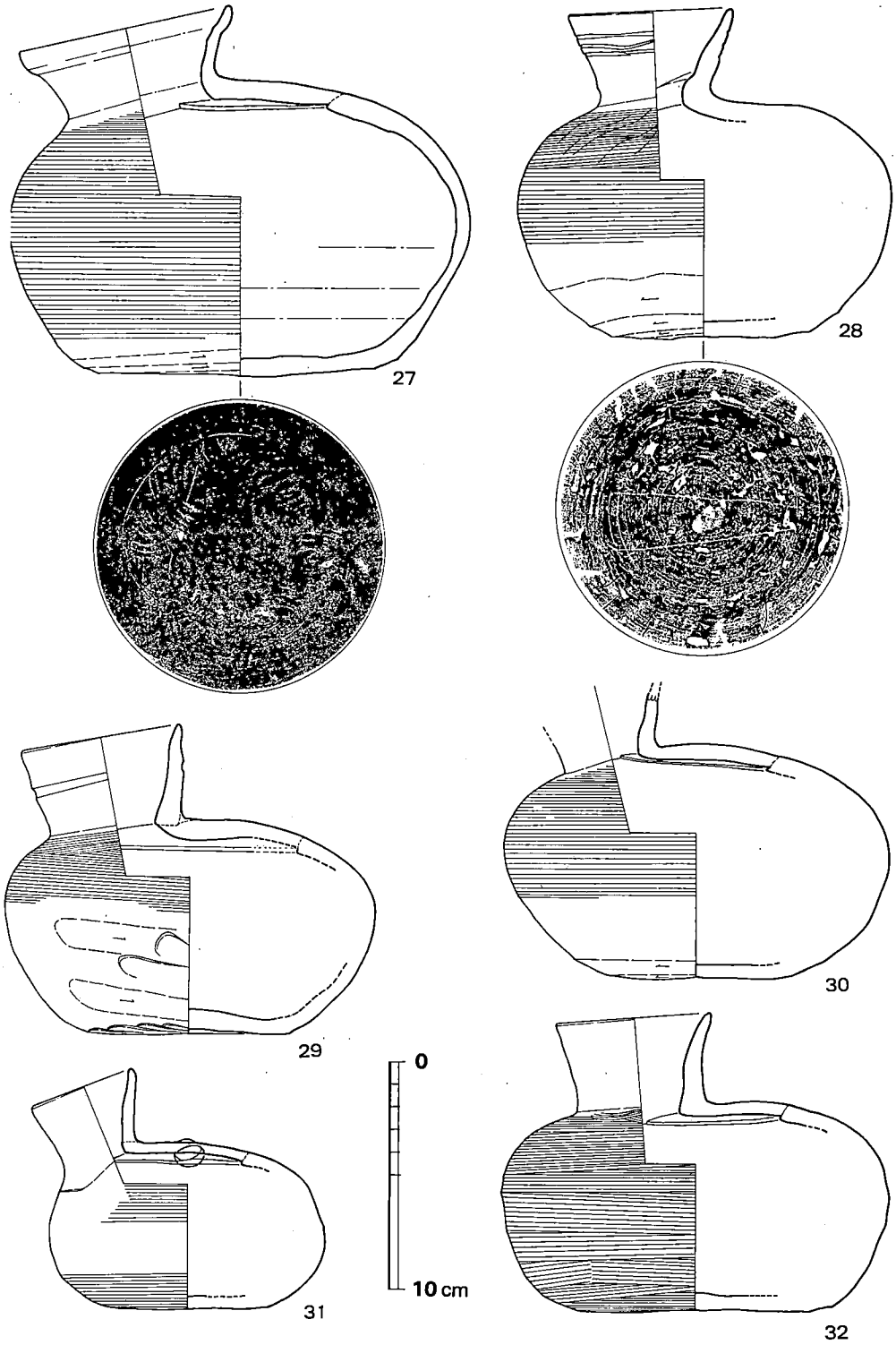
短頸坩（24・25）大小あり，24は，底部をヘラ削りし，胴下半にカキ目を施す。肩部2条，胴部2条の沈線の間に櫛目圧痕の連続文がみられる。25は，肩が張り，胴下半から底部にヘラ削りを施す。頸部直下から上に紫変部がみられ，蓋をかぶせて焼いたことがわかるが，出土品中に該当するものはない。



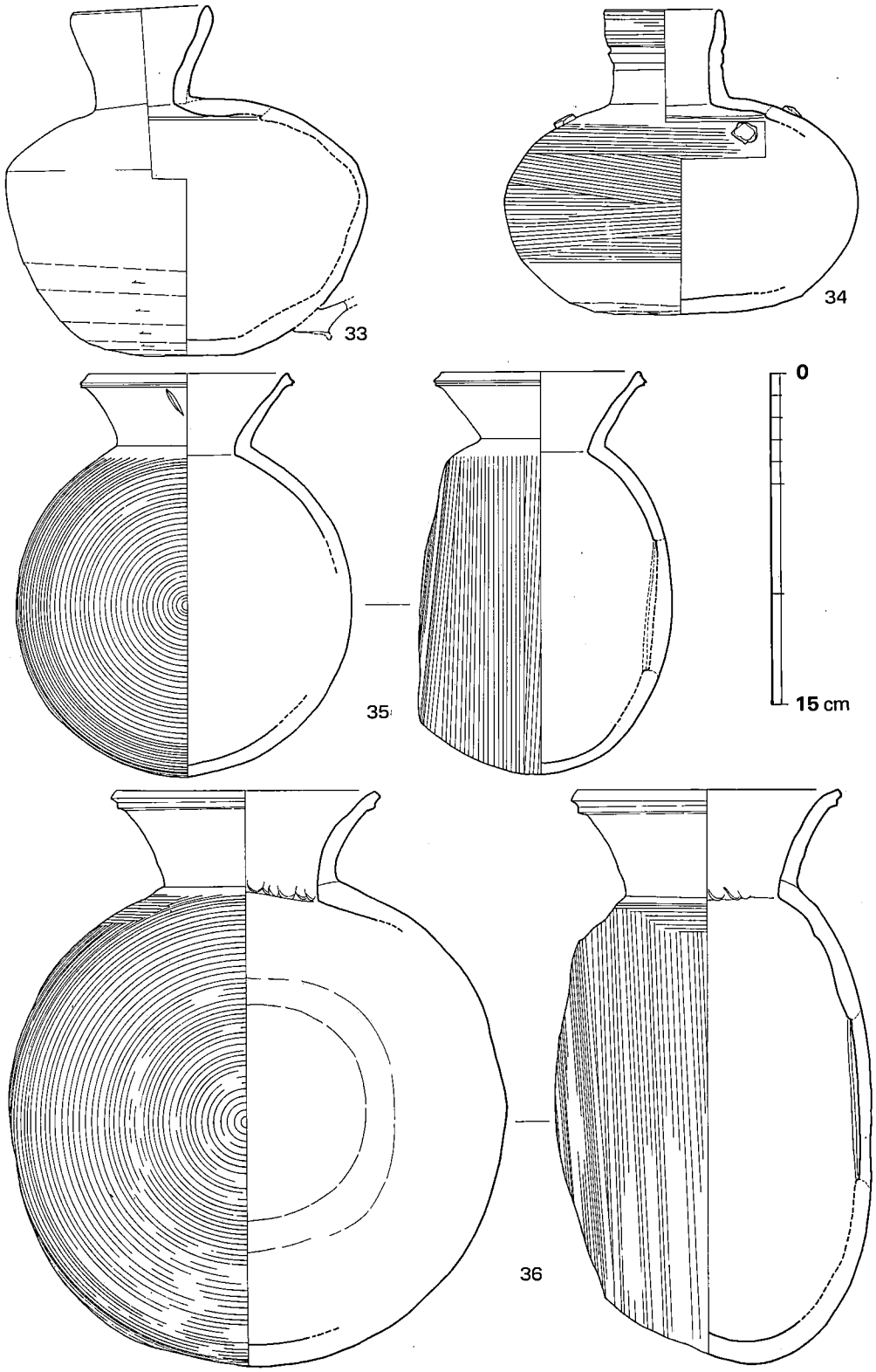
第 7 図　水付古墳副葬須恵器実測図（その2）（1/3）

脚付坩（26）やや長い直口坩に低い脚を付け，坩部外面は全面にカキ目を行ない，口頸部はナデて消し，胴中央はヘラ削りで消す。坩底内面は棒状のもので突いた痕跡あり。焼成堅緻。

平瓶（27～34）27は，底面にヘラ削りを行ない，丸味をもった胴部には細かいカキ目が施される。底外面に青海波叩目が残る。28は胴下半～底部に粗いヘラ削りを施し，上半にカキ目を施す。胴部と頸部の接合方法は，通有の平瓶と異なり，内面に穴をふさいだ痕の円形の段がみられない。胎土に粗石英粒多く含み，焼成堅緻，暗青灰色を呈し，全体に作りは雑である。底

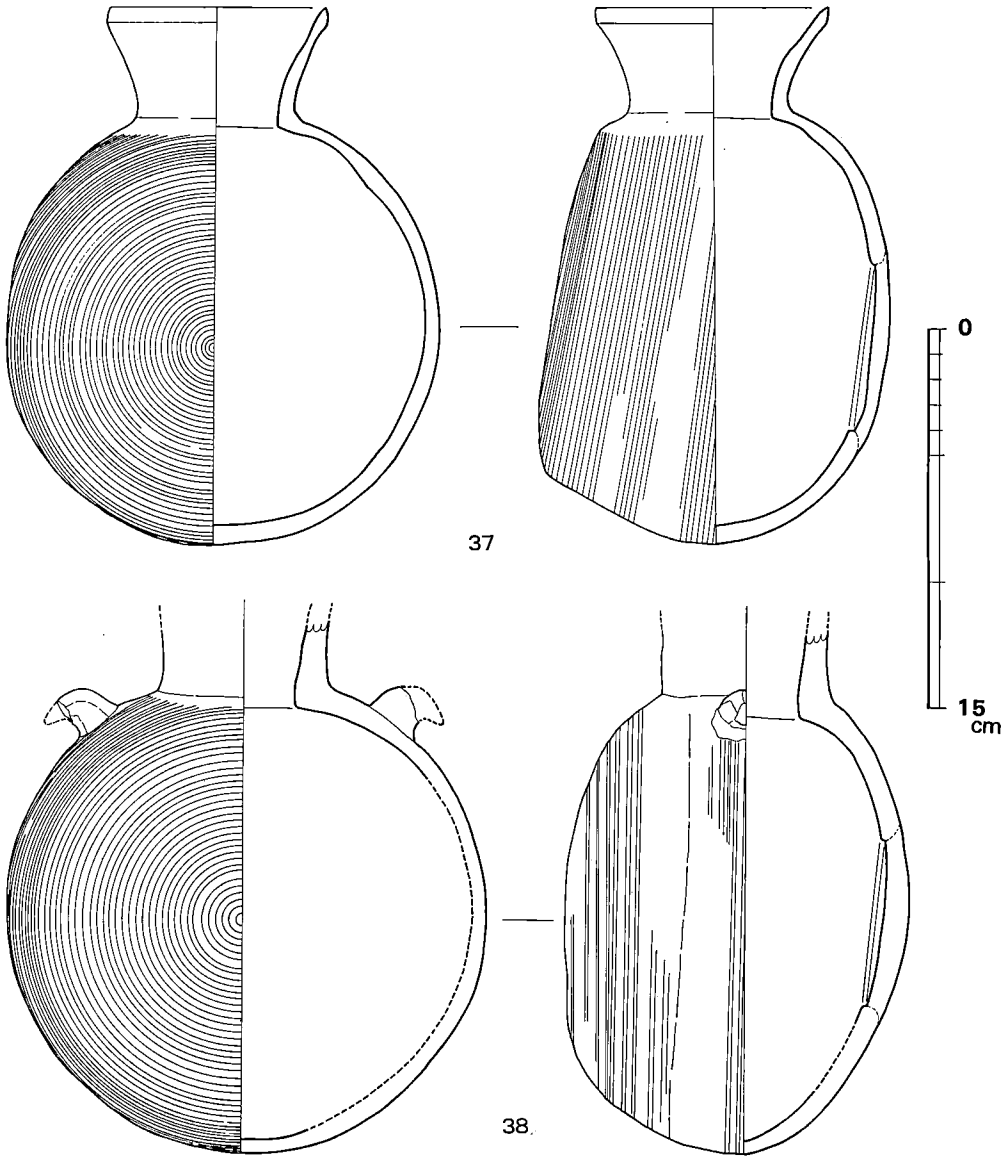


第 8 図　水付古墳副葬須恵器実測図（その3）（1/3）



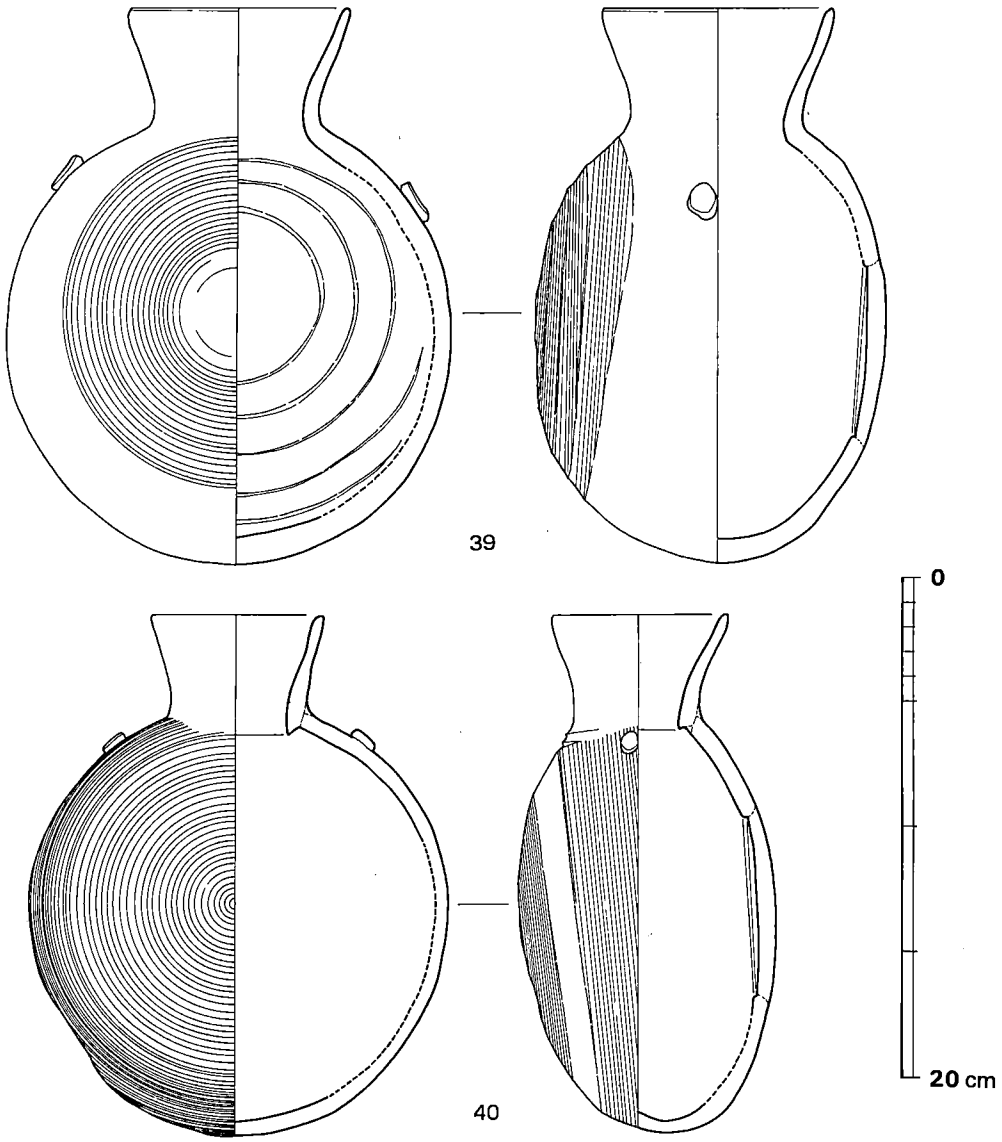
第 9 図　水付古墳副葬須恵器実測図（その4）（1/3）

部に2本線ヘラ記号がみられる。29は，胴上半にカキ目を施し，下半は，ヘラ削りの上を極めて粗く指先でナデツケている。頸周辺の胴部には，頸を中心としたカキ目がみられる。30は，胴上半に細いカキ目を施し，底部はヘラ削り調整を行なう。胎土に粗石英粒を多く含む。31は，小振りのかわいい器種で，円形のボタン状浮文を2ケ所に貼りつける。胴全面にカキ目を施した後，中位部のみを横ナデで消す。32は，全体にやや押し潰されたような器形で，粗いヘラ削りの上にそのままカキ目を施す。胎土に粗砂・細砂多く含み，焼成の甘い部分もあり，全



第 10 図　水付古墳副葬須恵器実測図（その5）（1/3）

体にやや雑なつくりである。33は，肩が張り不明瞭を稜をなし，胴下半にはヘラ削りを行なう。粗石英粒多く含み，焼成堅緻で，灰黒〜淡灰色を呈し，頸部周辺には自然釉が部分的に厚く垂れる。底部近くには，杯身片が融合しており，他にも2ケ所みられ，3点支持で据えて焼いたものである。34は，外見は直口壺状をなすが，頸部自体もやや偏寄った位置にあり，製作技法も平瓶そのものである。口縁直下と胴部にカキ目を施す。肩部3ケ所に粘土をちぎって付けたような浮文が貼付される。胴肩部に自然釉がみられる。



第 11 図　水付古墳出土須恵器実測図（その6）（1/3）

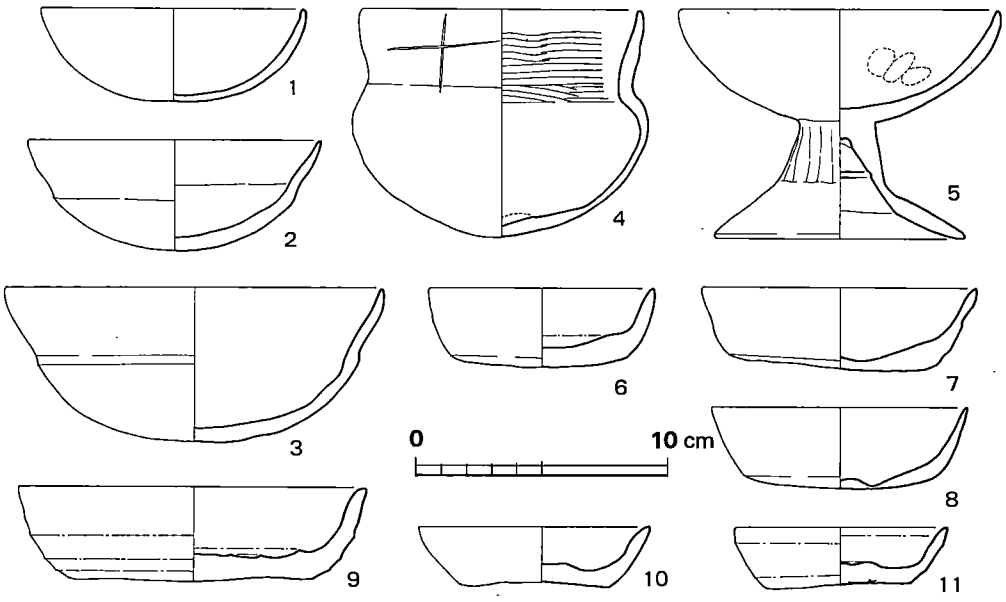
提瓶（35～40）壺や甕の如く口縁端に凸帯・凹線等を施しているものと，そのまま丸くおさめるものとがある。35は，小振りであるが，作り精製で，胴外側は丸く張る。口縁下にヘラによる短かい沈線が刻まれる。36は，大型で，口縁直下に三角凸帯をつくる。頸直下には，頸を中心としたカキ目がみられ，胴内側内面には接合のための粘土充塡部分がみられる。37は，35同様胴外側が丸く張り口縁は肥厚させる如く，外側に稜をつくる。38～40は，胴外側と内側とが略同様に張り，内側に明確な平坦面を残さないタイプである。38は，口縁欠失し，肩部に提手を貼付する。胴のカキ目は，太い沈線をめぐらしたような雑な感じで，側面はヘラ削りで消される。39は，肩部にボタン状浮文を貼り付け，胴内・外側面の中心部のみに各々カキ目が施され，内側面は，ヘラ削り直後に粗いカキ目を行なう。他部分は粗い縦ナデでカキ目を消す。胴内側内面には粘土紐接合部が同心円状に認められる。40は，扁平な胴部につくり，丁寧なカキ目を施す。肩に小さなボタン状浮文を貼付し，胴内側は一部ヘラ削りでカキ目を消す。

土師器（第12図1～8）

椀（1～3）1は，薄手の半球形の器形で，内外面横ヘラ磨きが施され，胎土は大旨精良。2は，体部中位で僅かにくびれ，胎土は大旨精良，内外面横方向ヘラ磨き。3は，2の大型のもので，口縁端が若干内へ屈折する。内外面剝落著しいが部分的にヘラ磨さが残る。

杯身（6～8）6は，須恵器杯身Ⅲ類に対応するもので，底部付近は横ナデを行なう。7と8は，胎土，焼成，技法ともに同一で，須恵器杯身Ⅱ類に対応するものである。胎土に粗砂少量含み，焼成不良で黒褐色～暗褐色を呈する。底部調整は磨滅して不明。

直口坩（4）やや尖り気味の底部と，広口の僅かに外傾して立ち上がる口縁を有する。頸部



第 12 図　水付古墳副葬土師器実測図（1/3）

内面には粗い横ハケが，外面は横ヘラ磨きを施す。頸部外面には十字のヘラ記号がみられる。

高杯（5）浅く内反りの杯部に低い脚をつける。杯内面は部分的に指オサエ痕が残るが，横ヘラ磨き。脚柱部外面は縦ヘラ削りの後ナデる。胎土大旨精良で，赤茶褐色を呈する。

以上の副葬品の他に，古墳石室上部より糸切り底土師器3個と磨製石斧片が出土している。

土師器杯（第12図9） 口径13.8㎝，器高3.7㎝，底径9.6㎝を測る。外面に強いナデによる稜が残る。全体に部厚く，外面に火を受け煤が付着する。

土師器小皿（10・11）10は口径9.1㎝，器高2.2㎝，底径5.9㎝を測り外面は強い二次焼成を受けて赤変する。11は，口径8.3㎝，器高2.3㎝，底径5.7㎝を測る。

以上3点の糸切り底土師器は，大宰府周辺の前川威洋氏の編年では，法量でみる限り，9・10はⅡ—3類，11はⅡ—5類の近辺に位置付けられる。

石斧（第5図15）玄武岩製で蛤刃石斧刃部片である。刃部にはやや粗めの擦痕がみられ，刃部以外は細かい敲打凹凸面を残す。

3 小　　結

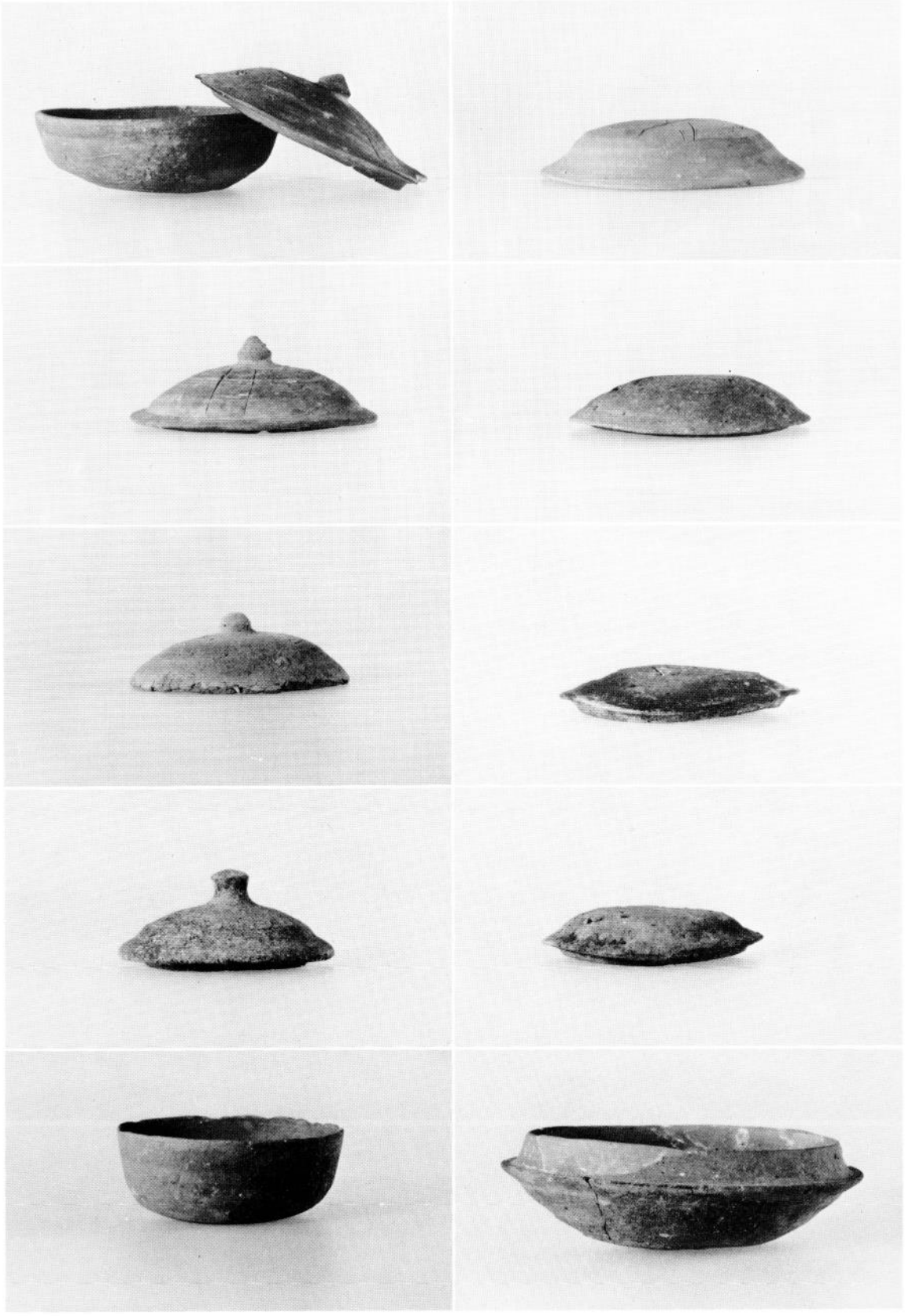
石室形態より，後期横穴式石室の中でも，終末期まで下るものではなく，また，副葬品の中でも古い手の須恵器の存在を併考すると，この初築は，6C後半代が妥当と考えられる。同様に須恵器よりその後の再使用（追葬）をみると，7C前半代に副葬品の主体をなす須恵器からみて，数回連続して追葬され，後半代にも追葬の可能性がある。更に13C前半頃に，石室上部（墳丘上）に火葬墓を営なんだ可能性もある。

二丈町周辺の後期古墳は多く発見されてはいるが，調査されたものは，数少ない。当地域の古墳の在り方として今後の礎となるものである。また，副葬土器類の多さは，追葬があるとは言え，目を見はるものがある。その集中状況は，必ずしも原位置を保つとはいえないものも多い。例えば，須恵器杯蓋11が土師器3や5，須恵器2の下に重なったり，土師器4が20㎝近く床面より浮いて，その脇の須恵器の3が10㎝近く浮いており，ある時期に，羨道部近辺に集められた感も強い。副葬品の在り方として，今後他例と比較検討を加える必要があろう。尚，器種については杯類は別としても，平瓶，提瓶類の多さは特異である。

1　水付古墳副葬鉄鏃

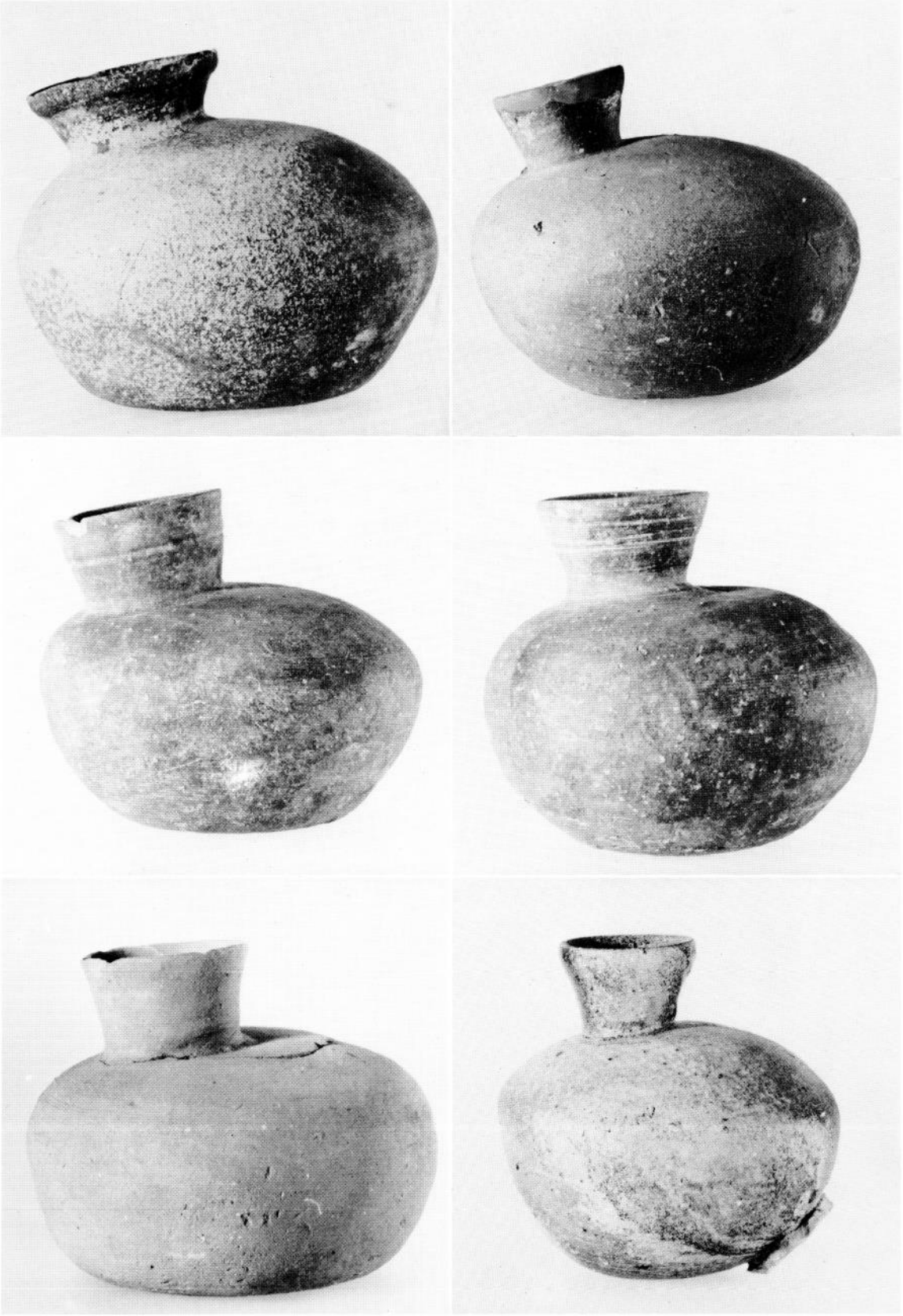
2　水付古墳出土耳環

3　水付古墳副葬須恵器

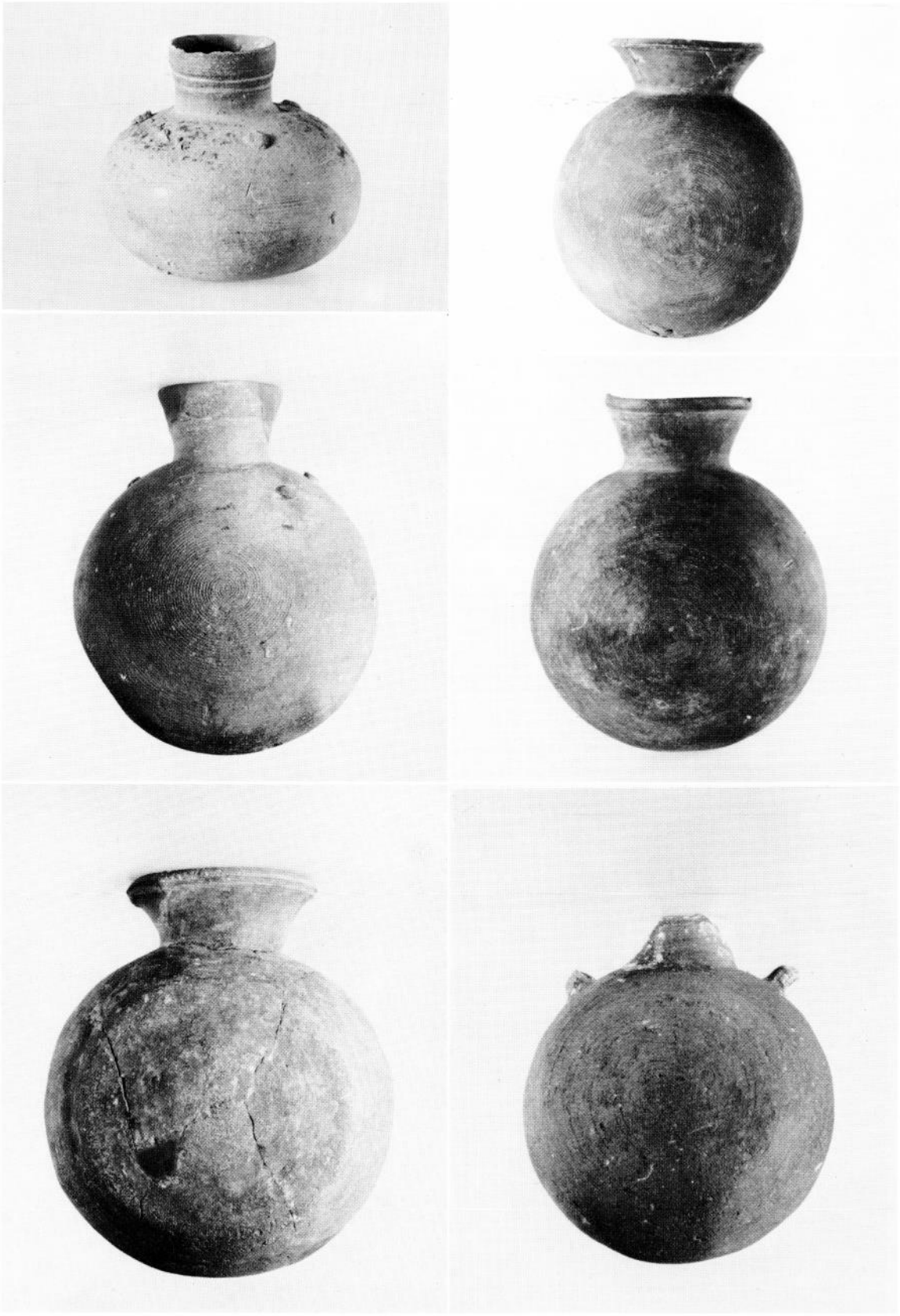


水付古墳副葬須恵器

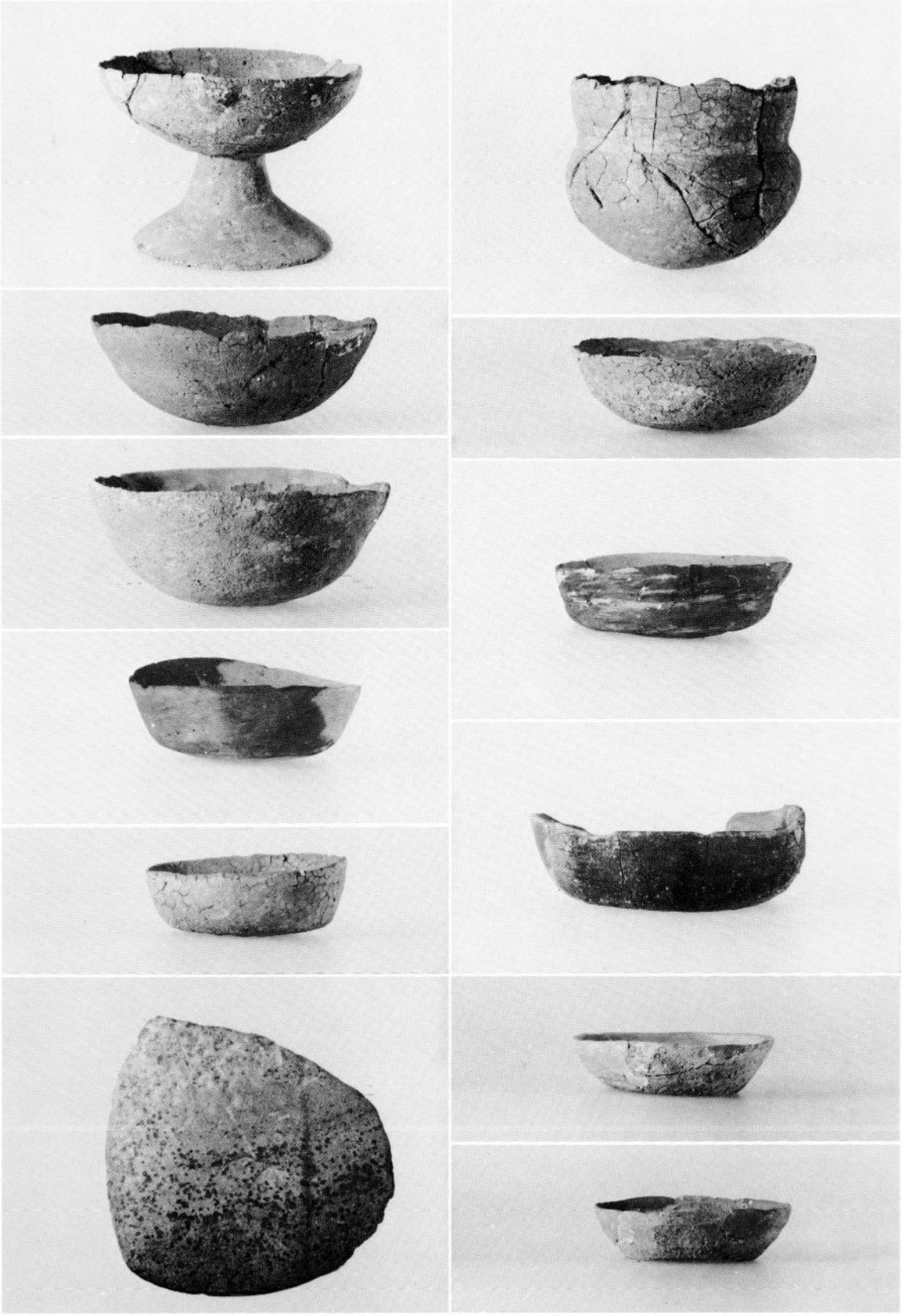
水付古墳副葬須恵器



水付古墳副葬須恵器



水付古墳副葬須恵器



水付古墳副葬土師器，石室上面出土土師器・石斧

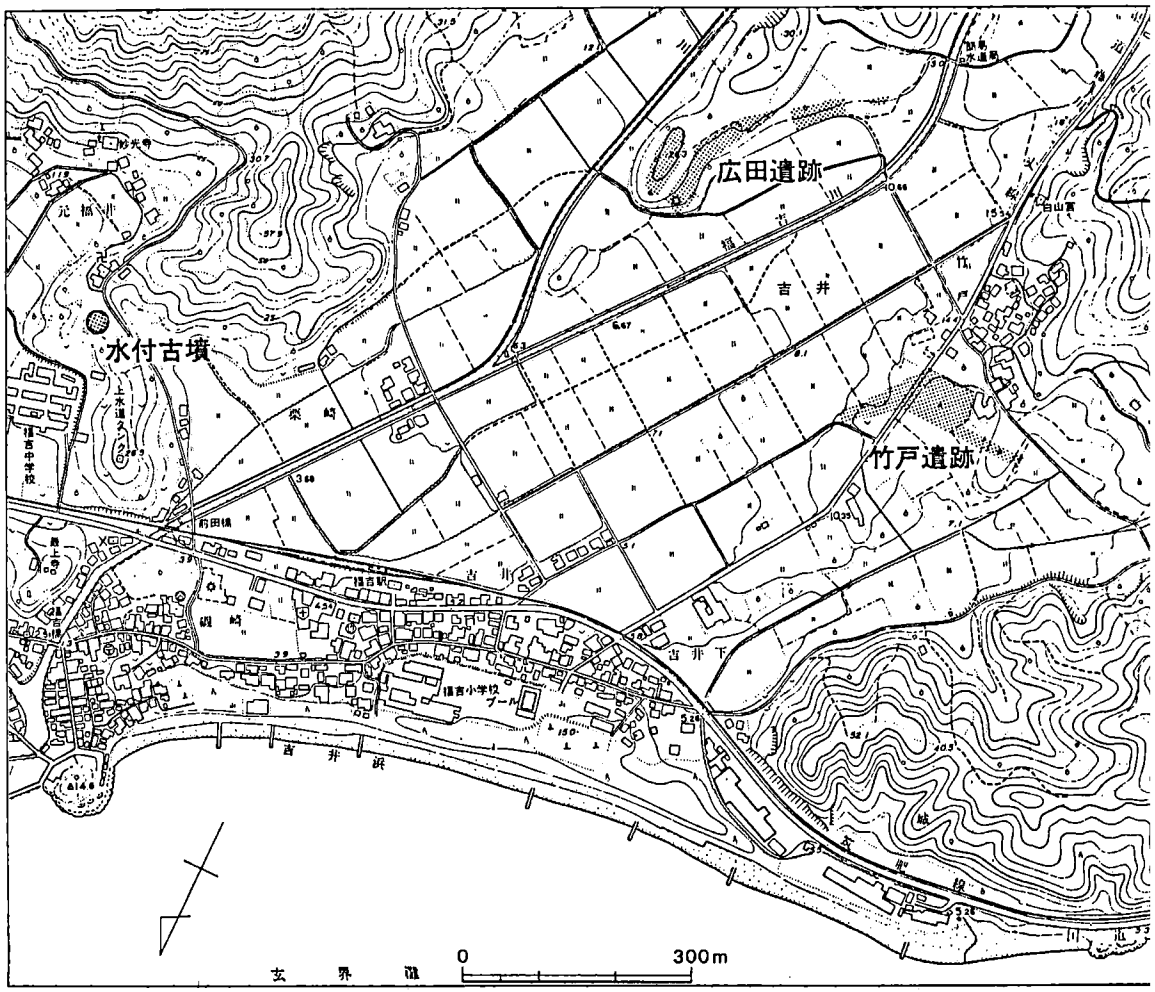
Ⅱ 広田遺跡

1 Ⅰ・Ⅲ区の調査

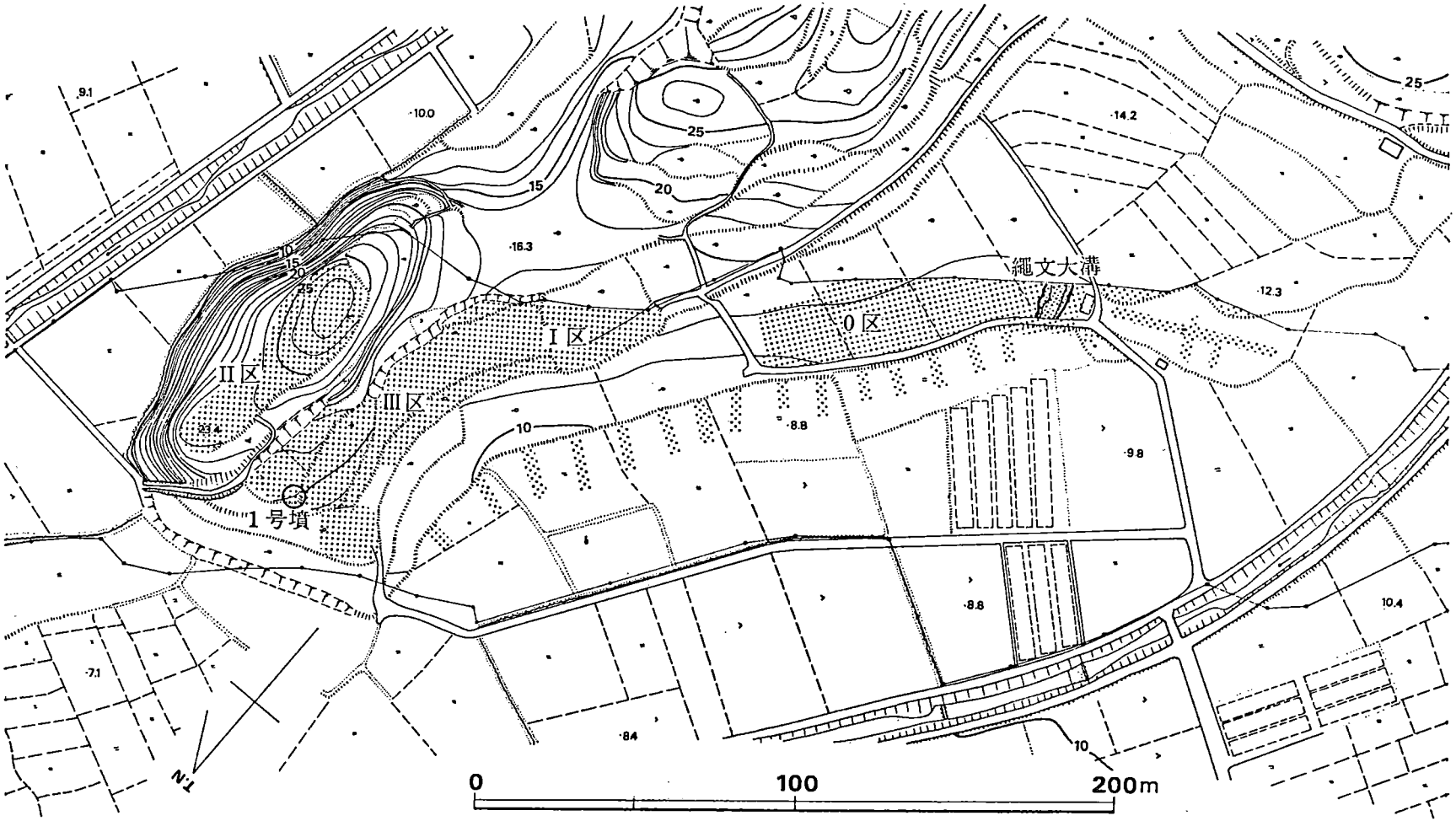
1 弥生時代の遺構と遺物

a 貯蔵穴（第 17 図）

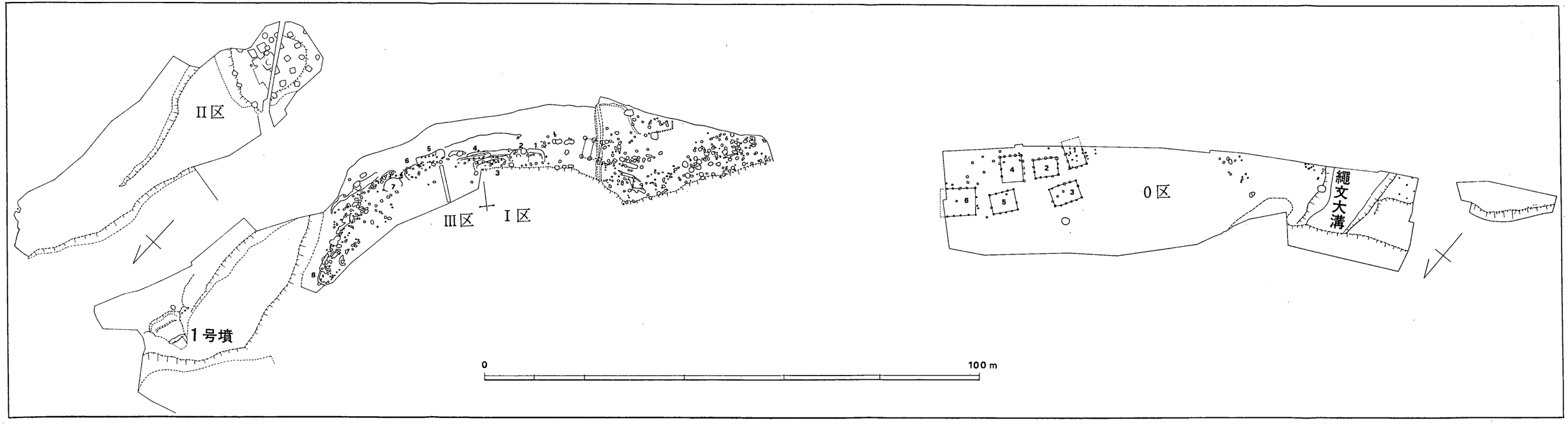
遺物は，包含層を主体に多量に出土するが，明確な遺構は数少ない。その中で３基の通称貯蔵穴と呼べるものを検出した。その形態から，袋状となるもの２基をも含んで記した。



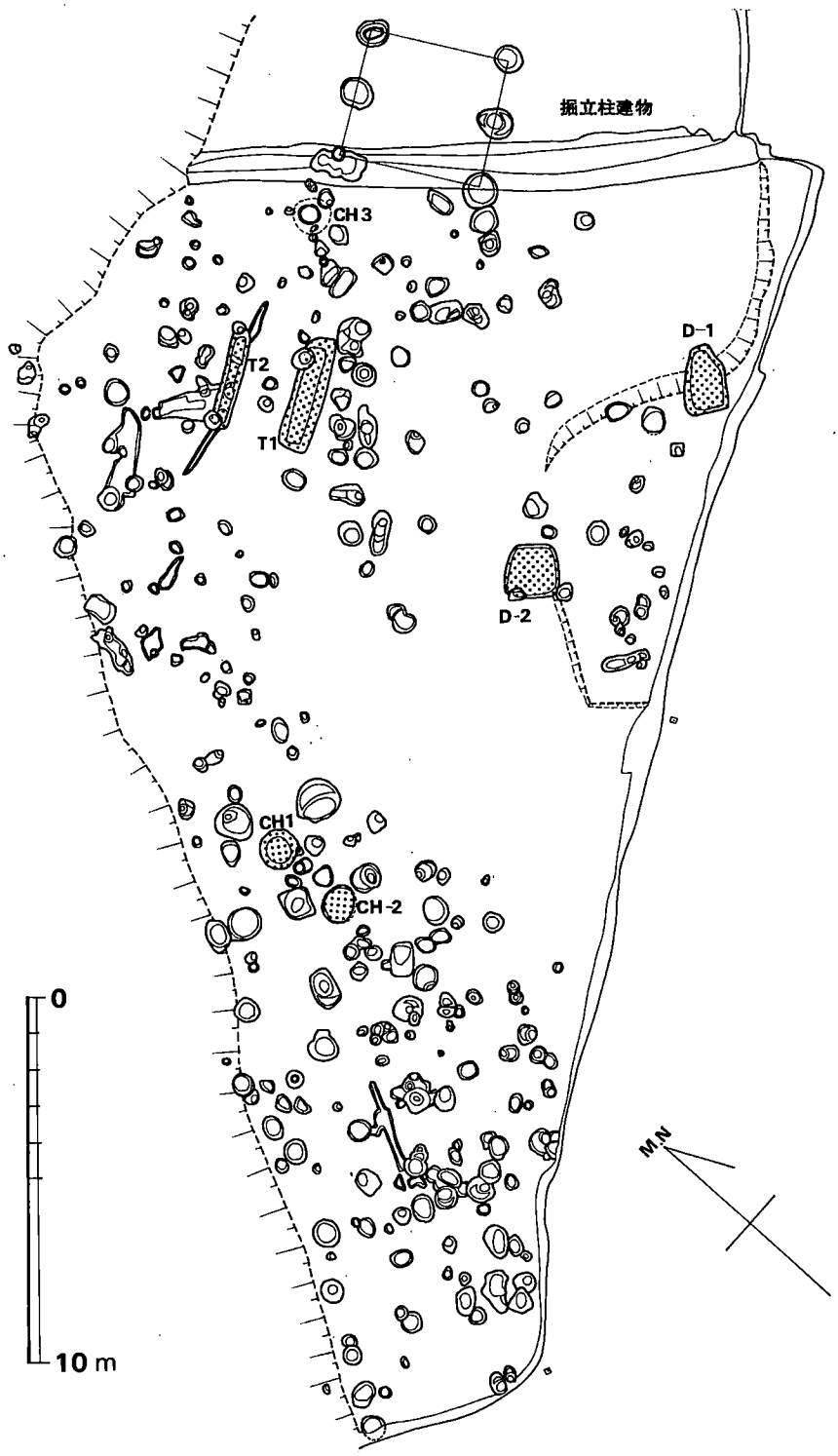
第 13 図　水付古墳・竹戸・広田遺跡周辺地図(1/10,000)



第14図　広田遺跡周辺地形図(1/2,000)



第15図　広田遺跡遺構全体図（1/600）



第16図　広田Ⅰ区遺構配置図(1/200)

第1号貯蔵穴（第17図1）

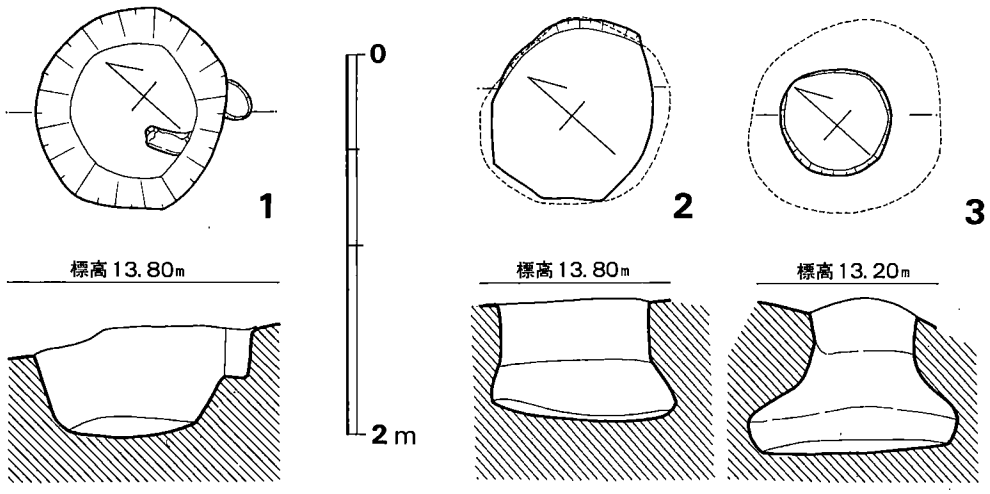
I区の南西端近くに，円形プランで土壙状の遺構が検出された。径1.1×1.0*m*，深さ0.59*m*を測り，断面フラスコ状にはならないが，中に土器多量と石器が詰まっていた。

甕（第18図1～9）1は，「く」の字状に短かく開く口縁下に浅い沈線一条を巡らす類で，胎土に粗砂かなり含み，焼成良好で暗褐色を呈する。2は，1と同様の口縁に殆んど張らない胴部を有し，外面に粗い縦ハケを施す。外面は煤が付着する。3は，逆「L」字口縁直下に三角凸帯をつくるもので，粗石英粒多く含み，内面には指圧痕がみられる。4・5は，丹塗りの口縁片で，内端は僅かに突出させる。口縁直下に三角凸帯2条を連接して貼り付，口唇状凸帯様につくる。胎土精良である。6は，口唇外端に刻目を施し，口縁直下には口唇状凸帯を付ける。胎土に赤い土を用い，更に化粧土により赤い土を用いており，結果としては丹塗磨研土器と同じ効果を得ようとしたものと考えられる。7・8は「く」の字口縁で胴が張るもので，粗砂幾らか含み，焼成やや不良で白褐色を呈する。9は，平底の胴部下半で，外面に粗い縦ハケ，底内面には指ナデ上げ痕がみられる。

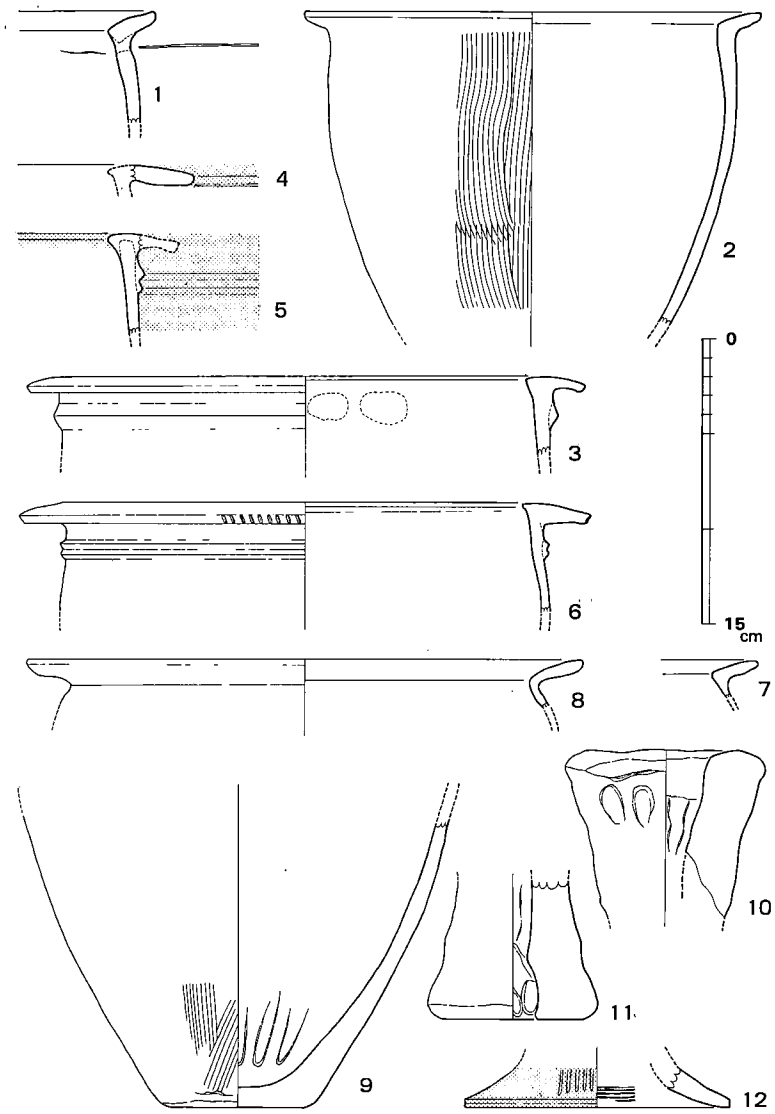
器台（10～12）10と11は，同一個体の可能性が強く，胎土に粗砂少量含み，淡褐色で手捏ねによる。10の上半は二次焼成を強く受け赤変しており，支脚とした方がよいかもしれない。12は，外面丹塗りで，高杯の脚端部かとも思うが，一応この項に入れた。端部には凹線を入れ，外面に深い沈線状の縦暗文を，内面には粗い横ハケを残す。

壺（第19図13・14）13は，内側への張り出しの短かい鋤先状口縁端に刻みを施す丹塗磨研土器である。胎土はかなり精良で，焼成やや不良。14は，細い頸下半に三角凸帯2条を貼り付け，かなり張る胴部につくる。焼成やや不良で，全体に磨滅著しく調整不明。

以上の土器類は弥生中期末～後期初頭のものが主体をなし，後記する黒色包含層出土の主体



第17図　貯蔵穴実測図（1/40）



第 18 図　第1号貯蔵穴出土土器実測図（その1）（1/4）

をなす中期初頭〜前半のものと明らかに時期を異にする。

石斧（第20図）　黒班を多く含む玄武岩質の石材を用いる大型の磨製石斧片である。側面は細かい敲打痕を残す。

第2号貯蔵穴

（第17図2）

第1号貯蔵穴の南1.5 *m* 隣に検出され，断面形は口の広いフラスコ状を呈する。上面径0.8 *m*，底面径0.96*m*，深さ0.65*m*を測る。内部覆土中より弥生土器小破片，炭化物片が出土した。

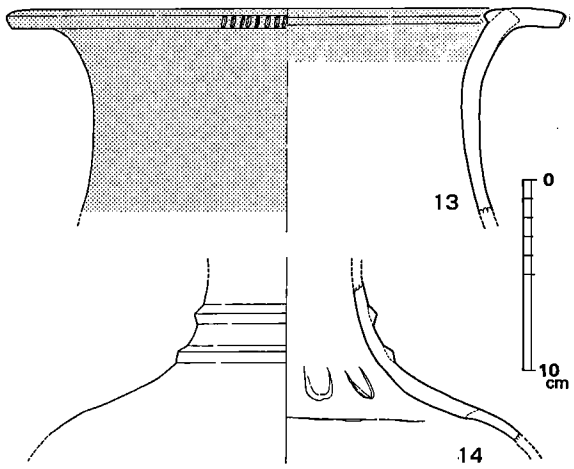
第3号貯蔵穴

（第17図3）

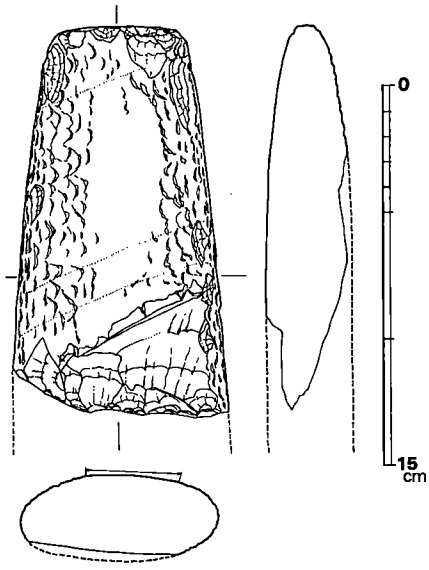
I区北東寄りの掘立柱建物の西側に位置する。断面フラスコ状を呈し，上面径0.58*m*，底面径1.1*m*，深さ0.8*m*を測る。床面に炭がかなりみられた。

b 土 壙 墓

第1号土壙墓（第21図1）　I区中央部付近は，北へせり出した部分で，包含層が特に厚く，後記する弥生土器多量が集中していた。この包含層下より2基の長方形竪穴が並行して検出され，1・2号土壙墓とした。第1号土壙墓は略長方形プランで，長さ3.1*m*，幅0.85*m*，深さ



第 19 図　第１号貯蔵穴出土土器実測図（その２）（1/4）



第20図　第１号貯蔵穴出土石斧実測図（1/3）

0.75*m*を測る。奈良時代柱穴に一部切られ，土層断面を観察したが，木棺等の痕跡は認められない。副葬品等全くみられない。

第２号土壙墓（第21図２）第１号土壙墓の北隣に並行して営まれる。長さ2.7*m*，幅0.5*m*，深さ0.6*m*を測り，やや狭く，底面は段状をなす。副葬品等全く認められない。

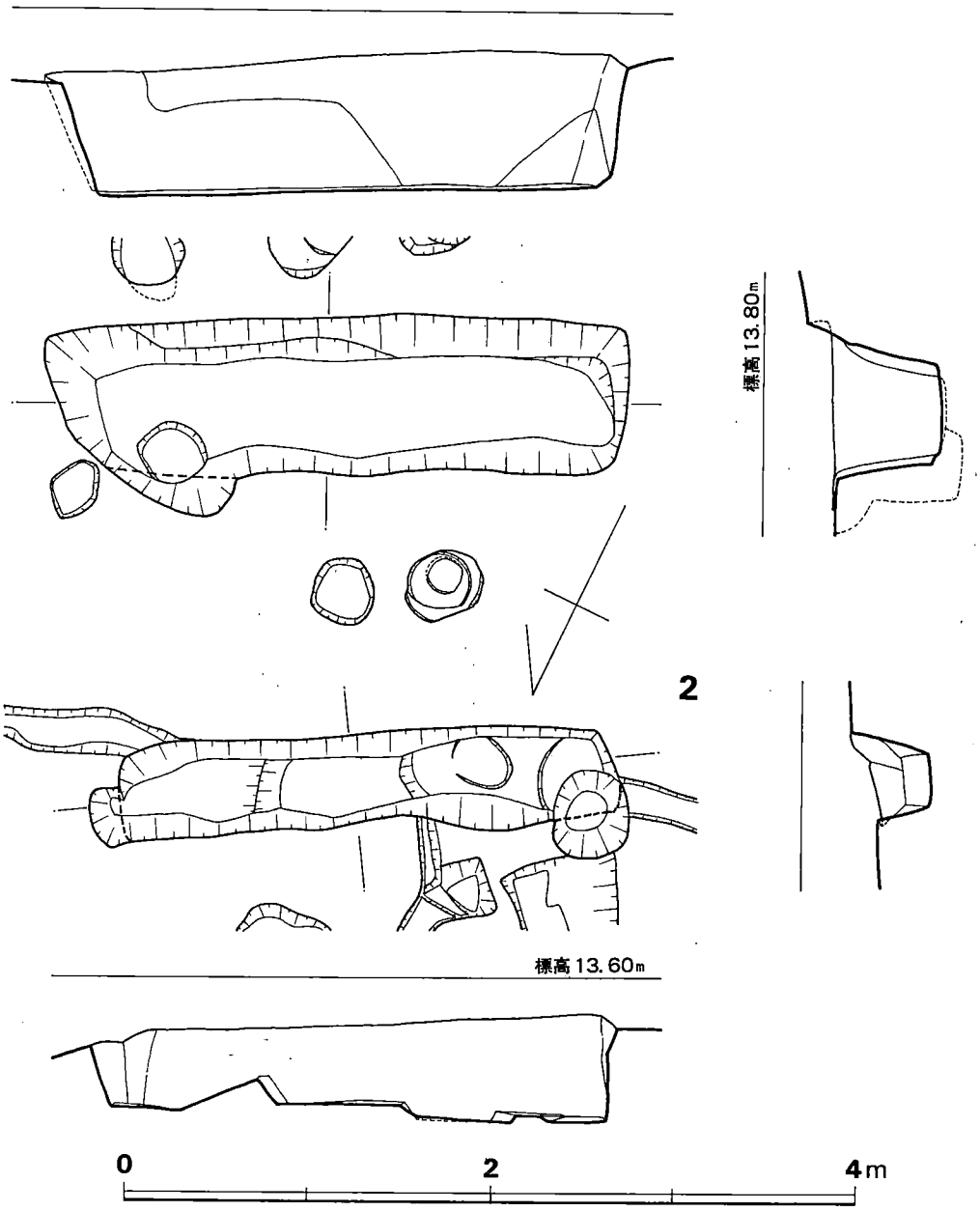
2　広田１号墳

福吉川と東川は小平野に突出した小丘陵の途絶える地点で合流する。その丘陵先端がひときわ小高くなり，その先端の北西斜面の蜜柑畑に２*m*大の大石が２個露出していた。周辺に古墳の存在を推定して調査を行ない広田１号墳と呼称した。標高16*m*前後で，北西水田面との比高９*m*，直上の丘陵先端頂部より７*m*下がった位置で，急な崖状の斜面が初めて一段落ちついて小さく西へ張り出した狭い平坦部に営まれる。

a　墳丘と石室

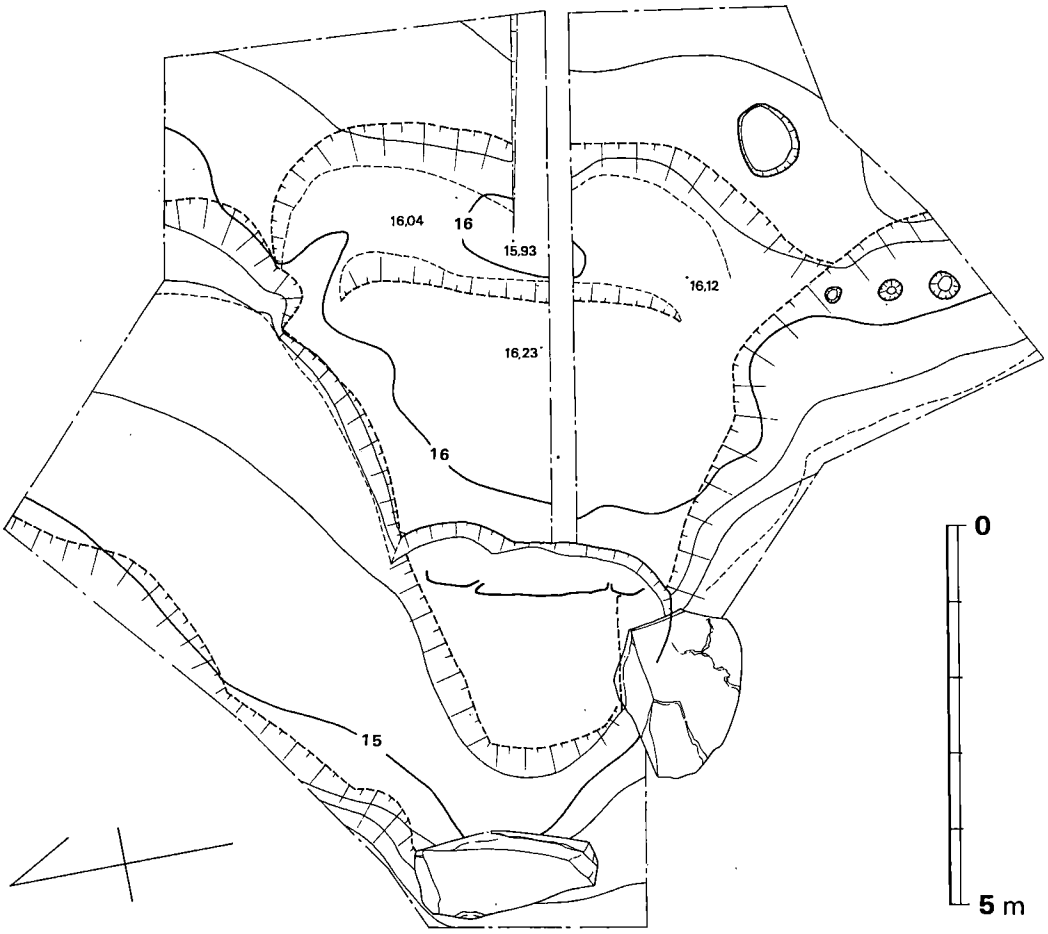
墳丘は削平され殆んど残らず，石室の東側平坦部に周溝が幾らか残るのみである。周溝断面（第23図）は，40*cm*程と浅く，幅約２*m*で，石室中心より溝石室側下端まで約５*m*である。これより単純に推定すると，径10*m*前後の墳丘を有する，斜面に築造された円墳と考えられる。

石室部は，玄室の東南隅側が残存するのみである。当初から南・西に各々大石がみられたが，いずれも原位置を動いており，天井石乃至腰石に使用したものであろう。花崗岩培乱土と，



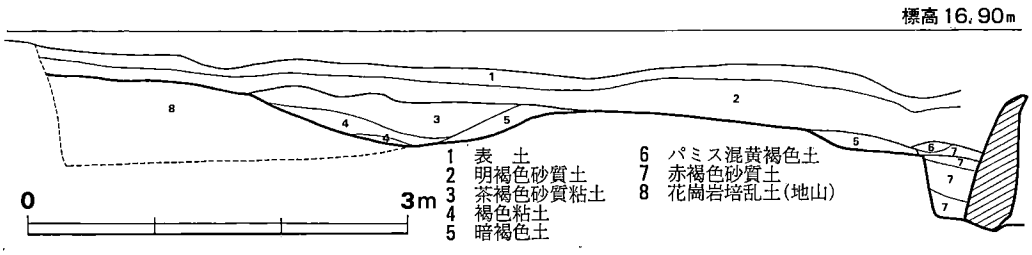
第21図　1・2号土壙墓実測図（1/40）

斜面側でその上にのる暗茶褐色砂質土層の地山を50cm程掘り下げて墓壙とする。墓壙壁より25cm離して扁平な腰石を立てて横位に据え，割と丁寧に裏込めを地山上面まで行なう。その後石室を構築しながら盛土（第23図5・6）をしたものと思われる。腰石は，東壁のみ残り，大小

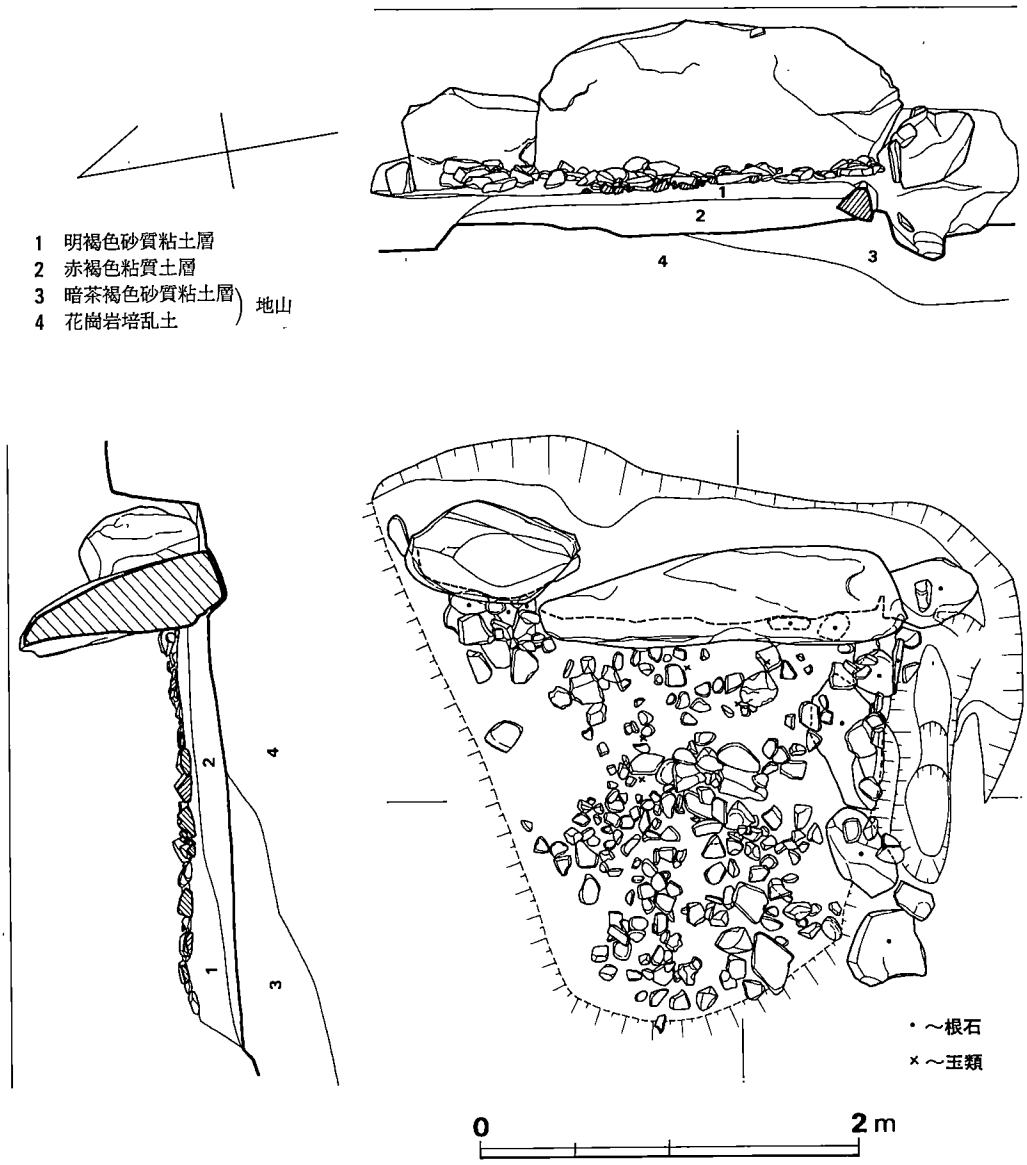


第 22 図　広田1号墳地山整形面測量図(1/100)

2個がみられる。南壁は20cm程掘り窪めた腰石掘方が検出された。その石室内側沿いに70～25cm大の大きな根石が敷石下に4個並んでいた。これは腰石の残存する東壁にはみられないことで，明らかに意識して大きな根石を込めたもので，南側を奥壁としたものと考えられる。つま



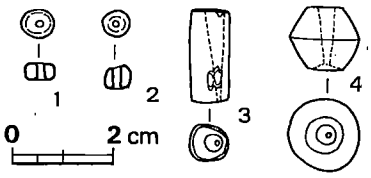
第 23 図　広田1号墳周溝断面実測図 (1/60)



第 24 図　広田1号墳石室実測図(1/40)

り，この古墳は主軸をS10°Wにとる横穴式石室である。床面は，墓壙底面から25cm程盛り土を敷き固め，20～10cm大の敷き石を並べ，更にその間に5cm大の小礫を充塡している。残存床面幅2.1mを測る。

副葬品は，床面左側壁寄りに，碧玉製管玉，水晶製算盤玉，ガラス小玉等が検出され，周溝埋土中より須恵器壺・器台片が，北側崖下より石材多数とともに須恵器甕片若干が出土した。



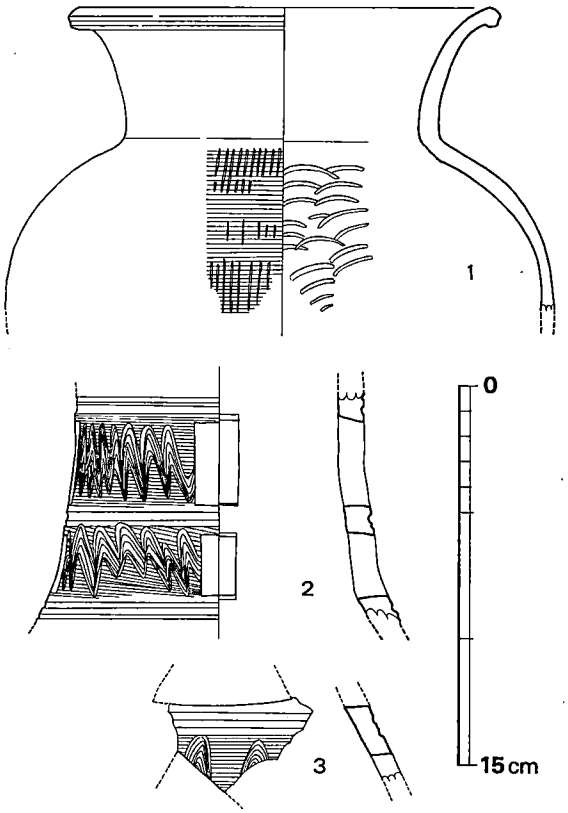
第25図 広田1号墳出土玉類実測図（2/3）

b 遺　物

ガラス小玉（第25図1・2）コバルトブルーを呈し，1は径6.0㎜，厚さ3.0㎜，重さ0.15㌘で，2は径5.3㎜，厚さ4.6㎜，重さ0.2㌘。

碧玉製管玉（第25図3）濃緑色を呈し，長さ17.8㎜，径7.8㎜，孔径3.4～1.2㎜，重量1.7㌘で，片面より穿孔し，断面はやや歪つとなる。

水晶製算盤玉（第25図4）表面かなり擦れて磨ガラス状を呈する。径13.8㎜，厚さ12.2㎜，孔径3.0～1.0㎜，重量3.0㌘。片面より穿孔し，反対側は広く漏斗状に加工する。



第 26 図　広田1号墳周溝出土須恵器実測図（1/3）

須恵器壺（第26図1）口縁部を丸く肥厚させ，端部は僅かな凹線を巡らす。胴部は丸く張り，小型の壺となる。胴外面は，縦方向の平行条線叩きの上に全面にカキ目を施こす。内面には粗い青海波叩きみせる。胎土精良で，焼きは甘く，白青灰色を呈する。

須恵器器台（第26図2・3）脚部片で2段以上の縦長の長方形透しを全周4ケ所に配する。透し上下間には各々2条の沈線を巡らし，その間にカキ目を施し，更にその後乱れた櫛描波状文を施す。長方形透しの幅は不明である。3は，沈線，カキ目を施した上に櫛描波状文を巡らし，その後三角形透しを千鳥気味に近接して配置する。小破片であるが，その傾き等より，2の下の裾部に当たるものと考えられる。胎土に粗砂かなり含むが，焼成堅緻で灰黒色。

以上の外，石室の西側攪乱土中より弥生期に属すると思われる凹石・砥石等が出土しているが，直接関係ないと思われるので，後の包含層出土石器の項でまとめて取り上げた。

c 小　結

当古墳調査中に同丘陵付近をかなり細かく歩いたが，路線内は勿論，外見上墳丘或いは石室

と思われるものは発見出来なかった。殊に，今回調査でⅡ区とした丘陵先端部頂面は前面(北)及び東西に水田面（小平野）を見下し，更に海岸線を広く眺める景勝の地であり，古墳を営むには絶好の地と考えられたが，全面地山まで剝いだにも関らず，結局古墳の痕跡すら見られなかった。近世墓地も営まれており，後世全く削平されたと考えざるを得ない。

石室部も殆んどが破壊，削平されているため，全容はつかめないが，略北へ開口する横穴式石室で，玄室床面幅2.1(+α)*m*と，小さくはない。移動されている石材の大きさ等を併考しても，終末期的な古墳ではなく，須恵器からみても初築は6C後半代を下らないものと考える。

当地域においては，後期群集墳はかなり発見されてはいるが，調査されたものは数少ない。本書所収の水付古墳は，略同時期のの初築で丘陵先端ではないにしても頂部に占地する。本古墳は斜面の中位に営まれる。この相違はどこから来るのであろうか。後者は，例えば上に更に古手の古墳が既に営まれていたというような，丘陵頂面に作れない何らかの制約があったとも考えられる。

3 歴史時代の遺構と遺物

a 住居跡

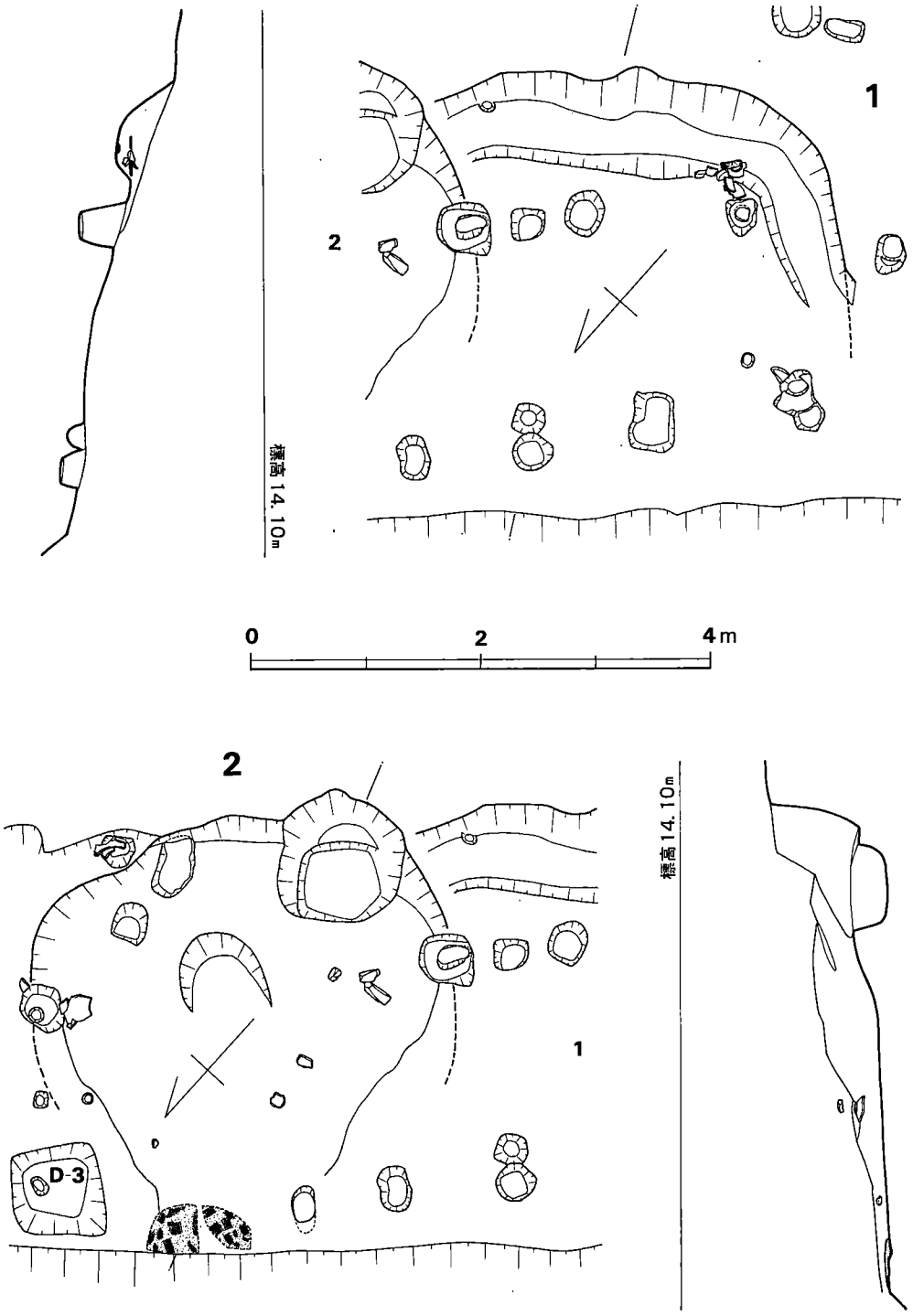
Ⅰ区北端からⅢ区北端に至るまでの水田面より一段上の丘陵麓緩斜面に竪穴住居跡と思われる遺構が8軒並ぶ。孰れも西側斜面は削除されて規模は明確ではない。うち2軒は，略円形プランを呈し，壁の傾斜が極めて穏やかな特異な竪穴で，後述する如く，工房的な施設と考えられるものである。各住居跡相互の切り合いは下記の如くである。（矢印は古→新を示す。）

1 ⟶ 2　　4 ⟶ 3　　6 ⟶ 5

第1号住居跡（第27図）南端に位置し，北東側を第2号住居跡に切られる。方形プランで一辺4*m*弱と推測され，壁に沿って幅70*cm*の広い周壁溝がつくられる。4本柱で上屋をつくるかと思われる。覆土中には鉄滓かなりと鞴羽口片数点がみられ，須恵器・土師器も多く出土した。床面には炭火物が若干みられたが，火災に会ったという程顕著ではない。

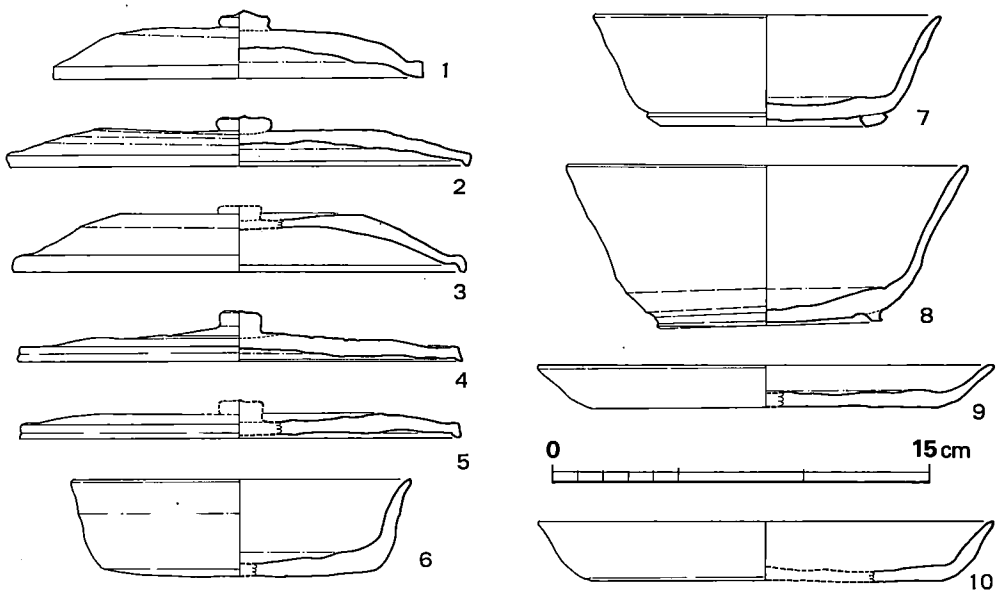
床面出土土器（第29図）

須恵器蓋（1～5）1は，扁平な擬宝珠状撮を付け，鳥嘴状口縁は内面に明瞭な段はつくらないが外端面僅かにへこみ，先端は鋭い。径の小さいタイプで14.7*cm*を測り，天井外面はヘラ削りの上をナデている。内外両面に径のやや小さい口縁の器物の重ね焼き痕がみられる。胎土に粗砂少量含み，焼成堅緻で灰黒色を呈する。2は，扁平で18.3*cm*と大きな径のタイプで撮をつける。天井外面はヘラ削りを施し，内面はナデツケを行なう。胎土に粗砂少量含み焼成甘く灰白色を呈する。3は，やや高く，径18.0*cm*を測る。口縁外面は丸く屈折し，端部は丸くおさ



第 27 図　第 1 ・ 2 号住居跡実測図 (1/60)

第 28 図　広田Ⅲ区遺構配置図 (1/200)



第 29 図　第1号住居跡床面出土須恵器実測図（10は土師器）（1/3）

める。天井外面はヘラ削りのままで，内面はナデツケを施す。胎土に粗砂幾らか含み，焼成堅緻で灰黒～暗紫色を呈する。4は，ボタン状に近い撮を付け，扁平で径17.5cmを測る。鳥嘴状口縁はシャープで外端面ややへこむ。天井外面は粗いヘラ削りの上をナデツケている。焼きは良く灰色をなす。5は，扁平で径17.4cm，口縁は先端がやや丸味を帯び，外端面はややへこむ。天井外面はヘラ削りの上をナデ，内面中心部のみナデツケを施す。

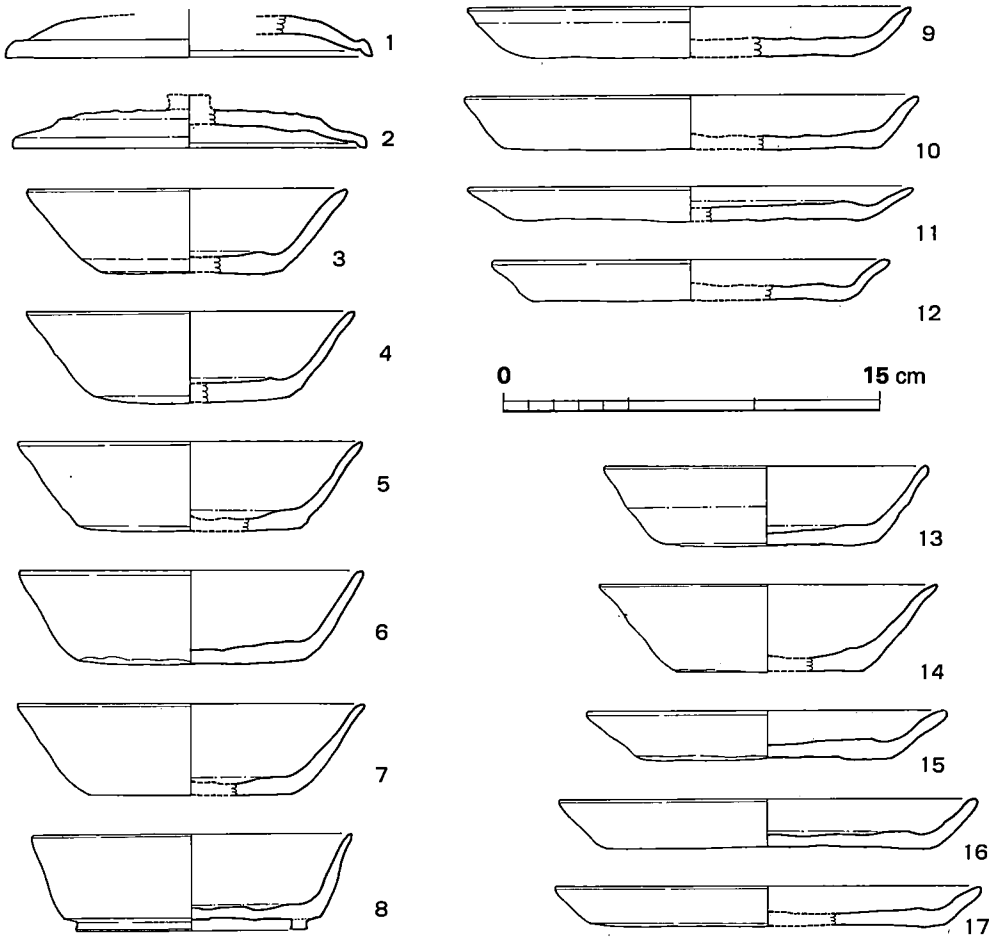
須恵器杯（6～8）6は底部ヘラ切離しで，体部は外傾度少なく，口縁部で僅かに開く。口径13.5cm，器高3.8cm，底径10.9cmを測り，胎土に粗砂僅かに含み，焼成軟質で灰色を呈する。7は，低くて内端が接地する高台を付け，口径13.6cm，器高4.4cm，高台径9.4cmを測る。底外面は削り離しのままで内面はナデツケ，他は横ナデ。8は，深くて大きく開く器形で，低いが外へやや張り出す高台を付ける。体部下端にはヘラ削りを施し，底外面もヘラ削りのままである。体部の一部が大きく焼き歪む。口径15.8cm，器高6.3cm，高台径8.9cmを測り，胎土に粗大石英僅かに含むが大旨精良で，焼成堅緻，内面暗紫褐色，外面暗灰色～黒灰色を呈する。

須恵器皿（9）底部はヘラ切離し後ナデツケを行ない口径18.0cm，器高1.7cmを測る。胎土精良で焼成堅緻，青灰色を呈する。

土師器皿（10）口径17.9cm，器高2.3cmで，胎土に粗砂幾らか含む。

覆土中出土土器（第30図）

須恵器蓋（1・2）1は，口径14.4cmを測り，鳥嘴状口縁は外面が丸く屈曲し，先端は外方へ張り出す。焼成甘く灰白色を呈する。2は，口径14.0cm，天井上面は粗いヘラ削りの上ナデツケ，口縁外面は丸く屈曲する。



第 30 図　第１号住居跡覆土中出土須恵器・土師器（13～17）実測図（1/3）

須恵器杯（３～８）３は，口径12.6㎝，器高3.3㎝，底径 7.2㎝を測り，体部下端～底部はヘラ削りによる。焼成堅緻で灰色を呈する。４は，底部に比べて体部薄手で直線的に開く。口径12.9㎝，器高3.6㎝，底径7.8㎝を測る。焼き甘く灰白色を呈する。５は，底部ナデツケがみられ，焼成堅緻で暗灰色をなし，口径13.7㎝，器高3.6㎝，底径8.9㎝を測る。６は，底部ヘラ切離し，口径13.6㎝，器高3.7㎝，底径8.8㎝を測り，焼成やや甘く淡青灰色。７は，口径は13.8㎝，器高3.6㎝，底径8.0㎝を測り焼きは甘く灰色を呈する。８は，低い高台を付け，体部と底部の境は角張り，体部の傾きは少ない，口径12.6㎝，器高3.8㎝，高台径9.1㎝を測り，底外面はヘラ切離しのままで焼きは良く青灰色を呈する。全体に精緻な作りである。

須恵器皿（９～12）９は，口径17.5㎝，器高2.0㎝，底部はヘラ切後粗いナデツケを行ない，焼成やや軟質で淡灰色を呈する。10は，底部と体部の境が割とシャープで，口径17.9㎝，器高2.1㎝を測る。焼成堅緻で青灰色を呈する。11は，口径17.6㎝，器高1.4㎝と浅いタイプであ

る。12は，径15.7㎝，器高1.6㎝と小さい類で焼成軟質で灰黒色。

土師器杯（13・14）13は，口径12.8㎝，器高3.2㎝，底径8.5㎝を測り，底部ヘラ切離し，白灰色を呈する。14は，口径13.4㎝，器高3.4㎝，底径7.5㎝を測り，焼きやや悪く，全体に磨滅する。

土師器皿（15～17）15は，口径14.2㎝，器高2.0㎝の小振りのもので，焼き不良で全体に磨滅する。16は，口径16.5㎝，器高2.0㎝で，焼きやや悪く淡白茶褐色を呈し器表磨滅する。17は，口径16.8㎝，器高1.6㎝を測り，胎土は大旨良で，全体に磨滅する。

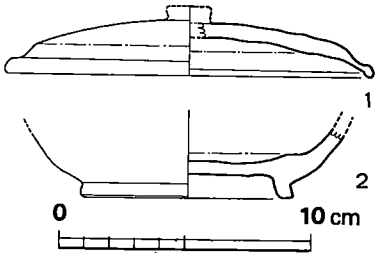
第2号住居跡（第27図）第1号住居跡を切って，更に東側では，第4号住居跡を切って北東～南西へ延びる溝を切る。北西側は削られて全容はつかめないが推径3.8㎡前後の略円形プランとなる。壁は傾斜が穏やかで，全体に皿状の窪みとなる。南側壁際に径約1㎡の壙が穿たれ，炭・焼土等もみられるが壁は焼けていない。中央付近にも浅い窪み部がみられるが，柱穴と思しきものは検出されない。北端部2ケ所隣接して，炭を多く混入した焼土塊がみられた。床面には，20～30㎝大の礫3個と砥石・土器類がみられ，覆土中・床面を問わず鉄滓・炭・焼土片が多量に出土した。

この時期に於いては特異なプランと断面を呈したこの竪穴は，炉等具体的な施設は検出されなかったが，出土遺物等から鍛冶関連の一種の工房跡と考えられる。

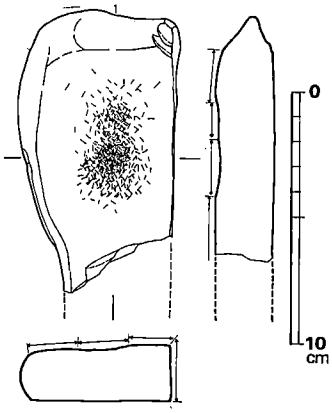
床面出土遺物

須恵器蓋（第31図）　鳥嘴状口縁は完全に先端・外面ともに丸くなっており，天井外面はヘラ削りの上をナデツケる。口径14.5㎝を測り，胎土に粗砂少量含むが焼成堅緻で淡青灰色を呈する。

須恵器杯（第31図2）丸味を帯びてやや外へ張り出した高台で，内側を削り出した様になる。胎土に細砂少量含み，焼成甘く白灰色を呈する。高台径 8.3㎝。



第31図　第2号住居跡床面出土須恵器実測図（1/3）

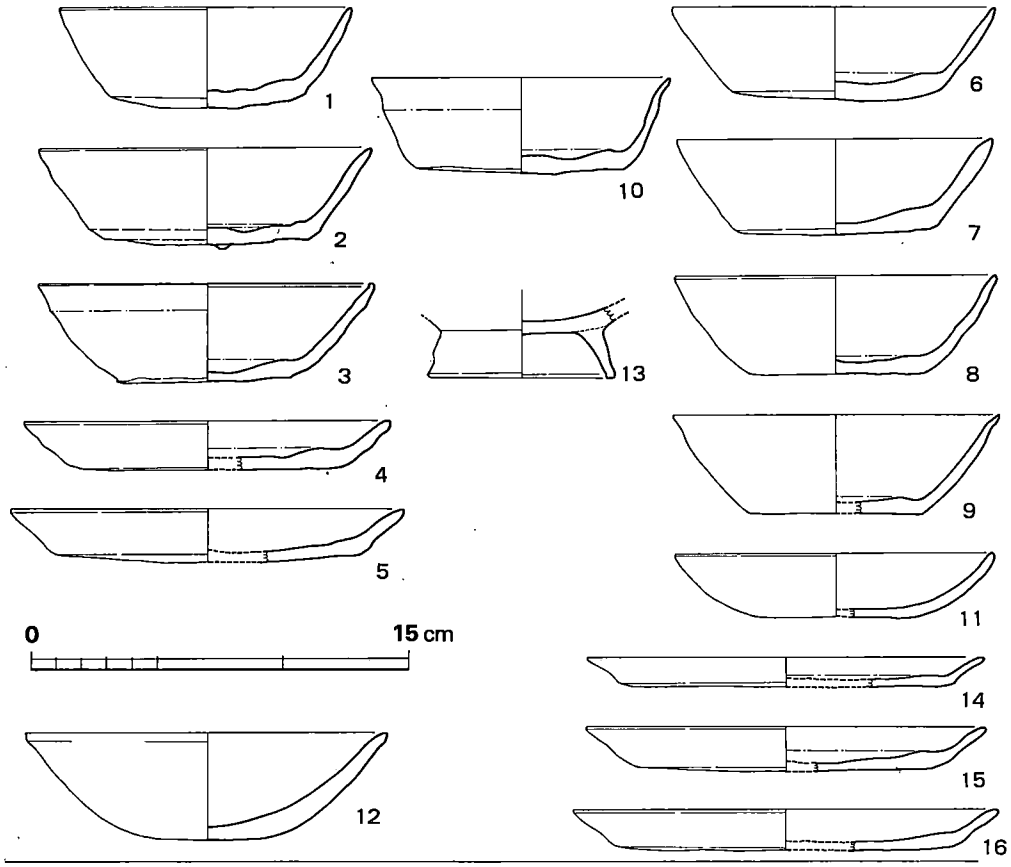


第32図　第2号住居跡出土砥石実測図（1/3）

砥石（第32図）粘板岩製で，上面と右側面を使用する仕上げ砥。上面中央部には，2～3㎜長さの短い線状の疵が集中してみられ，その結果凹部をつくる。

覆土中出土遺物（第33図）

須恵器杯（1～3）1は，口径11.5㎝，器高3.9㎝，底径7.7㎝で底部はヘラ切離しを行なう。僅かに丸底気味で，焼成堅緻，胎土に細砂かなり含む。2は，底部周辺は粗いヘラ削りがみられ，体部は直線的に開く。口径13.1㎝，器高3.8㎝，



第 33 図　第2号住居跡覆土中出土須恵器（1～5）・土師器実測図（1/3）

底径 8.0㎝を測り，胎土に粗砂かなり含み，焼成堅緻で淡青灰色を呈する。3は，口縁端内面に段をつくり，底部はヘラ切り後目の細かいスノコ様圧痕が残る。口径 13.2㎝，器高 3.9㎝，底径7.0㎝で，胎土に粗砂幾らか含み，焼成やや軟質で瓦質に近い。

須恵器皿（4・5）4は，口径14.4㎝，器高1.9㎝の小振りの皿である。5は，口径15.4㎝，器高2.1㎝で，4・5孰れも焼成やや軟質で灰白色を呈する。

土師器杯（6～12）6は，口径12.8㎝，器高3.6㎝，底径8.2㎝を測り，焼成不良。7は，口径12.4㎝，器高3.8㎝，底径8.0㎝を測り，全体に磨滅著しい。8は，口径12.8㎝，器高3.9㎝，底径7.0㎝を測り底部ヘラ切りによる。9は，口径13.0㎝，器高 3.9㎝，底径 6.9㎝を測り口縁外面がややへこむ。10は，底部ヘラ切り離し，口縁部僅かに外反する。口径 11.8㎝，器高 3.8㎝，底径8.1㎝を測る。11は，浅い皿形で口径12.7㎝，器高2.5㎝を測り，焼成やや良で淡褐色を呈する。12は，丸底状の椀形で，胎土精良，口径14.2㎝，器高4.3㎝を測る。

土師器椀（13）外に張る高い高台を付すもので胎土精良，焼成良好で淡茶色を呈する。

土師器皿（14～16）14は，器表磨滅しているが，扁平で口径15.7㎝，器高1.2㎝を測る。15は，

径15.8cm，器高1.8cmを測る。胎土に細砂僅かに含み，器表磨滅する。16は，口径16.8cm，器高1.6cmを測る。

第3号住居跡（第34図）

第2号住居跡の北に第4号住居跡を切って営なまれる。西半殆んどは削除されるが，一辺8m弱の大型方形プラン。壁際に幅 100～40cmの広い周壁溝を巡らす。床面に10余個の小pitがみられるが，主柱穴は不明，床面中央附近に炭を若干含んだ焼土塊をみる。

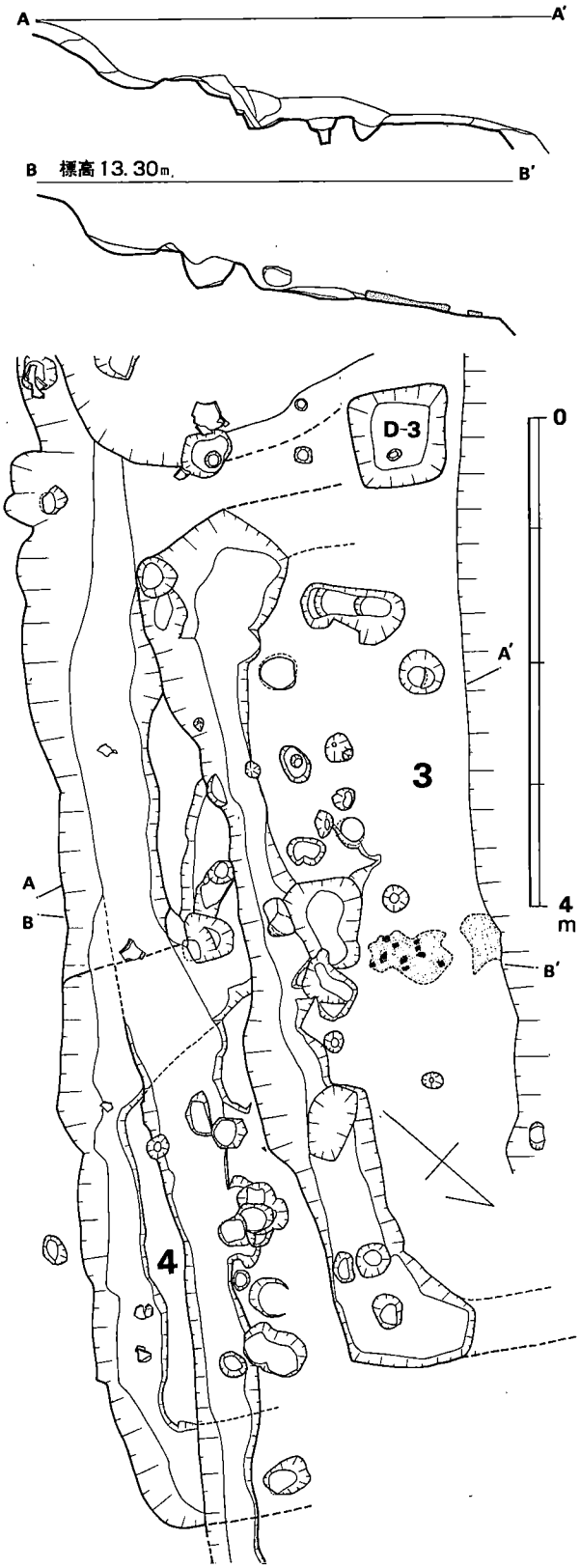
出土遺物（第35・36図）

須恵器蓋（1） 口径17.4cmの扁平なもので口縁端部は外面丸くふくらみ，天井外面はヘラ削りの上ナデツケ。焼成やや甘く，淡(青)灰色。

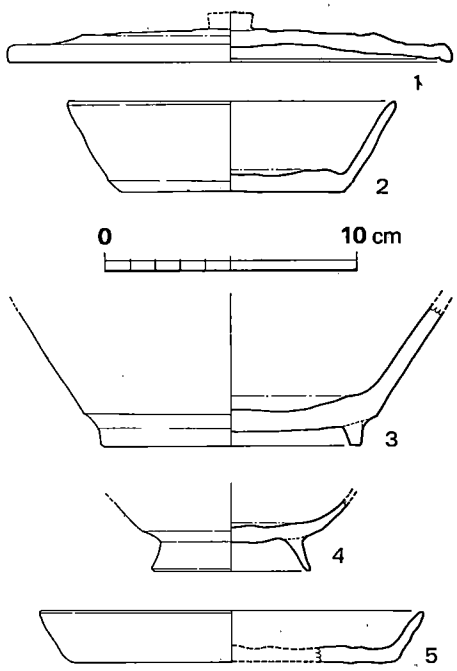
須恵器杯（2） 底部付近をヘラ削り後ナデており，胎土に粗砂僅かに含み，焼成軟質で灰白色。口径12.9cm，器高3.6cm，底径8.8cm。

土師器椀（3・4） 3は，底～体部境近くに高台を付けて，直線的に開く大型の器種である。高台径10.3cm。4は，細長く外へ張る高台を有し，薄手で，焼成やや不良で器表磨滅。

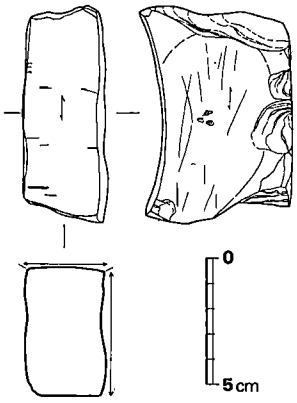
土師器皿（5） 体部がやや立つもので，口径15.2cm，器高 2.1cm。胎土に細砂少量含み，焼成良好で淡茶色。底部に糸圧痕がみられ，幅2.45mm，長さ4.50mm＋α を測る。



第34図　第3・4号住居跡実測図（1/60）



第 35 図　第3号住居跡出土須恵器（1.2）・土師器実測図（1/3）

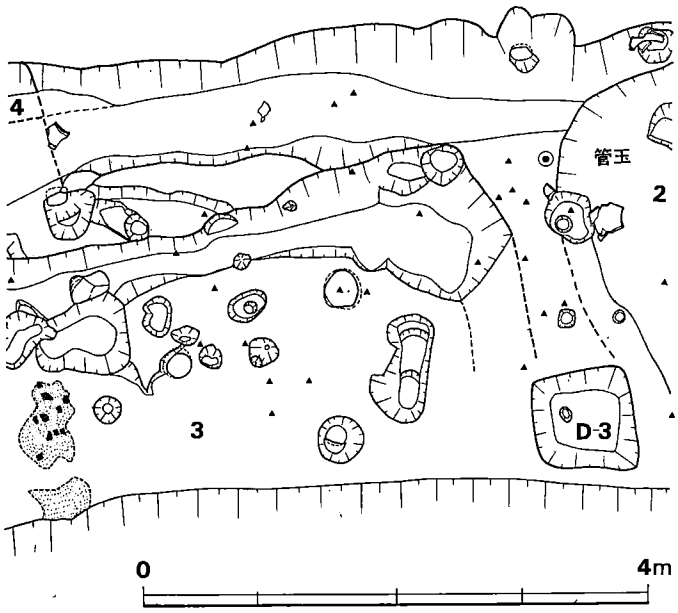


第 36 図　第3号住居跡出土砥石実測図（1/3）

砥石（第36図）

粘板岩製で仕上げ砥。使用度著しく，上面は大きく磨減り，右側面も，中央が凹状となり，粗い擦痕がみられる。

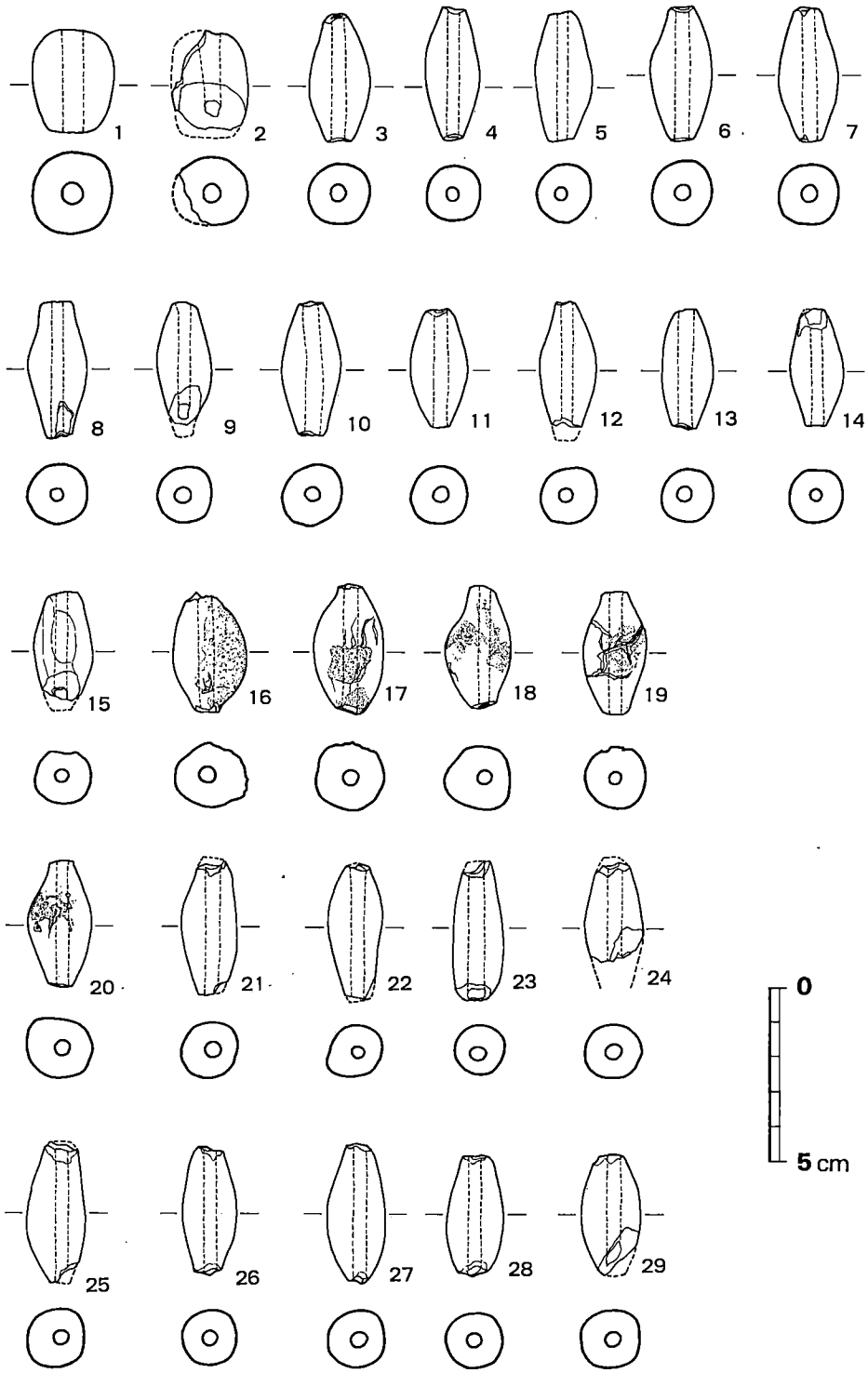
以上の遺物の他に，第3号住居跡覆土をを中心として第2号住居跡北側までの間に，土錘29点が出土した（第37図）。孰れも略同類であり，径3 *m*の円の中に集中しており，遺構に伴うものではないので，錘を付けた網そのものを廃棄したものと思われる。



第 37 図　第3号住居跡付近覆土中土錘出土状況（1/60）

土錘（第38図・表）

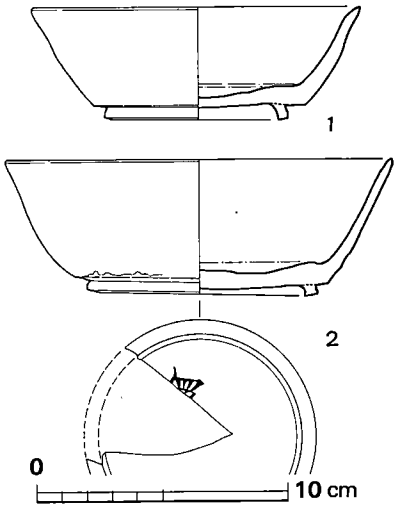
大別して，俵形で太いもの（A～1・2）と，細身で紡錘形のBタイプ（3～29）に分けられる。Bタイプは，胎土が精製されるもの（B—1タイプ），粗砂多く含むもの（B—2タイプ）に分けられる。これらのうち，高熱を受け，表面が石炭殻状を呈するものがみられ，その原因に疑問が残る。



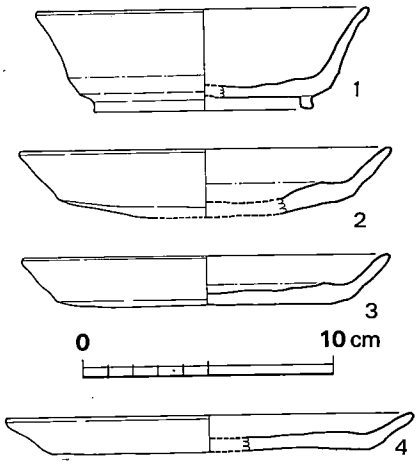
第 38 図　第 3 号住居跡周辺包含層出土土錘実測図　(1/2)

表　第3号住居跡付近覆土中出土土錘一覧表　（単位mm・g）

	No.	長さ×最大径×孔径	重量	焼成（色調）	胎土	形態	備考
A タイプ	1	28.9×22.2×4.9	13.4	（土師質）軟質（淡茶色）	粗砂粒多く含む	俵形	
	2	(27.2)×20.9×5.2	(6.8)	軟質（灰茶色）	〃	〃	½欠損
B—1 タイプ	3	35.6×17.1×3.4	6.7	（須恵か瓦質）硬質（灰色）	精良	紡錘形	
	4	36.5×15.0×3.0	5.7	〃（灰色～淡褐色）	〃	〃	
	5	36.1×19.1×3.2	7.0	〃（〃）	〃	〃	端一部欠損
	6	37.5×17.9×3.4	6.9	〃（灰色～淡茶色）	〃	〃	
	7	37.3×17.1×3.6	7.2	〃（淡茶色～灰色）	〃	〃	
	8	37.8×16.0×3.1	6.8	〃（〃）	〃	〃	
	9	(33.6)×15.4×4.0	(5.4)	〃（灰色～淡褐色）	〃	〃	端部欠損
B—1′ タイプ	10	36.8×17.0×4.1	6.7	（土師質）軟質（淡茶色～淡褐色）	〃	〃	
	11	32.4×15.9×3.6	5.7	〃（淡茶色）	〃	〃	
	12	(34.6)×15.5×3.8	(5.5)	〃（〃）	〃	〃	端部欠損
	13	33.0×14.6×3.4	4.8	〃（〃）	〃	〃	
	14	32.7×15.7×3.3	4.7	〃（〃）	〃	〃	端一部欠損
	15	(29.9)×16.4×3.9	(5.7)	〃（淡褐色～淡茶色）	〃	〃	〃
B—1″ タイプ	16	33.1×20.9×3.9	5.3	硬質（赤茶色～灰黒色）	〃	〃（変形）	高熱を受け部分的に石炭塊状呈す　以外と軽く軽石的
	17	35.0×19.6×4.1	5.8	〃（暗灰色）	〃	〃（〃）	〃　〃
	18	33.5×18.3×3.0	6.1	〃（暗灰色～淡茶色）	〃	〃（〃）	〃　〃
	19	33.6×18.0×3.7	6.6	〃（暗灰色）	〃	〃（〃）	〃
	20	34.9×17.7×3.4	5.7	〃（灰色～茶色）	〃	〃（〃）	〃
B—2 タイプ	21	36.5×16.0×4.0	7.0	不良（淡茶色）	粗砂粒多く含む	〃	端一部欠損
	22	37.5×14.9×3.9	6.3	〃（〃）	〃	〃	〃
	23	38.9×15.4×3.4	6.8	〃（〃）	〃	〃	〃
	24	(28.4)×17.1×4.0	(5.6)	〃（〃）	〃	〃	⅓欠損
B—2′ タイプ	25	38.9×16.4×3.4	8.2	不良（黒褐色）	粗砂粒多く含む	紡錘形	表面煤付着
	26	36.3×16.2×3.3	7.2	〃（〃）	〃	〃	〃
	27	38.4×15.6×3.7	7.9	〃（〃）	〃	〃	〃
	28	33.2×16.0×3.8	6.9	〃（〃）	〃	〃	〃
	29	32.6×17.3×3.8	(6.5)	〃（〃）	〃	〃	端部欠損



第39図　第４号住居跡床面出土須恵器実測図（1/3）



第40図　第４号住居跡覆土中出土須恵器・土師器(4) 実測図（1/3）

第４号住居跡（第34図）第３号住居跡の東側に，第３号住居跡及び北東から南西へ走る溝状遺構に切られる。西側の殆んどを削除され，全容は知り得ないが，一辺約 4.5 *m*の方形住居跡と推定される。壁際には40～80*cm*幅の広い周壁溝をつくる。

床面出土遺物（第39図）

須恵器杯（１・２）１は，外に張り内側端で接地する高台を付け，底面ヘラ削りで，体部との境はシャープである。口径13.0*cm*，器高 4.4*cm*，高台 7.3*cm*を測り，粗砂かなり含み，焼成堅緻で暗青灰色を呈する。２は，短かく内端で接地する高台を付け，底部はヘラ削りで体部との境は角ばる。口径15.2*cm*，器高5.3*cm*，高台径 9.0*cm*。底面に墨書文字がみられる。極めて薄くて判読不能。

覆土中出土遺物（第40図）

須恵器杯（１）短かい高台を付け，底～体部の境はヘラ削りで稜をなす。体～口縁部はやや外反し，端部は丸く収める。口径13.1*cm*，器高4.0*cm*を測る。

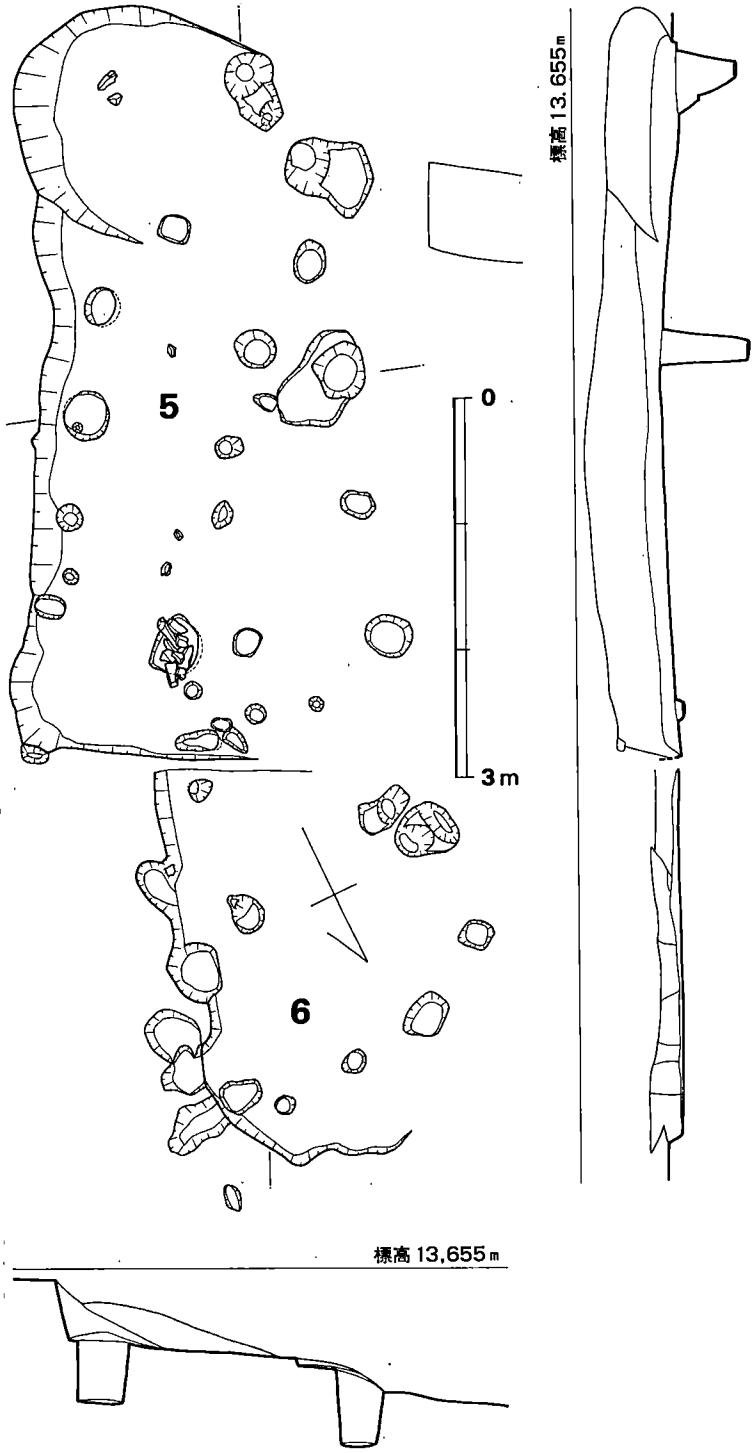
須恵器皿（２・３）２は，口径14.8*cm*で器壁厚く，やや丸底状となる。３は，口径14.5*cm*，器高1.9*cm*。底部はヘラ削りの上を縁辺のみナデる。孰れも細・粗砂幾らか含み，焼成堅緻。

土師器皿（４）口径16.1*cm*，器高 1.5*cm*を測り，体部外側は僅かにへこむ。器表磨滅。

第５号住居跡（第41図）第１～４号住居跡群の東側に位置し，北東側で第６号住居跡を切る。北西半は削除されて全容は知り得ないが，一辺 5.5*m*の方形プランを呈する。柱穴は多くあるが，主柱として明確に並ぶものはない。

出土遺物（第42図）

須恵器杯（１～３）１・２は床面出土，３は覆土中出土である。１は，低い高台を付けて，底～体部の境はヘラ削りによりシャープに角張る。口径11.0*cm*，器高3.3*cm*，高台径7.5*cm*。２は，低い高台内端が接地し，体～底部境はヘラ削りの上をナデて稜をつくり角張る。３は，低い高台内端が接地し，体部へは丸く屈曲して立ち上がる。底外面は粗いヘラ削りのままで，口



第 41 図　第5・6号住居跡実測図（1/60）

径 13.4 *cm*，器高 3.4*cm*，高台径8.8 *cm*。

第6号住居跡

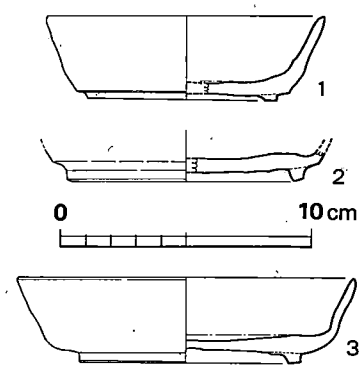
（第41図）

南側は第5号住居跡に切られ，西側殆んどを削除されその規模は知り得ないが，一応方形プランと推定しておく。床面には数個の小 pit が検出されたが，主柱穴と認められるものはない。出土遺物も実測に供せられるような類は無いが，他住居跡同様，略 8 C 後半代。

第7号住居跡

（第44図）

第6号住居跡の北隣に位置し，第2号住居跡同様，壁が緩斜面をなし，径 3.7*m*の略円形プランを呈する。西側半は削除され，床面には20*cm*



第42図　第5号住居跡出土須恵器実測図（1/3）

大の角礫数個がみられるが，主柱穴らしきものはない。第2号住居跡と同じ様相をみせており，住居跡というよりも工房的性格を有する遺構と考えたい。

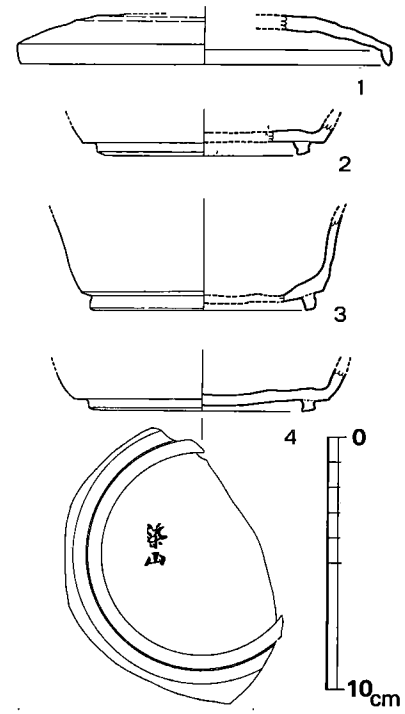
床面出土遺物（第43図）

須恵器蓋（1）天井上面にはヘラ削りがみられ，口径14.6cmと測る。

須恵器杯（2～4）2は，低く内端で接地する高台を付け，体部と底部の境はシャープに角ばる。3は，底部を削りの後ナデて，体部との境を明瞭にしている。4は，内端が接地する短かい高台を付け，底部ヘラ切離しにより体部への境がシャープに角張る。底面には「染山」の墨書がみられる。胎土に細砂僅かに含み，焼成堅緻で淡青灰色。高台径 9.0cm。

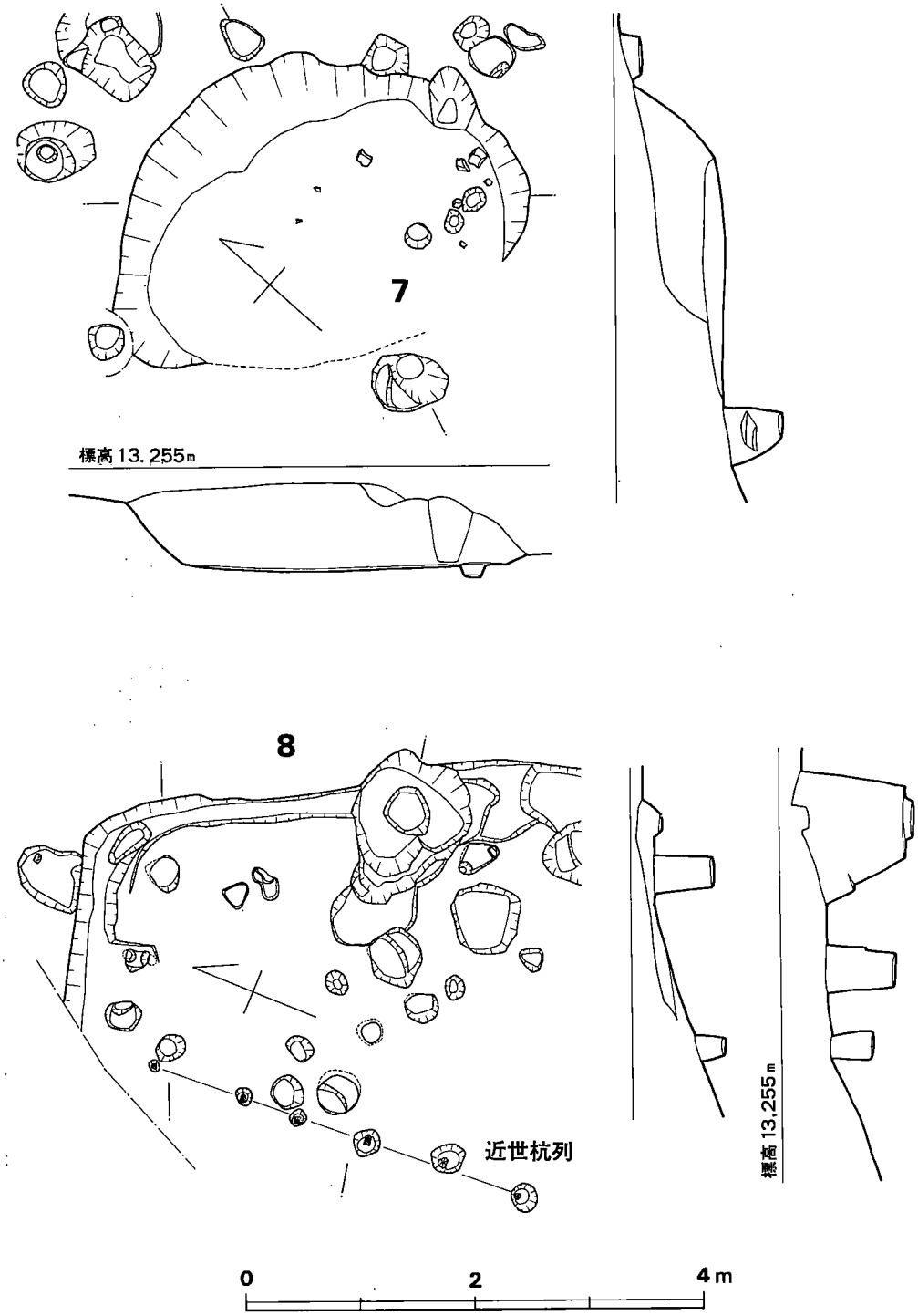
覆土中出土遺物（第45図）

須恵器蓋（1～4）1は，中心のへこむ大きな撮を付け，径が小さく深い特異な器種で，通常の杯の蓋ではなく，壺類等の蓋と考えられる。天井外面はヘラ削りを行ない，内面は粗いナデツケ。細砂多く含み，焼成やや軟質。2は，極めて扁平な，実際には手で撮めないような撮を貼付し，鳥嘴状口縁はシャープで，外面はへこむ。天井部はヘラ削りで，口径14.6cm，器高1.6cm。3は，器高高く，天井外面はヘラ削りを行ない，口縁端部は丸く収める。4は，天井外面ヘラ削りの上をヘラ磨き状に調整し，胎土精良で焼成やや甘く，白灰色。口径16.3cm。

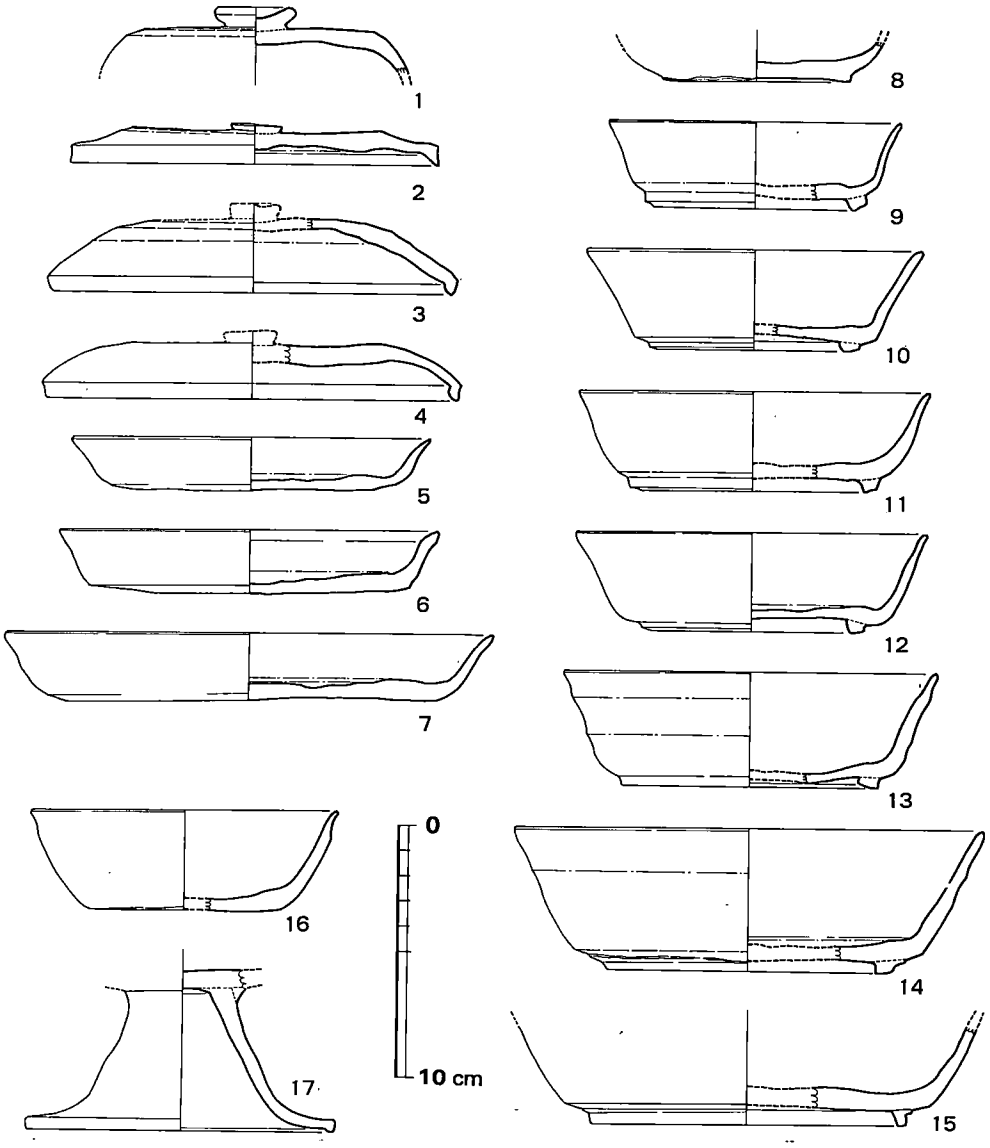


第43図　第7号住居跡床面出土須恵器実測図（1/3）

須恵器杯（8～15）8は，やや上げ底状の平底で，体部は丸く湾曲してゆき，特異な器形となる。底部には平行条線状圧痕（叩きかスノコ）が各方向に押圧される。9は，体部中途からやや外反して開き，内端で接地する短い高台を付す。口径11.6cm，器高 3.4cmを測る小型品。10は，体部全体に僅かに反り気味に開き，内端側半分で接地する低い高台を付け，底部はヘラ削りを行ない，体部との境に角ばった稜を残す。口径13.3cm，器高4.0cm。11は，内端で接地する低い高台を付け，高台底面はへこむ。体～底部の境は，明瞭ではないが部分的に削り後ナデて稜をなす。焼成甘く淡



第 44 図　第 7 ・ 8 号住居跡実測図（1/60）



第 45 図　第7号住居跡覆土中出土須恵器・土師器（16・17）　実測図（1/3）

青灰色。12は，内端で接地する低い高台を付し，底部から丸く屈曲して体部へ立ち上がる。口径13.9㎝，器高3.9㎝，高台径8.8㎝。13は，外端で接地する低い高台を付し，外面にナデによる凹凸をみせる。焼成軟質で灰白色。14は，口径18.5㎝，器高5.6㎝，高台径11.3㎝を測る大型品で，低い高台を付す。底部ヘラ削りで，体部との境は明瞭。焼成やや甘く淡青灰色。15は，高台径12.5㎝と大型品で，細身の高台を付し，体部～底部の境は明瞭。

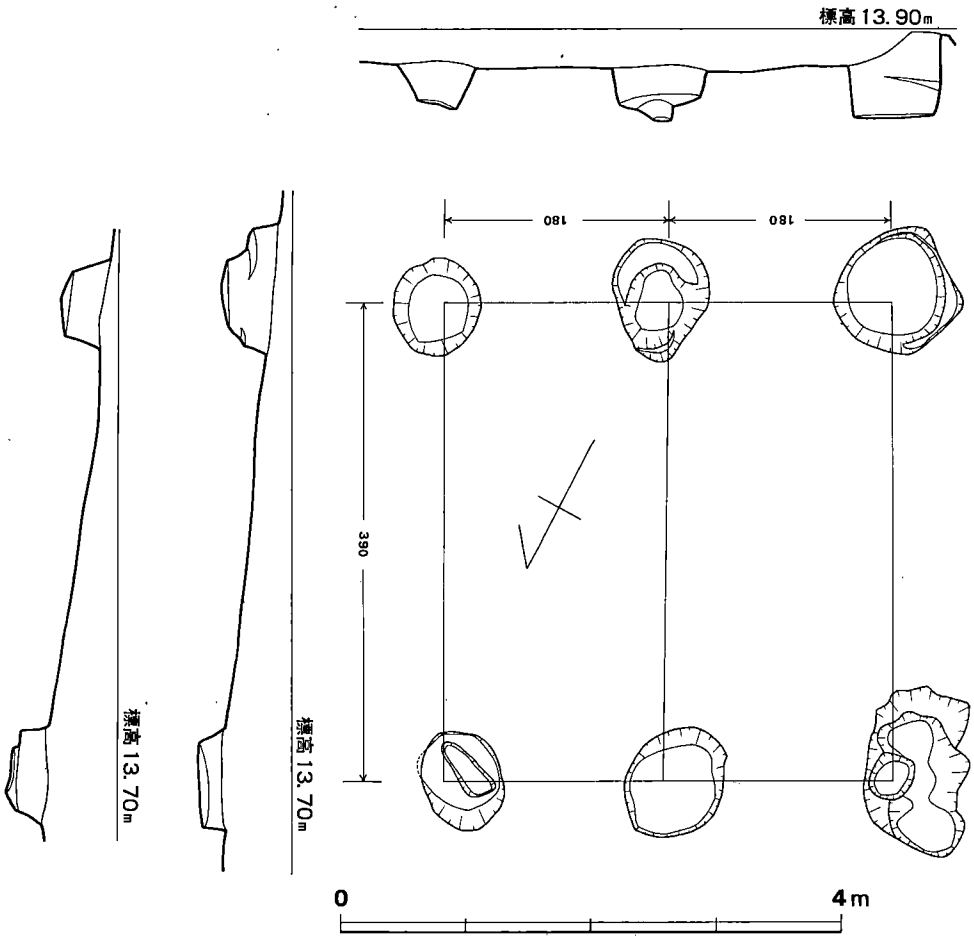
須恵器皿（5～7）5は，薄手で，底部ヘラ切り離し，口径14.2㎝，器高2.1㎝。6は，口径

15.0㎝，器高 2.5㎝，底部はヘラ削り後，丁寧なナデツケが施され，底～体部境はシャープ。7は，底部ヘラ削りのままで，口径19.3㎝，器高2.7㎝で焼成軟質，白灰色。

土師器杯（16）口縁外面へこみ，口径12.2㎝，器高4.0㎝，底径7.6㎝。焼成甘く磨滅著しい。

土師器高杯（17）脚柱中途で僅かにふくらみ，脚端部は丸くつまみ出す。胎土精良。焼成甘く全体に磨滅。

第8号住居跡（第44図）Ⅲ区発掘区北端に，細い溝状遺構を検出し，周壁溝と判断して住居跡とした。西半・南半は削平され，北東隅コーナーだけが残る。溝中より奈良時代須恵器小片をみるので他住居跡と略同時代。西側に近世杭列が並ぶ。実測に供せられるような遺物なし。



第46図　掘立柱建物実測図（1/60）

b 掘立柱建物（第46図）

Ⅰ～Ⅲ区の中央部に掘立柱建物（2×1間）1棟が検出された。柱穴は径50～40㎝大の略円

形掘方を呈し。柱根の痕跡は確認されない。北側列3本は，弥生土器を含む包含層上より切込まれ，南西端柱穴は，奈良時代以降と思われるPitから切られており，柱穴中の土器小片等からしても，住居群と略同期或いは若干遅れる奈良時代の範囲に収まる遺構と考える。

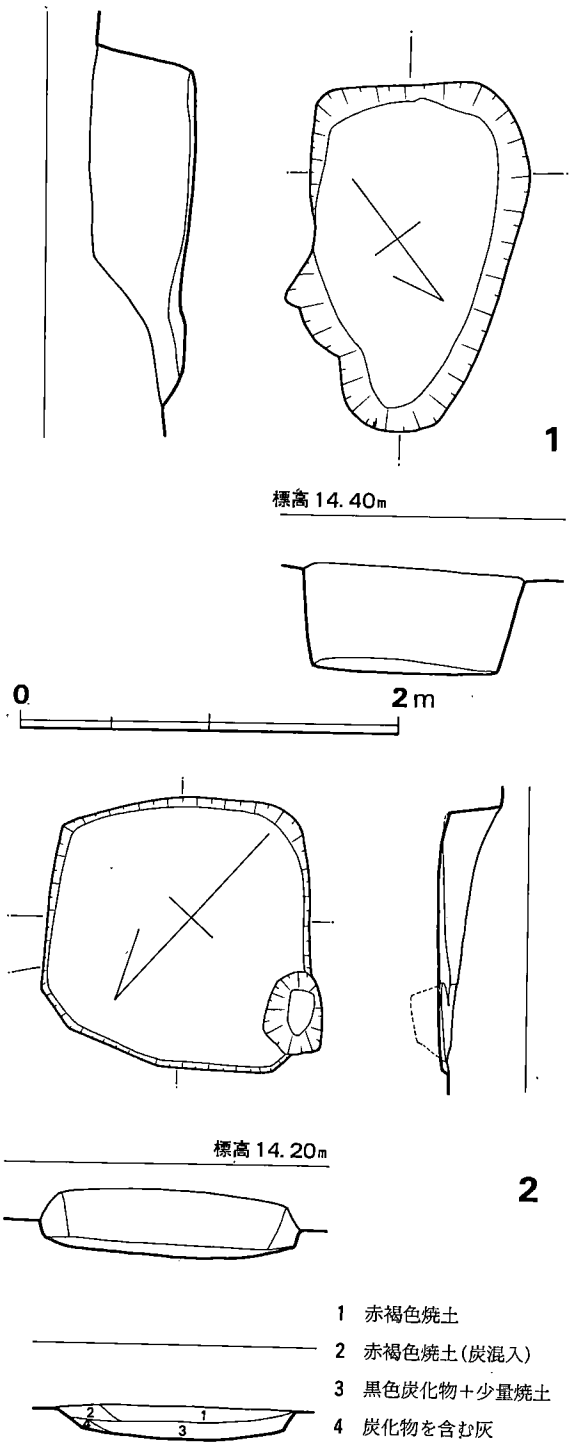
図示した1棟の外，I区の南端部のPit群の集中する部分に2×3間の建物が推定されるが，確実にまとまらないので，ここでは図示しなかった。また，Ⅱ区北寄りの第7号住居跡の北側に，図示したものと同様に梁柱間の長い，略南北方向に長い建物（1×3～4間）が考えられたが，西半が削平され，全容を知り得ず確実にまとまらないので，一応除外した。

c 土　　壙

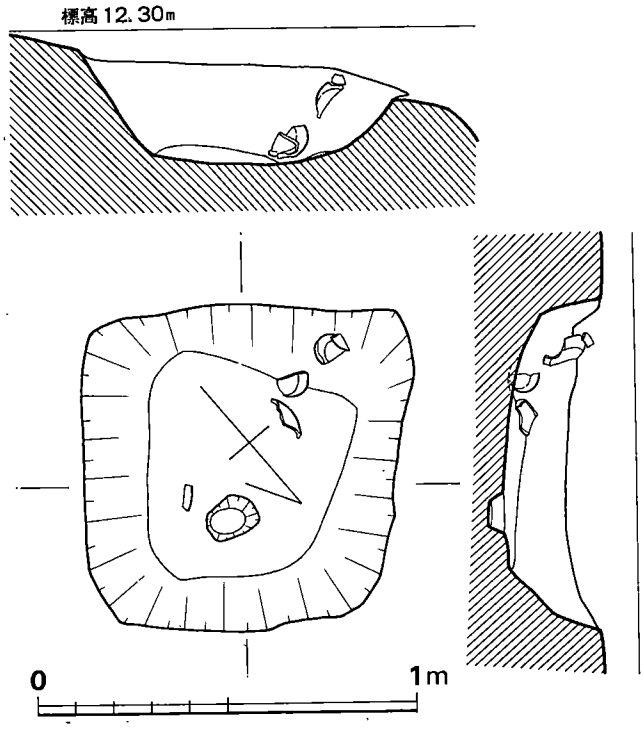
第1号土壙（第47図）　I区中央部の南側路線幅境界線寄りに長さ1.8*m*×幅1.15*m*の隅丸長方形の土壙墓状遺構が検出された。深さ55*cm*と深く，北東半は上半を削除され，覆土中より龍泉窯系青磁小片が出土した。中世土壙墓か。

第2号土壙（第47図）　第1号土壙の西側に位置し，1.4*m*四方の略方形の浅いもので，中には焼土・炭化物・灰等が塡まっていた。時期不明。

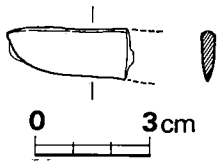
第3号土壙（第48図）　第2号住居跡の北に接して営なまれ，土層観察から第3号住居跡を切ると判断した。1辺80*cm*強の略方形プランで底部に小Pitをみる。



第47図　第1・2号土壙実測図（1/40）



第 48 図　第 3 号土壙実測図 (1/20)



第50図　第 3 号土壙出土鉄器実測面 (1/2)

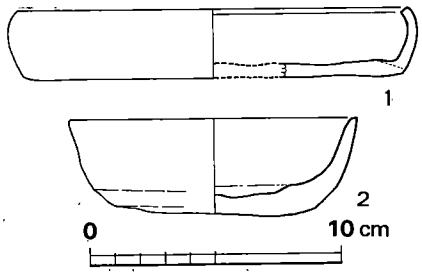
中より須恵器皿・土師器杯・鉄刀子片が出土した。

出土遺物

須恵器皿（第49図 1）　口縁内湾して端部は平坦面をつくり，口径15.5㎝，器高2.8㎝底径15.1㎝を測り特異な形態を有する。胎土に細砂多く含み，焼成軟質で灰色を呈する

土師器杯（第49図 2）　口径11.4㎝，器高3.9㎝，底径7.5㎝を測り，全体に部厚く体下端は，ヘラ削りの稜が残る。口縁端部は残り部分が少ないが平坦面をつくる。胎土精良で，焼成良く明茶色を呈する。

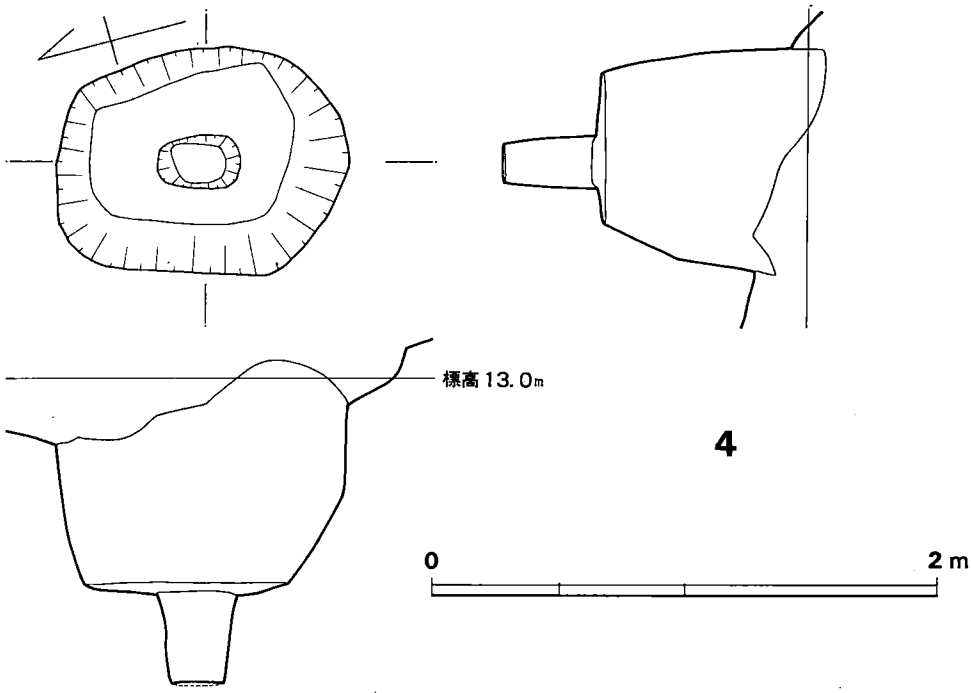
刀子（第50図）　鋒先側残片で，身幅1.2㎝，棟幅0.4㎝。

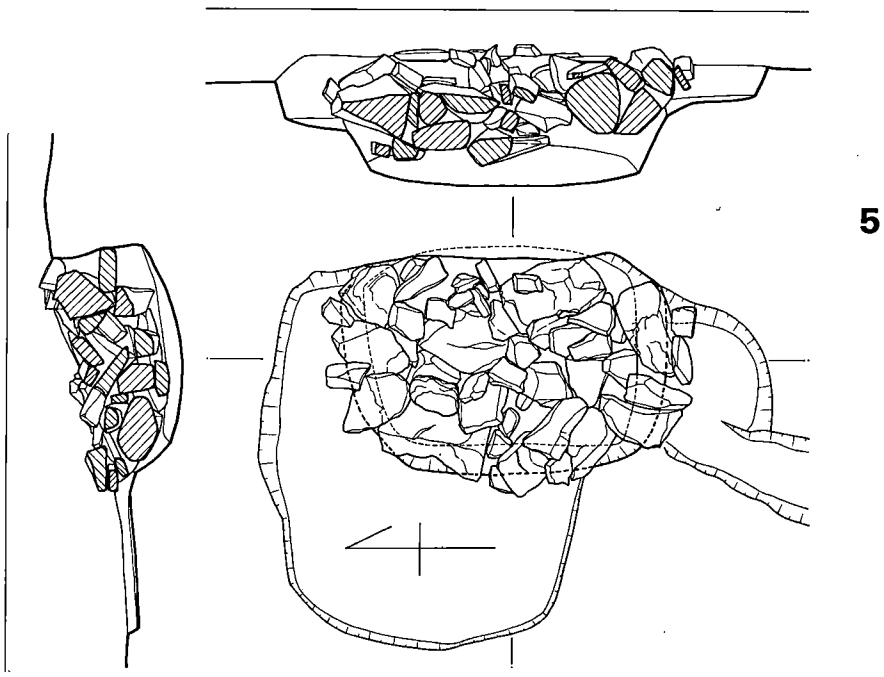


第 49 図　第 3 号土壙床面出土須恵器(1)・土師器実測図 (1/3)

第 4 号土壙（第51図）　第 4 号住居跡の北東隣に位置し，長さ1.17m，幅0.9mの方形に近い楕円形プランをなし，深さ90㎝と深い。底中央には小ピットが掘られ，更に37㎝の深さを測る。覆土は奈良時代他遺構のものと異なり，地山土のやや汚れたもので，中から弥生土器小片・石鏃等を検出しており，弥生貯蔵穴の一種か。

第 5 号土壙（第51図）　第 7 号住居跡の北東側上段に，中世遺物を含む浅い溝が南北に走り，その東端に位置する。長さ1.3m，幅0.9mの壙を掘り，中に40～15㎝大の塊石・角礫を充塡する。これらの石は，焼けたものや，煤の付着したものを投げ込んでいる。中世土壙墓と推定されるが副葬品無し。





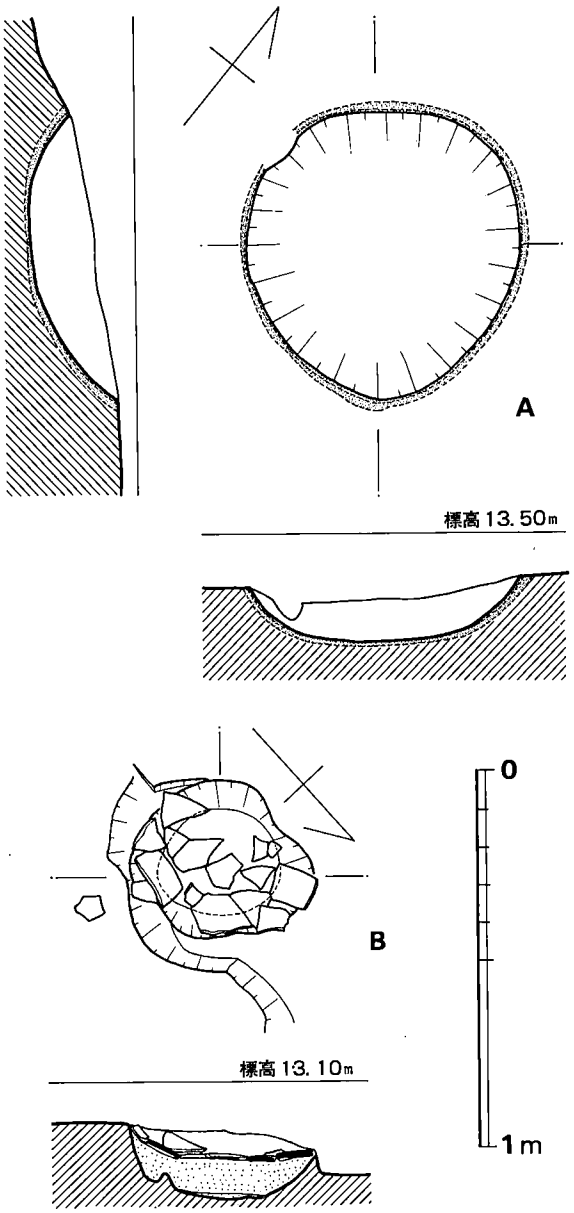
第51図　第4・5号土壙実測図(1/30)

d 製鉄関連遺構

炉（第52図A） 第3号住居跡の北西端に位置し，住居跡と同様に黒色包含層中途から掘り込んでいる。径75×71㎝の円形に近い倒卵形をなし，断面皿状をなす。壁面は黄灰色に変し極めて硬化しており，その外縁は赤変する。

砂鉄集積遺構（第52図B） 上記炉の北西隣に径50×40㎝，深さ20㎝の小Pitがみられ，中に砂鉄を充塡し，上面を須恵器甕破片で覆っていた。甕破片は2個体分あり，すべてが土器外面を上としていた。

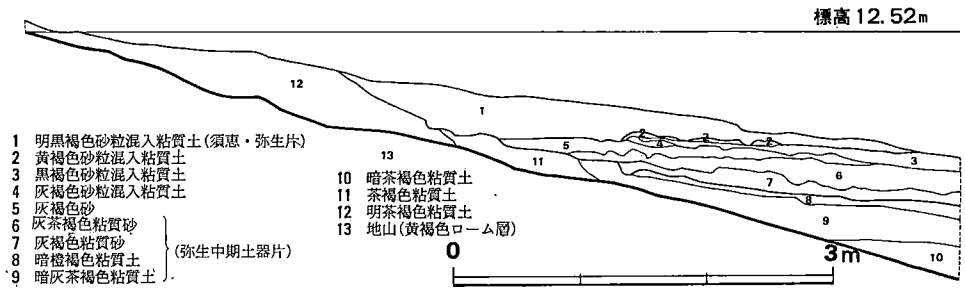
このA・B2種の遺構は，周辺一帯からの鉄滓・鞴羽口片等の出土からみても，製鉄関連の遺構とみられ，B遺構の須恵器をみても，住居跡群と同時期か平安時代前半までのものである。第2・7号竪穴（住居跡）の如き工房跡の存在をも含めて，生業形態の一部が製鉄・鍛冶に密接に関連する集落であることが考えられる。



第52図 製鉄関連遺構実測図（1/20）

2 包含層出土の遺物

Ⅰ～Ⅲ区にかけて，全面に，殊に西斜面に厚く，黒色包含層がみられる。特にⅠ区中央の1・2号土壙墓周辺は，弥生土器・石器類が集中し，Ⅰ区北端からⅢ区全面西半には奈良時代遺物が主に見られる。土層（第53図）を観察すると，本来の緩斜面の地山（黄褐色ローム）のに上，上方からのローム土が流れ込み更に緩やかになった上に弥生土器包含層が略水平に堆積する。更に上の黒色の奈良時代包含層の下面では，整地したことも考えられ，殆んど水平にな



第 53 図　Ⅲ区トレンチ断面実測図(1/60)

って遺構が掘り込まれる。

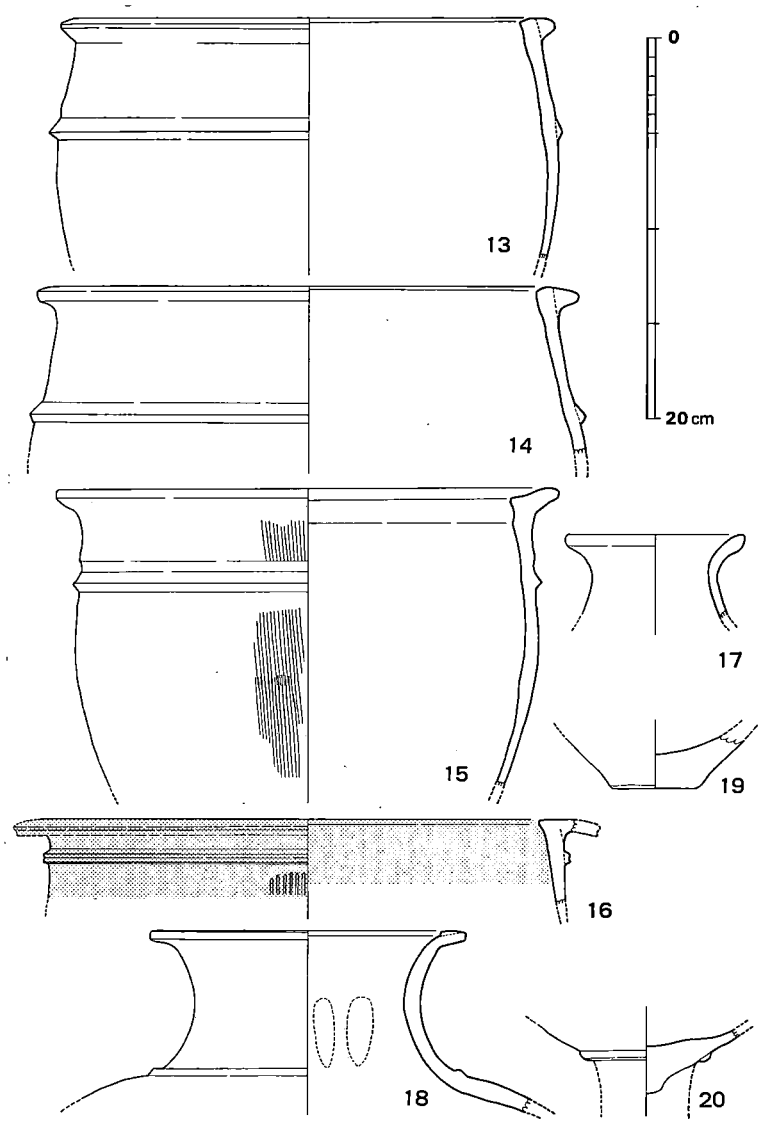
ここでは，包含層出土の遺物の他，遺構出土の遺物でも直接関連無しと判断したものをも合わせて列記した。中世遺物もまとめてこの項で掲載する。

a 弥生土器（第54・55・56図）

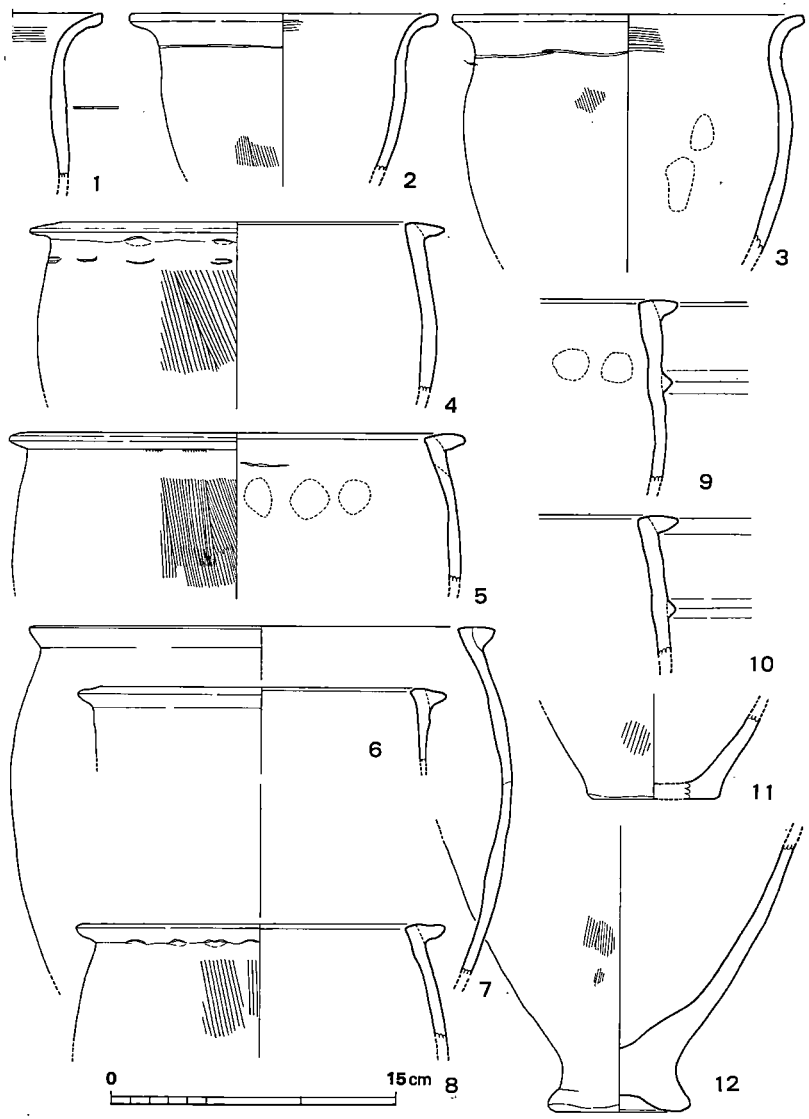
甕（1～16）　1～3は如意形口縁で，4～14は所謂亀ノ甲タイプ系統の口縁外端に刻目を有しないものであり，圧倒的に後者の量が多い。1は，口縁内面にやや粗い横ハケを残し，外面に沈線を施す。2は，胴張らずにすぼまる小型品で，口縁内面にやや粗い横ハケを施す。3は，胴上部で丸く張り，口縁内面に横ハケが残る。4～8は，口縁外側に断面三角形の粘土を貼り付け，胴上半に張る。外面に縦ハケを施し，口縁外下端は指オサエにより波状となるものもある。4の口縁下には，篦状のもので意識的に施した短線がみられる。9・10・13・14は，張る胴上位に更に断面三角凸帯を貼付したもので，胴部にはヘラ磨きがみられる。孰れも胎土に粗砂多く含む。15は，前記の類の口縁端が上方に僅かに上がり，強い指ナデで上面と直下内面がへこむ。口縁下の三角凸帯は，つまみ出したもので，外面は粗い縦ハケがみられる。16は，胎土精良な丹塗磨研土器で，口縁直下に口唇状凸帯を付け，その下には縦ヘラ暗文がみられる。11は，平底で外面に粗いハケを施し，12は，丸く中央が上げ底となる充実した脚台につくる。外面には粗い縦ハケを施し，煤が付着する。この手の底部は10数個出土している。

壺（17～23）　17は，頸部上位は締まり，外反して口縁はは丸く肥厚する。外面横ヘラ磨き。18は，頸中位から丸く外反して，口縁上面で肥厚させて内側に段をつくる。頸部に三角凸帯を引き出し，頸内面と胴外面には横ヘラ磨きを施す。21は，頸部より開く口縁をつくる。22は，胴やや上位に最大径をつくり，僅かな上げ底様の小さい平底につくる。頸部直下の胴部外面は縦に，以下は横ヘラ磨きする。内面上半横ナデ，中位ナデ上げを行なう。19は，厚手の小さい底部で，23は，径の大きい平底で，中心薄手となる。外面二次焼成受けて淡赤変する。

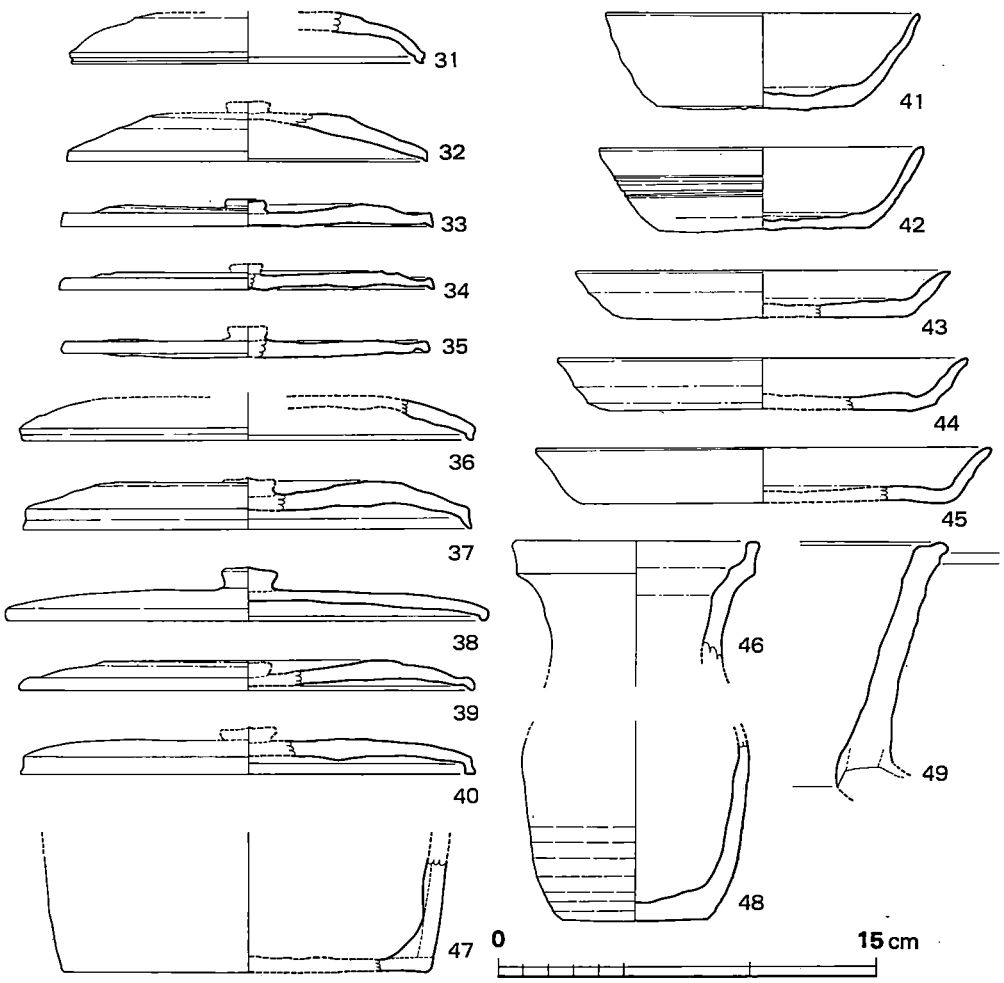
高杯（20）　杯部下端のみで，外面に凸帯を付け，脚部に挿入して接合する類である。



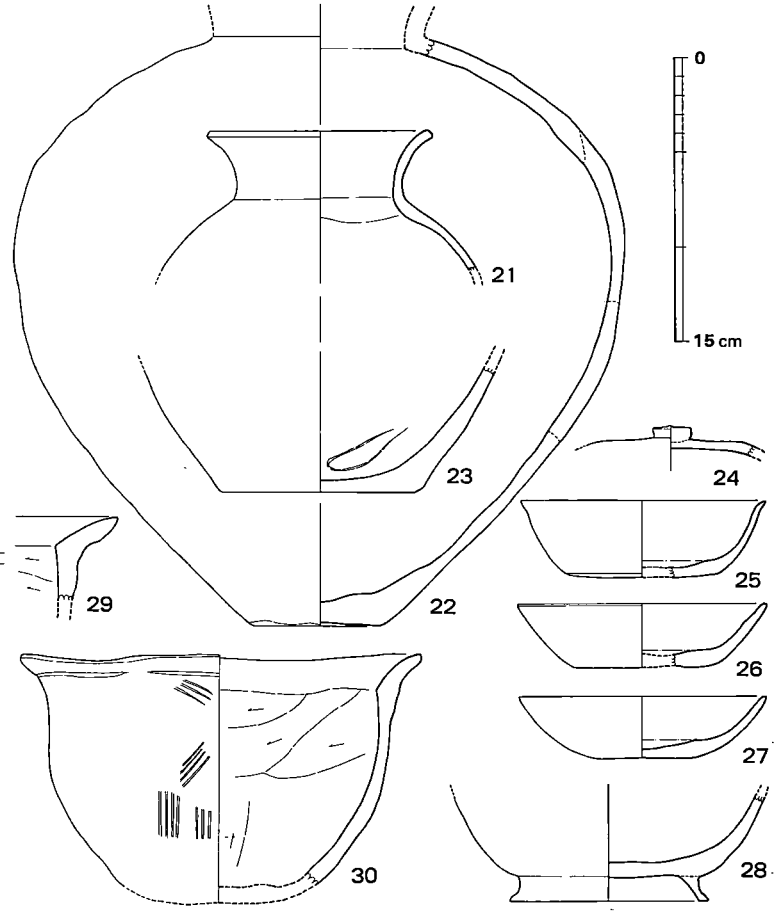
第 55 図　Ⅰ区包含層出土土器実測図（その２）（1/4）



第 54 図　Ⅰ区包含層出土土器実測図（その１）（1/4）



第 57 図　Ⅰ区包含層出土土器（須恵器）実測図（その４）（1/3）



第 56 図　Ⅰ区包含層出土土器実測図（24～30土師器）（その３）（1/4）

b 土師器（第56図）

蓋（24） 撮部中心に天井部のみ残り，胎土精良で，全体に磨滅する。

杯（25～27） 孰れも器表磨滅するが，底部ヘラ切離しと考えられる。口径13.0～12.7cm，器高3.3～4.1cmを測る。25の口縁外面をへこませ，27は，底部小さく皿状となる。

高台付椀（28） 外端に鋭く尖り張る細長い高台を付け，体部は丸く立ち上がる。胎土精良。

甕（29・30） 孰れも内面に稜をつくり，横ヘラ削りを施す。胎土に粗砂多く含み，29は外面に煤が付着し，30は強い二次焼成を受ける。口縁下に浅い波線が途切れてみられ，粗い条線状叩きが施される。第8号住居跡南方の短かい溝状遺構より出土。

c 須恵器（第57図）

蓋（31～40） 31～35は口径14.0～14.7cmの小径タイプで，36～40は19.0～17.6cmで18.0cmを中心とする大径タイプである。31は，天井外面ヘラ削り，口縁外面にヘラで深い沈線を入れる。32は，口縁先端を極く小さくつまみ出し，焼成甘く白灰色。33～35は，扁平で上面のややへこむボタン状撮を付ける。34は口縁外面がやや丸味を帯びて屈曲し，35は口縁内面に沈線を巡らす類。36は，端部をやや丸く作り，外面僅かにへこむ。37は，鳥嘴状口縁やや長く尖り，外面へこむ。天井部にヘラ削りを施す。38は端部を丸く作り，焼成甘く全体に磨滅する。39は天井外面粗いヘラ削りの上ナデツケ，端部は丸く屈曲する。40は，焼きやや甘いが，天井部から稜をつくり屈曲し，端部に平坦面をつくる異型である。

杯（41・42） 41は，口径12.3cm，器高3.7cm，底径7.7cm。胎土精良で焼きやや軟質で淡灰色を呈する。底部はヘラ切離し後ナデツケ。42は，口径12.8cm，器高3.3cm，底径8.3cm。底部ヘラ切りで体部との境はシャープ。体外面に強い回転ナデによる沈線群がみられる。

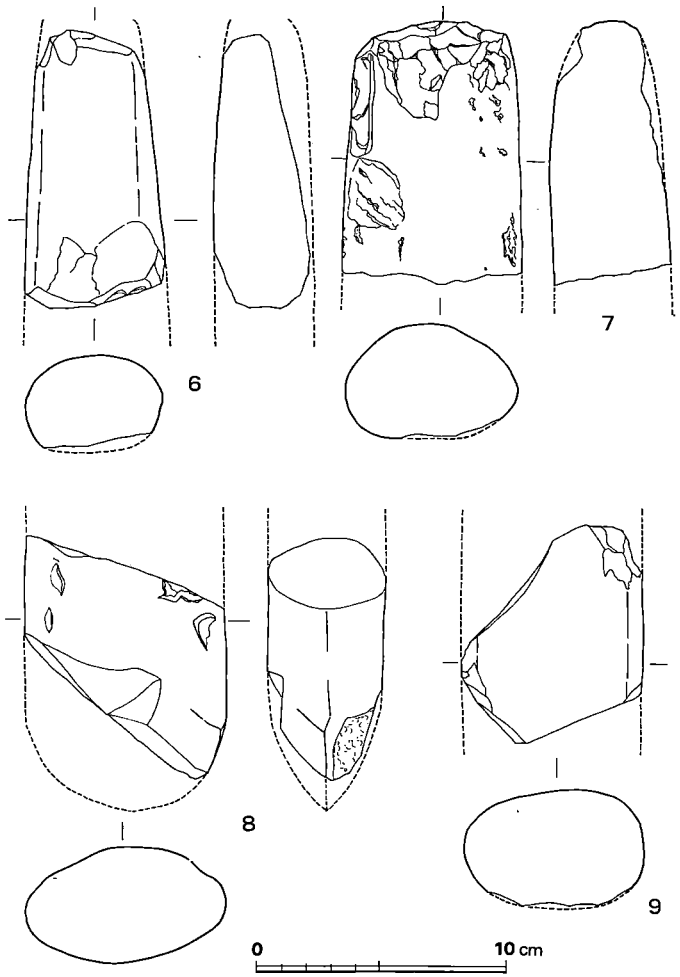
皿（43～45） 43は，口径14.7cmで底部は粗いナデツケ状をなす。44は，口径16.1cmで体部外面に強いナデによる稜がみられる。45は，口径17.9cmで底部は粗いナデツケを行う。

壺（46～48） 46は，長頸壺口縁部で，短かくほぼ直立する口縁上面は丸味を帯びた平坦面をなす。内外面横ナデ，胎土に細砂多く含み，焼成堅緻にして灰色を呈する。47は，安定した平底で，円盤を貼り付けている。胎土に粗砂多く含み，焼成堅緻である。48は，可愛い小壺で，体部下半と底面はヘラ削り，他は回転ナデ。胎土に粗砂多く含み，焼きは良く淡青灰色。

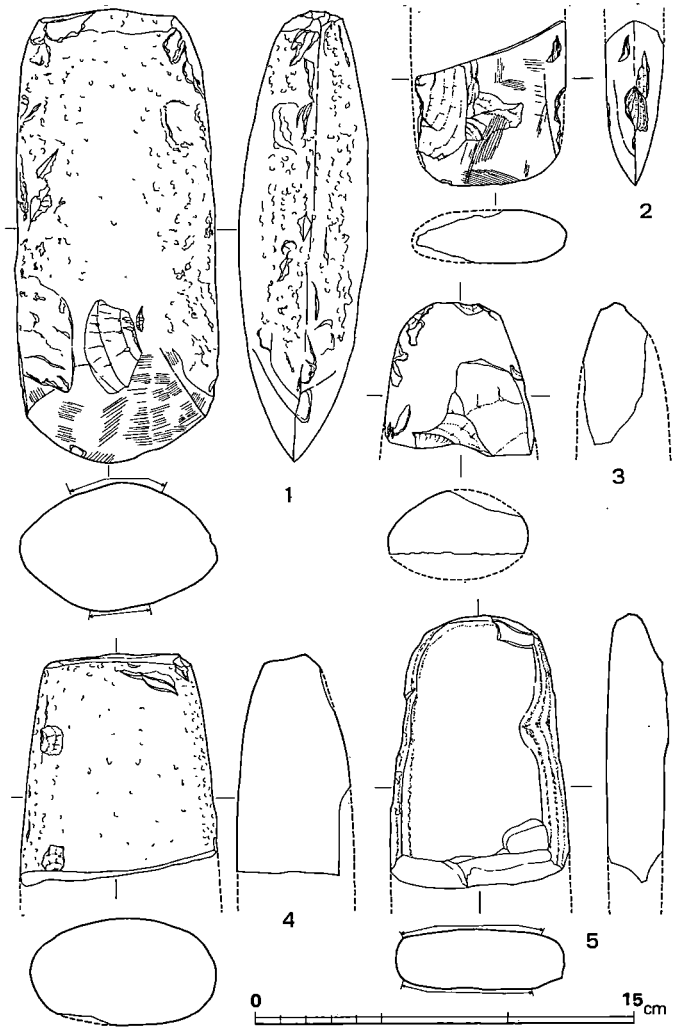
甕（49） 大型品で直線的に開く頸部で，口縁外端は太く沈線状に窪む。上面はへこむ。胎土に粗砂幾らか含み焼成堅緻。

d 石器・その他

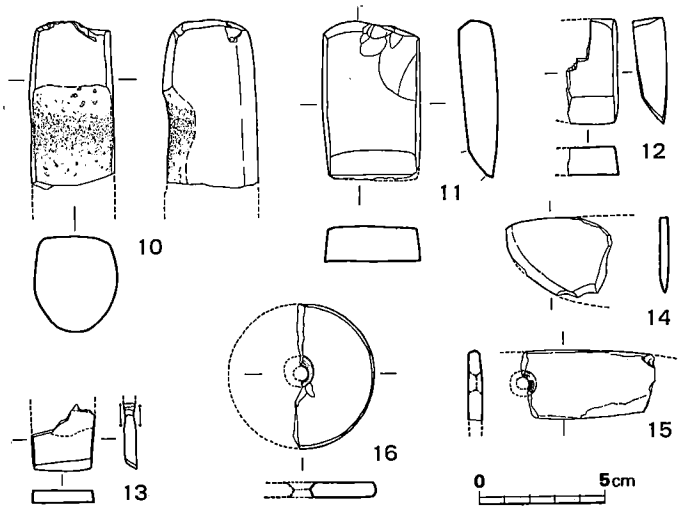
磨製石斧（第58・59図） 1・3・6～9は，玄武岩製太型蛤刃石斧である。1は完形で両側面に細かい敲打痕を残し，刃部の擦痕は一部刃に直交するものもあるが，殆んど横位である。



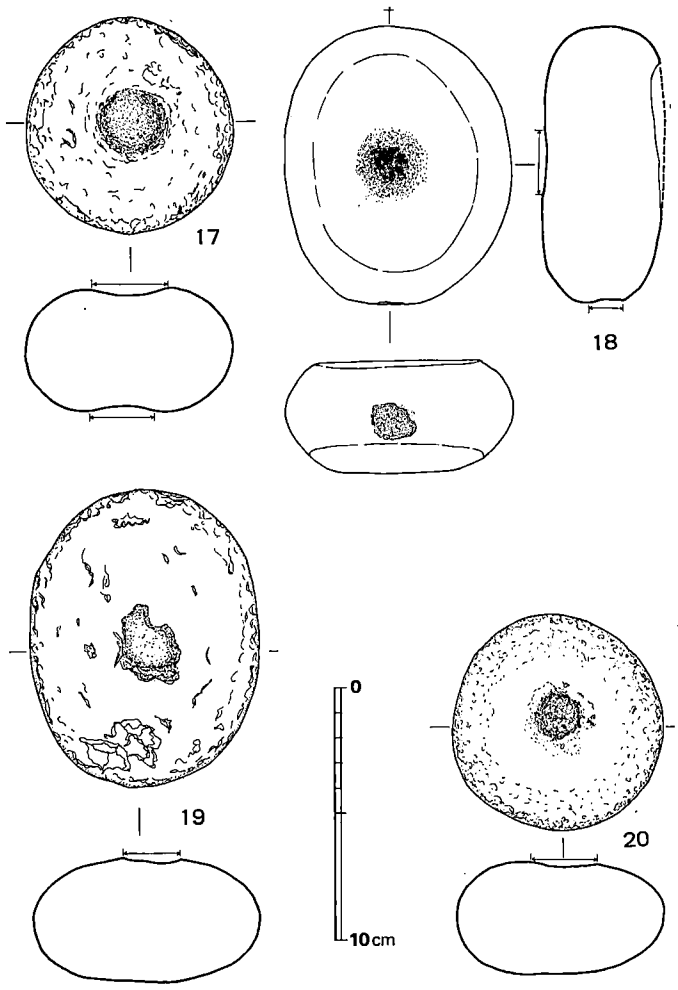
第 59 図　包含層出土石器実測図（その2）（1/3）



第 58 図　包含層出土石器実測図（その1）（1/3）



第 60 図　包含層出土石器実測図（その３）（1/3）



第 61 図　包含層出土石器実測図（その４）（1/3）

全長17.9㎝，幅7.7㎝，厚さ5.1㎝。３は基部小片，６は細身で，７も基部，８は刃部近くで，孰れも全面丁寧に磨く。４も，安山岩製蛤刃石斧で，全面に磨いてはいるが，細かい敲打痕が残る。２は，扁平な薄型両刃石斧で頁岩質。擦痕が剝離面まで及び，一部欠損後も再磨研して使用したものと思われる。５は，砂岩質の扁平な類で全面風化著しい。

柱状抉入片刃石斧

（第60図10）

基部片で幅3.3㎝，厚さ3.7㎝を測り，粘板岩製。抉り部は浅く両側面に若干紐擦れの部分もある。

扁平片刃石斧

（第60図11～13）

孰れも粘板岩質で，11は，長さ6.2㎝，幅3.9㎝，厚さ1.4㎝を測り，刃部は２段に研ぎ出し鎬をつくり，刃こぼれがみられる。12は，長さ4.2㎝，厚さ1.1㎝。13は，幅2.4㎝，厚さ0.5㎝と小型品で，柄台木に緊縛するためか両面に凹帯状となる部分がある。

穂摘具（第60図14・15）

15は，粘板岩質で孔は両面穿孔し，厚さ0.6㎝。風化著し

い。14は，頁岩質でやや小型のものとなる。片刃状に研ぎ出し，表面風化。

紡錘車（第60図16）

径5.7㎝，厚さ0.6㎝，孔径0.5㎝を測り，粗砂硬砂岩製。

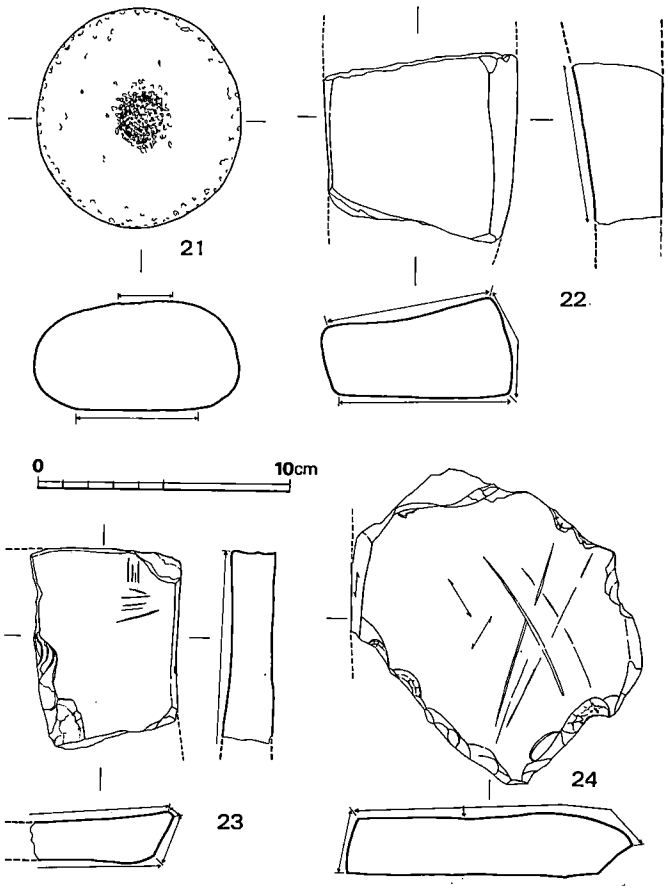
凹石・叩石

（第61図17～20，第62図21）

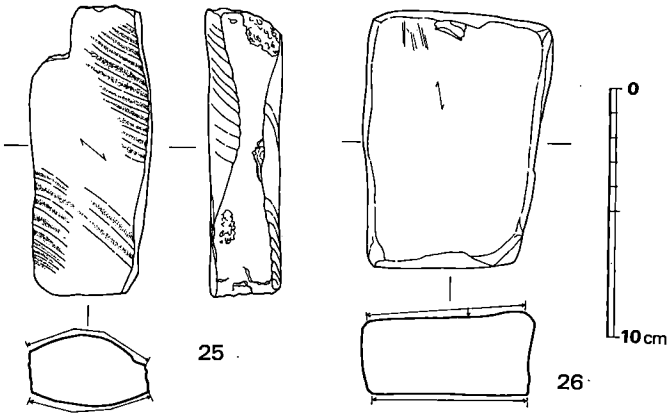
17は，花崗岩製で両面に大きく窪む。18は，玄武岩質で上面を磨って平坦面をつくり，中心部が使用され僅かに窪む。側面端にも叩いた痕がみられる。1号墳西側攪乱土層出土。19は，花崗岩製で中心部が窪む。20は，花崗岩円礫を使用し中央部が窪む。21は，花崗岩製で中心部に使用打痕がみられ，裏面は磨り石状に平坦となる。

砥石（第62図22～24，第63図25・26）

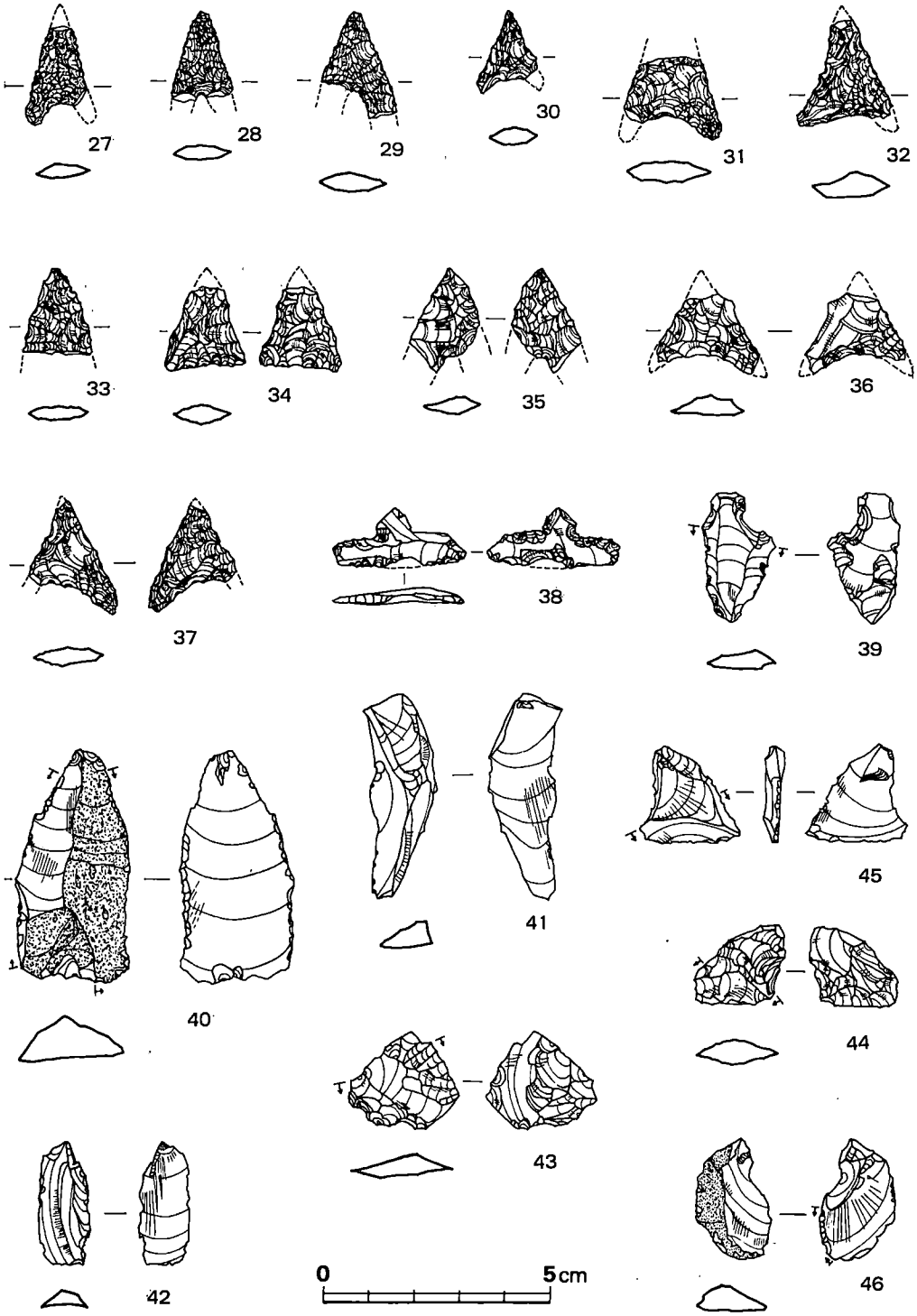
22は，砂岩製粗砥で凹状をなす上面を使用し，両側面は叩打痕残して磨研し，裏面は一応磨研するのみ。23は，砂岩製で粗砥に近く，全体に凹状となった上面のみを使用し，側面と裏面は一応磨研するがそれほど使用されない。24は，砂岩製粗砥で上面と側面を使用し，他面は割れている。25は，シルト岩製で仕上げ砥に



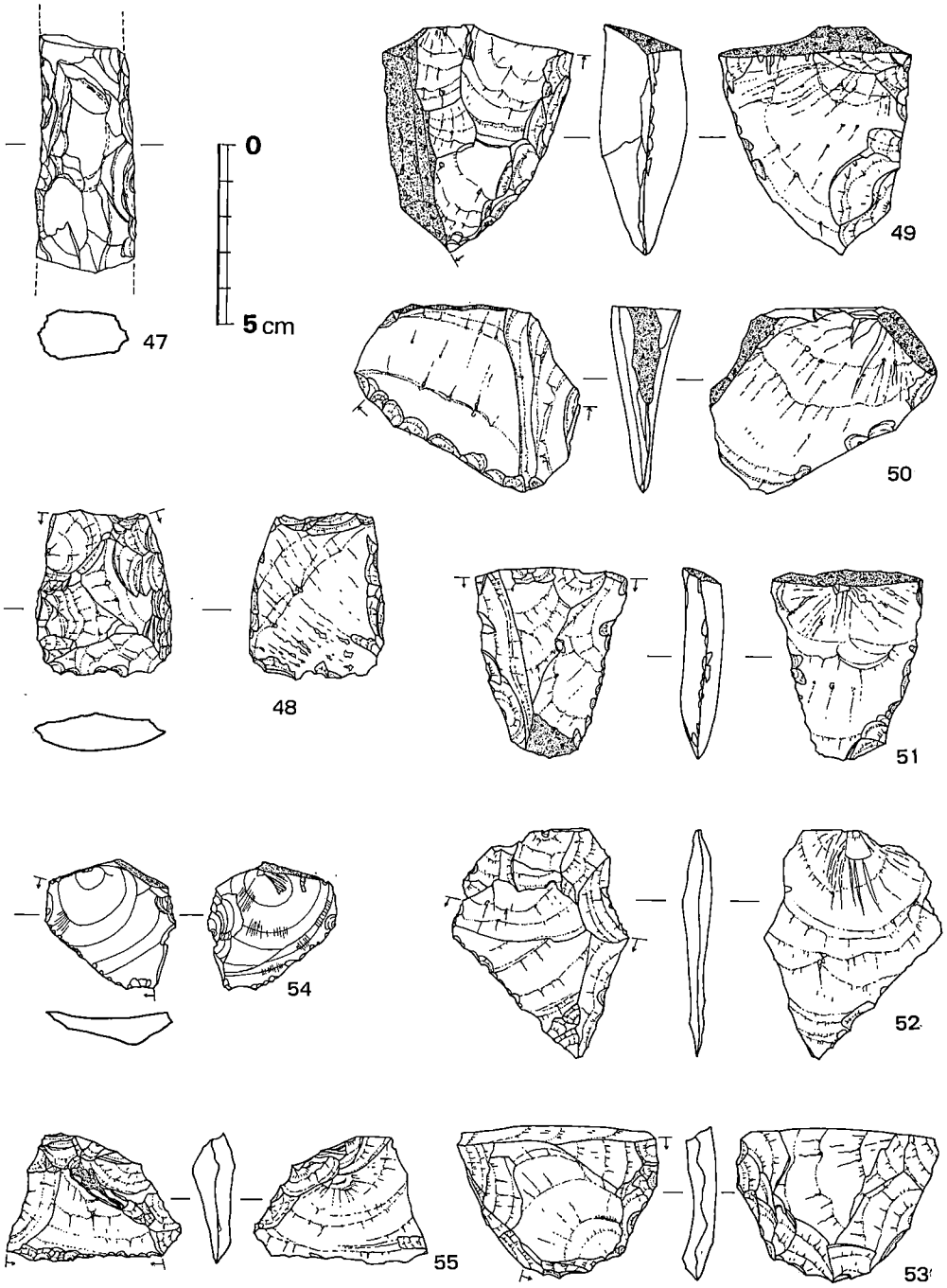
第 62 図　包含層出土石器実測図（その5）（1/3）



第 63 図　包含層出土石器実測図（その6）（1/3）



第 64 図　包含層出土石器実測図（その7）（2/3）



第 65 図　包含層出土石器実測図（その8）（1/2）

近い中砥で，表裏両面共に凸面状を呈し，斜め方向に研磨され，3～5㎜幅の条溝状に強い研磨痕が残る。何か特殊なものの研磨に用いられたものである。26は，1号墳西側攪乱土中出土で，砂岩製で粗砥。上下面のみを使用する。

石槍（第65図47） 硬質の砂岩製で，粗い打裂後，両側面に若干の加工を行ったのみで，表面風化著しい。

打製石鏃（第64図27～37）平基の三角形鏃は34のみで他は凹基鏃。27のみ安山岩製，他は黒曜石製である。27は，細長く表面風化し，表裏ともにやや粗い加工を施す。0.8g。28は，良質半透明で表裏とも極めて丁寧。0.6g。29は，深い抉りをつくり，良質半透明，1.0g。30は，漆黒色で小型，全体に粗い加工を施し0.6g。31は，良質で表裏ともかなり雑に加工し，1.6g。32は，片面に僅かに原剝離面を残し，全体に加工粗く，1.7g。33は，表裏ともやや雑で折損後熱を受ける。0.9g。34は，不純物を含み両面粗い調整で1.8g。35は，良質で両面より粗い調整を加え1.2g。36は，原剝離面を残し全体に粗く1.1g。37も粗く1.1g。

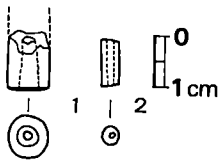
石匙（38）極めて小型で，石鏃を再使用したもので原剝離面を残す。良質の黒曜石製で0.9g。

つまみ形石器(39) 良質黒曜石の縦長剝片を粗材とし基部両側に若干の抉りを入れる。1.4g。

刃器・使用剝片（40～46） いずれも黒曜石製で，40は原材粗面を残し10.3g。41は3.2g。42は1.1g。43は，表面縁辺に細かい調整を加えるスクレイパー。2.3g。44も同様で調整は粗く2.0g。45は縁辺部に表面より刃潰しを行ない1.8g。46は小剝片側辺を使用し2.4g。

スクレイパー（第65図48～55）54のみ良質の黒曜石で他は安山岩製。48は薄い剝片に若干の加工を行ない21g。49は頂部と側面に原材粗面を残しバルブカットし71.0g。50は両側面に粗面を残し42.8g。51は打面と端部に粗面を残し23.6g。52は薄い縦長剝片を使用し，頂部に粗面を僅か残す。53は打面調整した横長剝片の表裏に若干の調整を加える。54は打面に粗面を残した剝片の側辺を使用したもの。55は表面に僅か粗面残し表縁辺に若干の調整を加える。14.1g。

玉類（第66図） 1は，第2号住居跡覆土中出土で暗草緑色の碧玉製管玉。径8.0㎜，孔径3.8～2.1㎜。重量1.1g。2は，第1号住居跡の南西側の方形 Pit 上層より出土し，淡青緑色の細身の碧玉製管玉。径3.7㎜，長さ8.8㎜，孔径1.5㎜，重量0.3g。

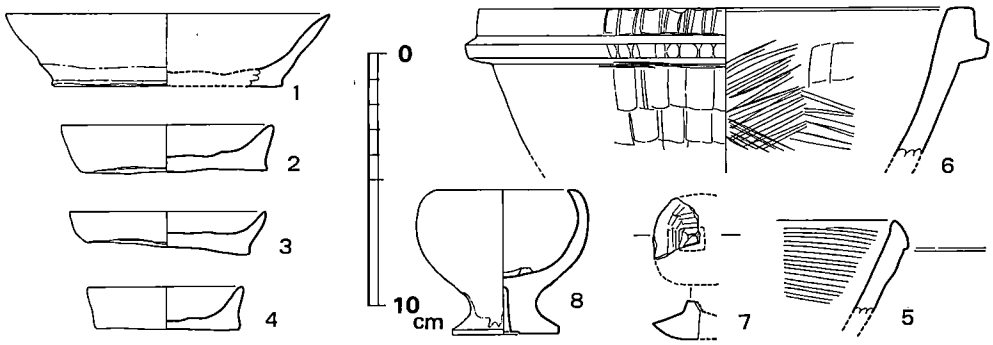


第66図 Ⅰ区出土管玉実測図（2/3）

e 中・近世の遺物（第67図）

土師器杯（1） Ⅰ区の第1号土壙の時期の Pit中出土で底部糸切り。径12.8㎝，器高2.9㎝，底径9.1㎝を測る。

土師器小皿（2～4） 2・3は5号土壙北側の焼土Pit 中出土で底部糸切り，径8.4～7.8㎝，器高1.9～1.5㎝，底径7.4～6.5㎝。4は特小皿で底部糸切り。口径6.2㎝，器高1.7㎝，底径



第 67 図　中・近世遺構出土遺物実測図 (1/3)

5.7㎝。

捏鉢（5）焼成土師質で内面に粗い横ハケを施し，6同様5号土壙に連なる溝から出土。

石鍋（6）滑石製で内面に粗い条状痕あり。外面工具痕残し煤付着。径19.5㎝の小型品。

滑石製品（7）撮状突起をつくり，下面は凸面をなし，5号土壙周辺 Pit 中出土。

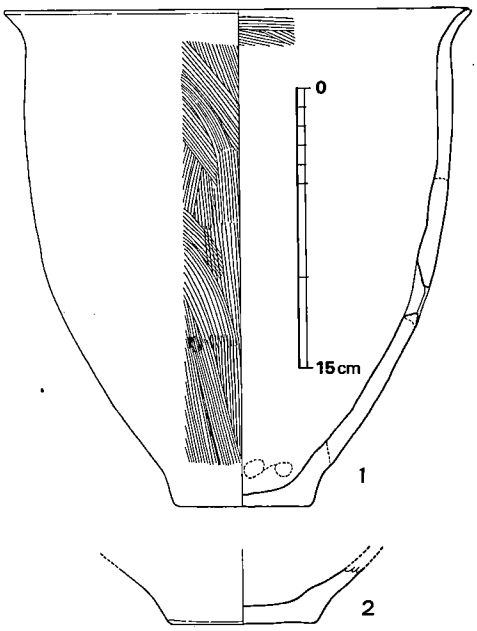
近世陶器（8）Ⅰ区北寄りの東西に走る近世溝出土。鉄釉をかけ胎土粗く唐津方面か。

以上の他に，5号土壙北の Pit 中より『元祐通宝』（初鋳は北宋　哲宗1086年）1点が腐蝕著しく出土した。

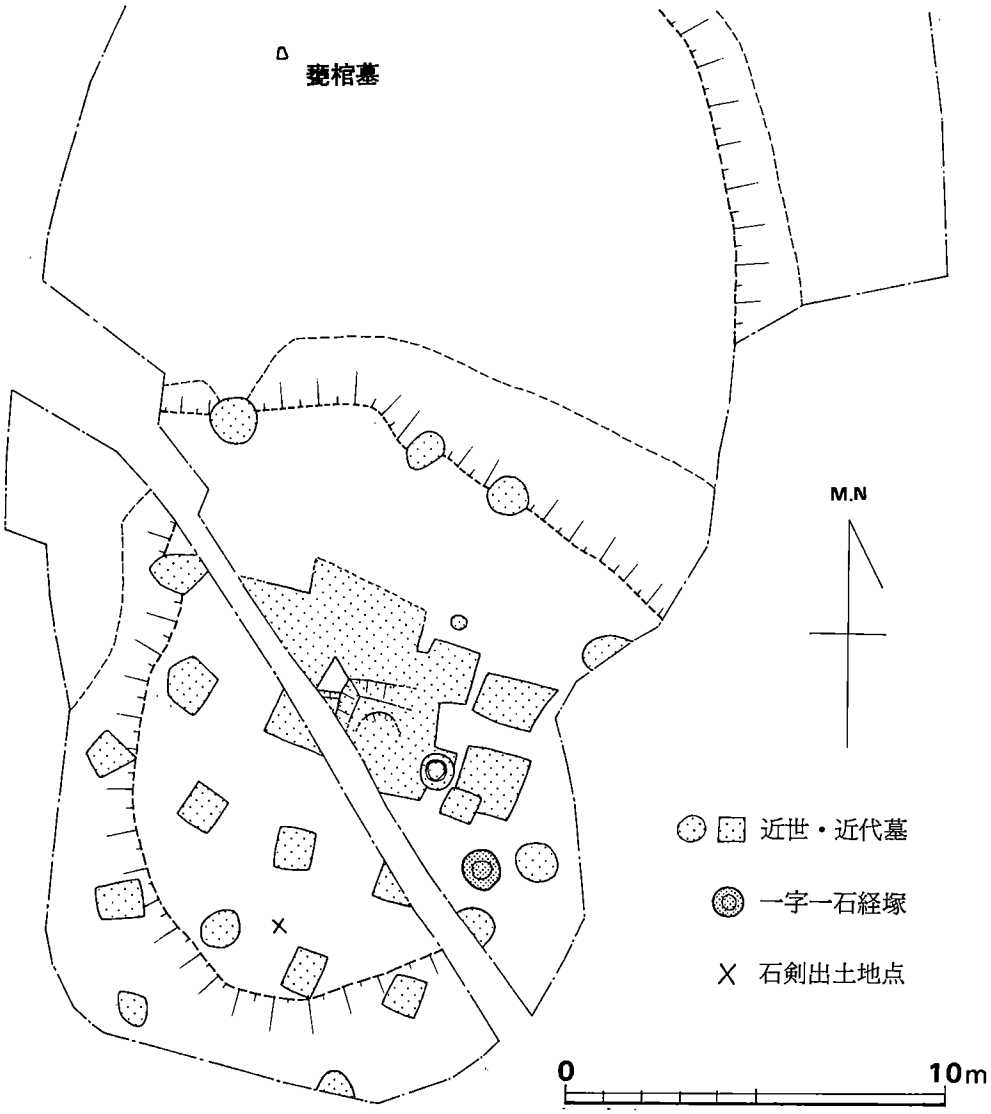
2　Ⅱ区の調査

Ⅱ区は，Ⅲ区東側丘陵頂面で，古墳等の存在が推定されて，全面を地山まで下げてみたが，遺構少なく，期待はずれであった（広田1号墳の小結項参照）。結局，南端部に近世～近代墓地群と，その間に一字一石経塚，やや北に離れて弥生小児甕棺墓1基が確認されたのみであった。

第 68 図　Ⅱ区甕棺墓実測図 (1/20)



第 69 図　Ⅱ区甕棺実測図 (1/4)

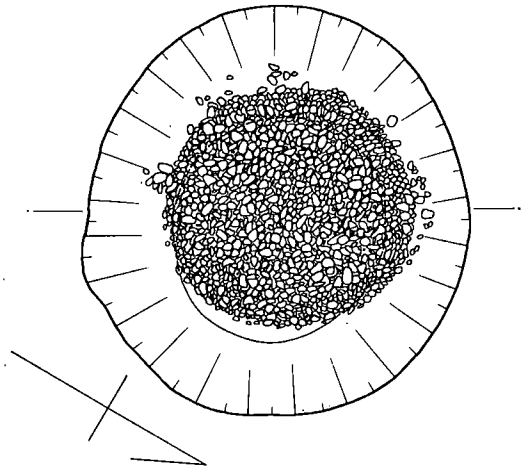


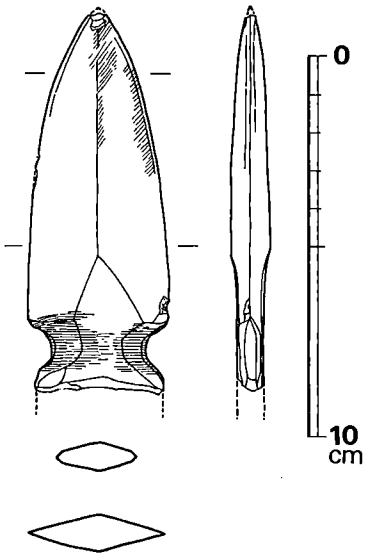
第 70 図　広 田 Ⅱ 区 遺 構 配 置 図（1/200）

1　弥生時代の遺構と遺物

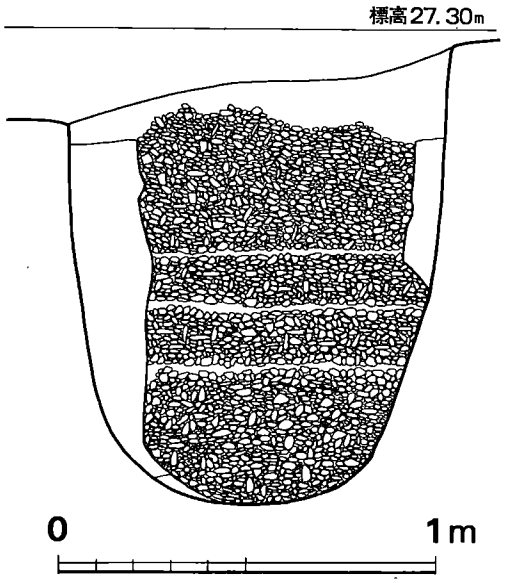
甕棺墓（第68図）　地山に水平に近く下甕のみが検出された。胴中央に小円孔を穿つ。上半殆んどを削平されて墓壙等不明。近辺より壺底部片が出土し，上棺の一部とも考えられる。

甕（第69図）　胴の張らない如意形口縁で，端部の刻目の有無は磨滅して不明。口縁内面に横ハケ，胴外面に縦・斜めの細かいハケを施す。2は壺底部で胎土に粗石英粒僅かに含む。





第 71 図　Ⅱ区出土石剣実測図（1/2）



第 72 図　Ⅱ区一字一石経塚実測図（1/20）

南端近くの地山上より石剣が出土し，周辺に土壙墓等の遺構を探したが，結局何に伴なうものか不明。

石剣（第71図）　基部寄りで欠損し，両端に抉りを入れて，槍状に柄を付けて使用したものか。鋒先寄り刃部は2段に研ぎ出す。抉部は擦痕著しく緊縛時のものと思われる。全体に精品である。

2　近世の遺構と遺物

南端は地山も一段高くなっており，近世～近代墓地30余基分が検出されたがその中に，一字一石経塚が在り調査した。

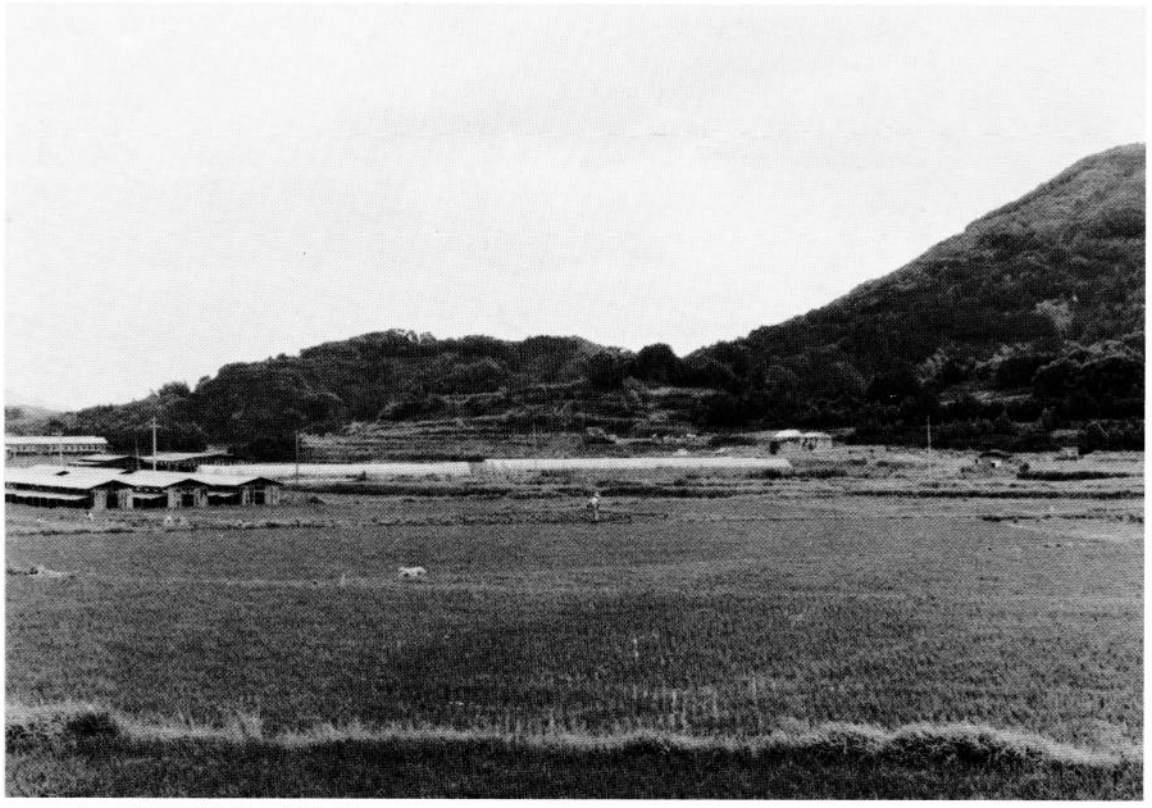
一字一石経塚（第72図）　径1.0×1.1*m*の円形の壙を深さ1.2*m*掘り，その中に一石に一字を墨書した小石（5～1*cm*大）を充填する。その断面観察により径約70*cm*の円形の範囲にのみ詰まり，外側は埋土のみであり，更に上下に3段の隙間がみられ，大小の樽・桶状の容器4個に入れて壙中に積み重ねたものと考えられる。その数約65,000個と推定され，今回は整理の余裕が無かったので詳細な検討は後の機会に譲ることとしたい。標柱・盛土等全くみられず，詳細は不明。

3 小　　結

昭和53年7月4日～10月4日までの期間に，4,000㎡を調査したが，全体に遺構の崩壊が顕著であり，明確にし得なかった部分も多い。

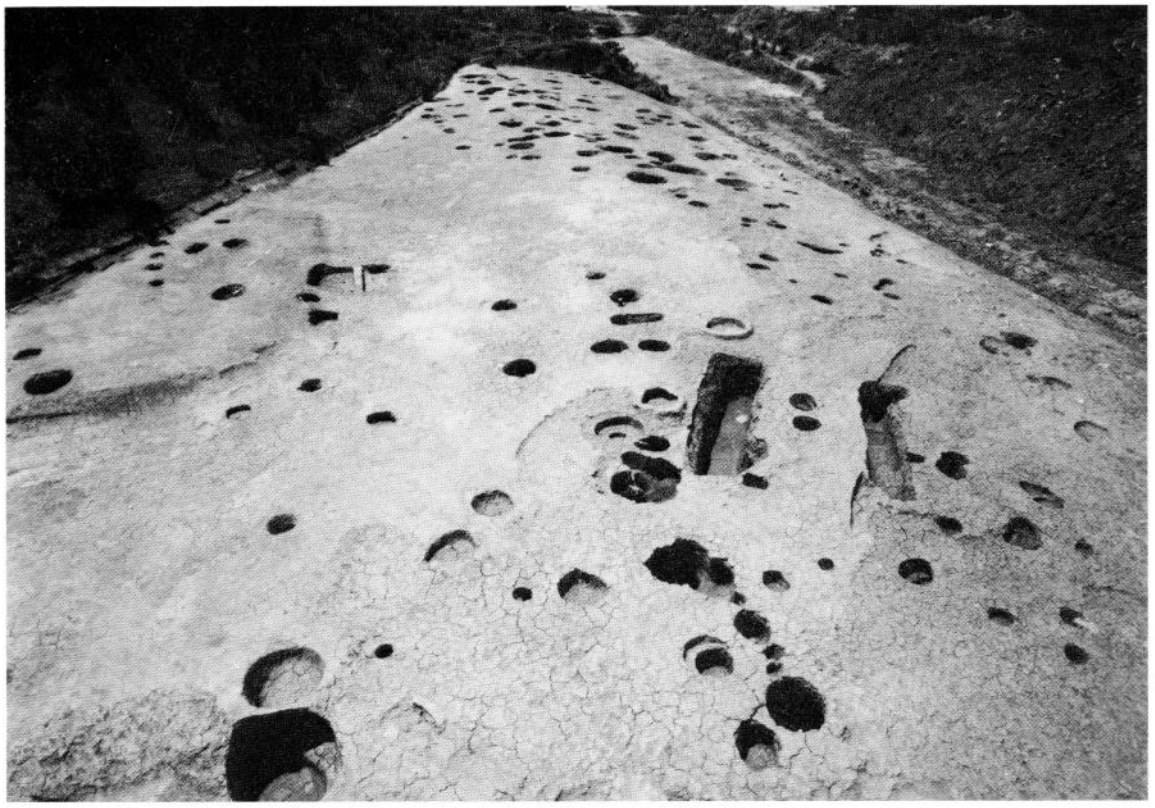
まとめとして，次の諸問題点を提起して，多大な成果の一端としたい。

1. 弥生時代の遺構は全体にその組合わせは明確にし得なかったが，包含層を中心として多くの遺物を得た。糸島地方における弥生前～中期の土器の持徴の一端をつかむことが出来た。即ち，亀ノ甲式系統の口縁を有する甕が糸島の西端にまでもかなりみられる事実である。筑後系統とされるこの種土器は，どういうルートを通って流入したか，肥前における今後の追跡が期待されるとともに，重要な関心事である。
2. 古墳一基を調査したが，大破しており全容を摑めなかったことは残念である。この丘陵に占地する意義は，東西隣の丘陵斜面に多くみられる群集墳との対比から考えても，趣きが異なるように思われる。本文中に記した如く，より古式の古墳がⅢ区の頂部に営まれた可能性が考えられるからである。今後は糸島地方西半及び唐津平野との関連を細かく追求すべきところであろう。
3. 奈良時代竪穴8基が検出された。既に触れた如く，当期にあっては特異なプランを呈し，その性格も，周辺に製鉄関連の炉等をもち，小規模ながらも製鉄・鍛冶関係の工房的なものと推定される。往時は海岸の砂丘との間にラグーンが形成され，汀線も近く，砂鉄採取も容易であったと考えられる。また，北西300mの微高地上の竹戸遺跡では律令期地方官衙（駅家か）と考えられる建物群がみられ，広田遺跡の当期の生業との関連も深いと思われる。
4. 中・近世の遺構・遺物もかなりみられたが，文献史料等との比較検討を行えないままに終り，今ひとつ背景的な状況が明確でない。一字一石経塚にしても，近世～近代墓群中に発見されて，寺院の表境内等に納められる例えば夷魏寺門前のような類とは性格を異にする面も考えられよう。既に墓地改葬済の為であろうか，石塔等と共に標柱も撤去せられて残らず，その施主等の具体的な状況は把握出来ない。今後，地方文書，過去帳等とのつき合わせを行ない，明らかにしてゆきたい。

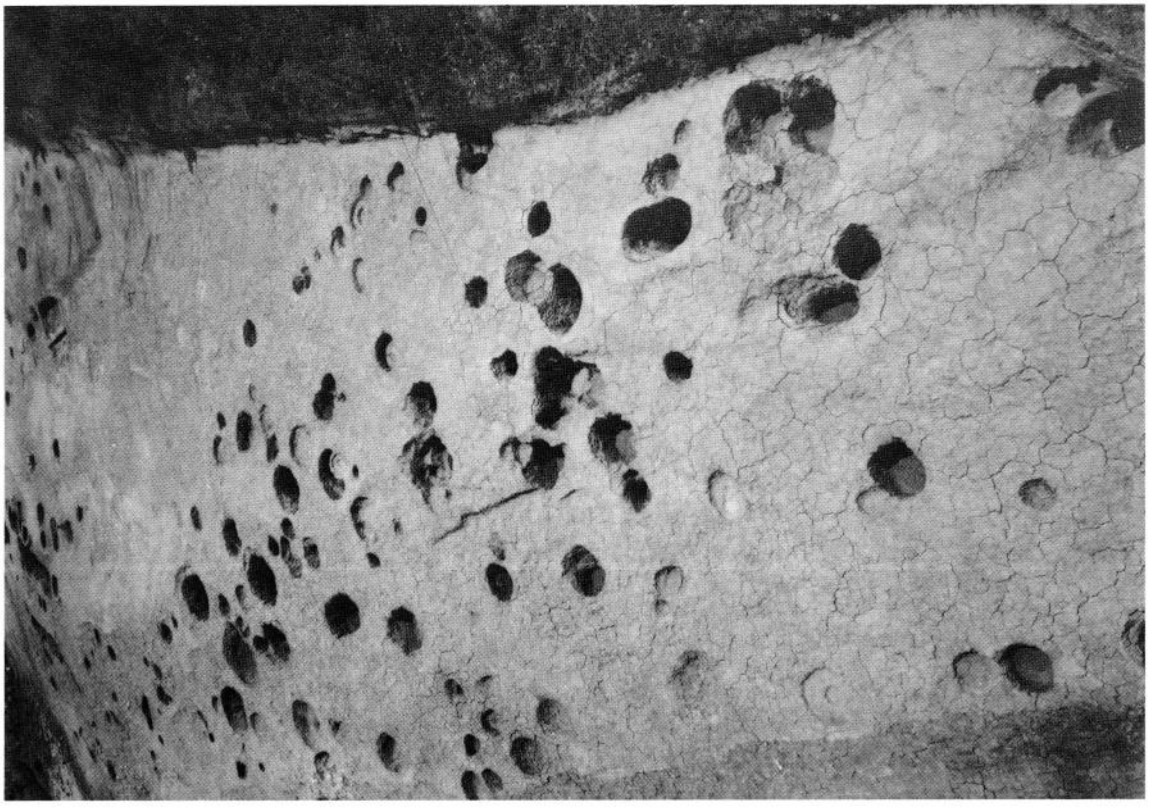


1　広田遺跡全景　（西より）

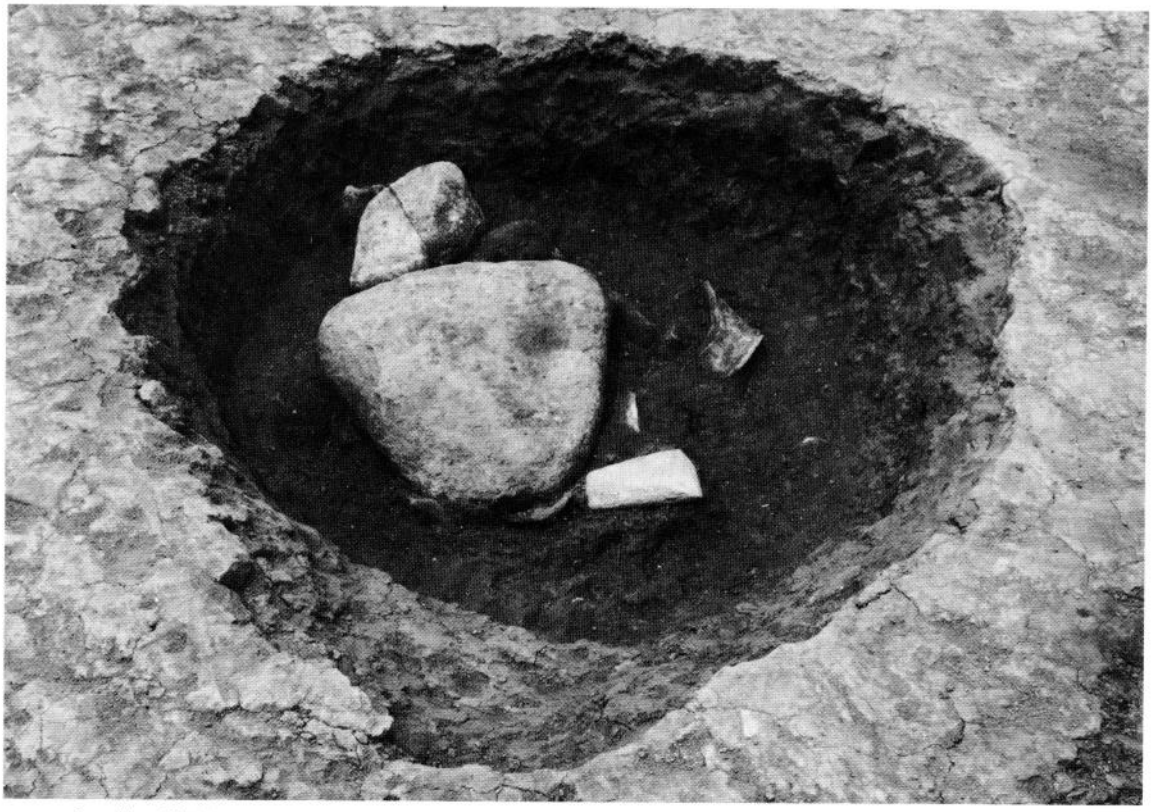
2　広田遺跡Ⅱ区より北西（吉井・姫島）を望む



1　広田Ⅰ区全景（北より）



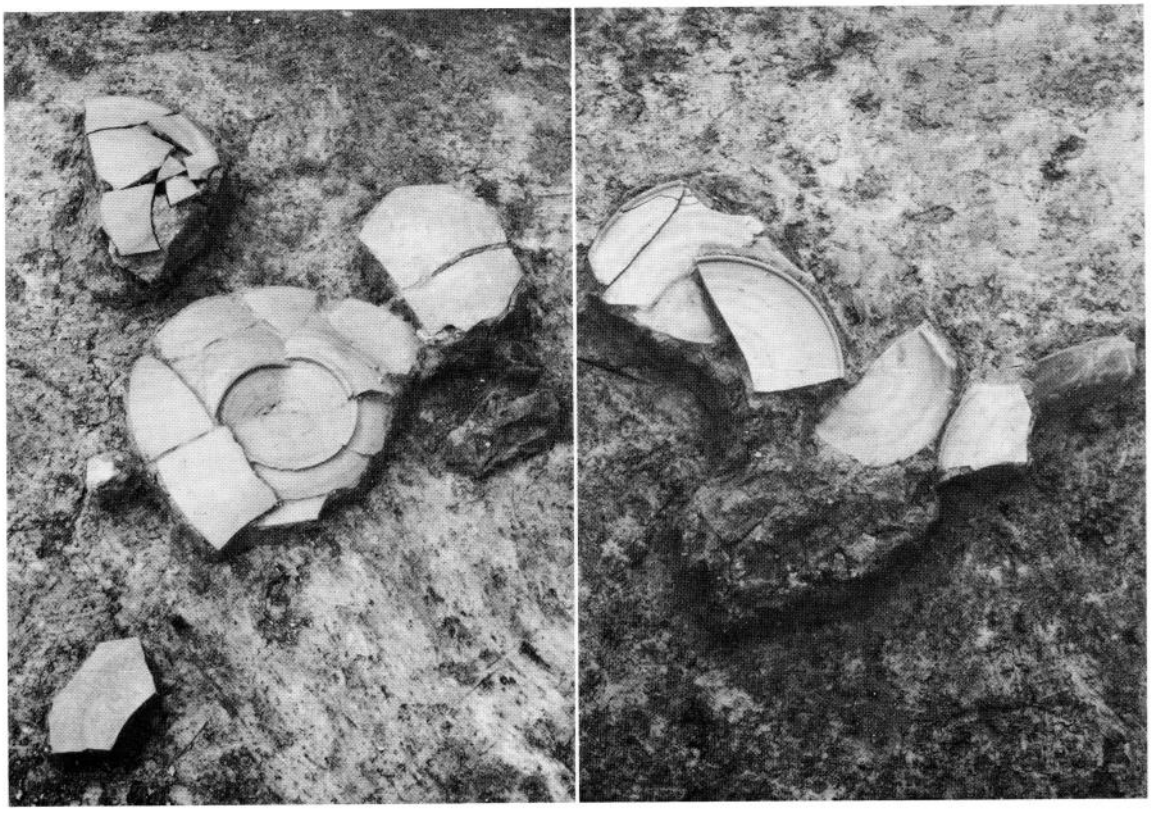
2　広田Ⅰ区柱穴群（南より）



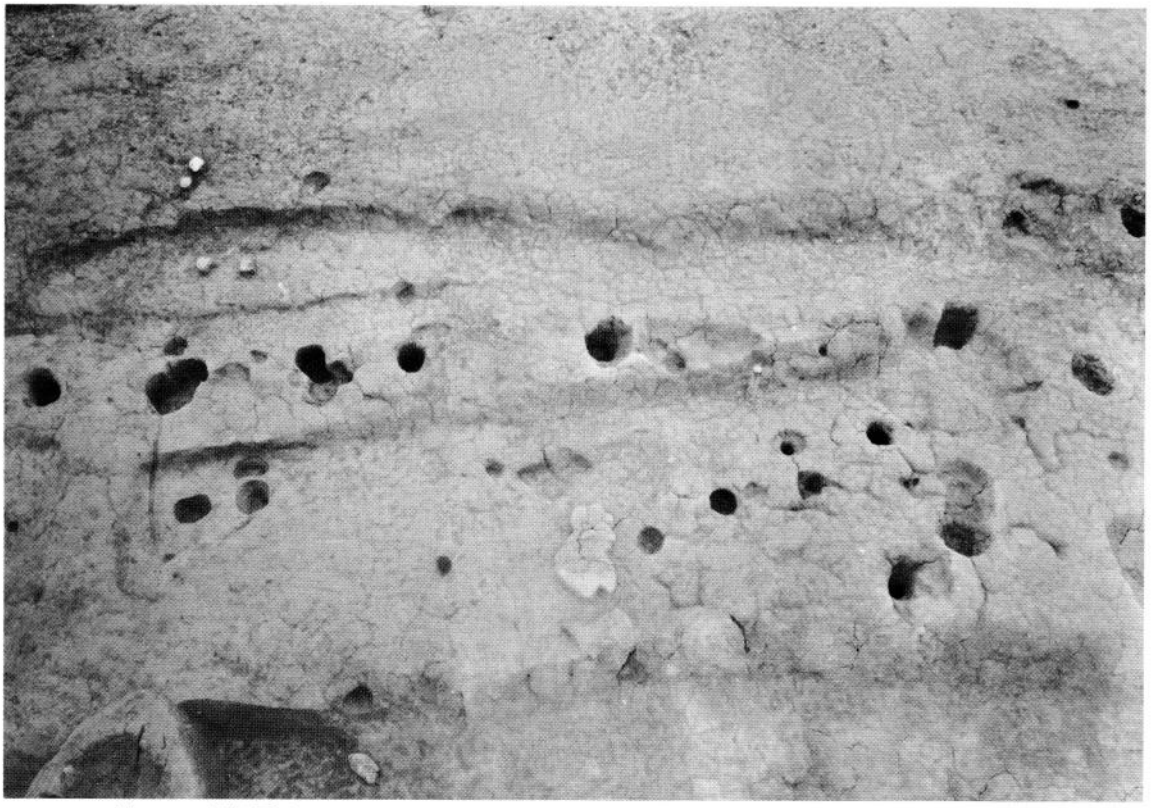
1　第1号貯蔵穴

2　第1・2号土壙墓（右1号・左2号）

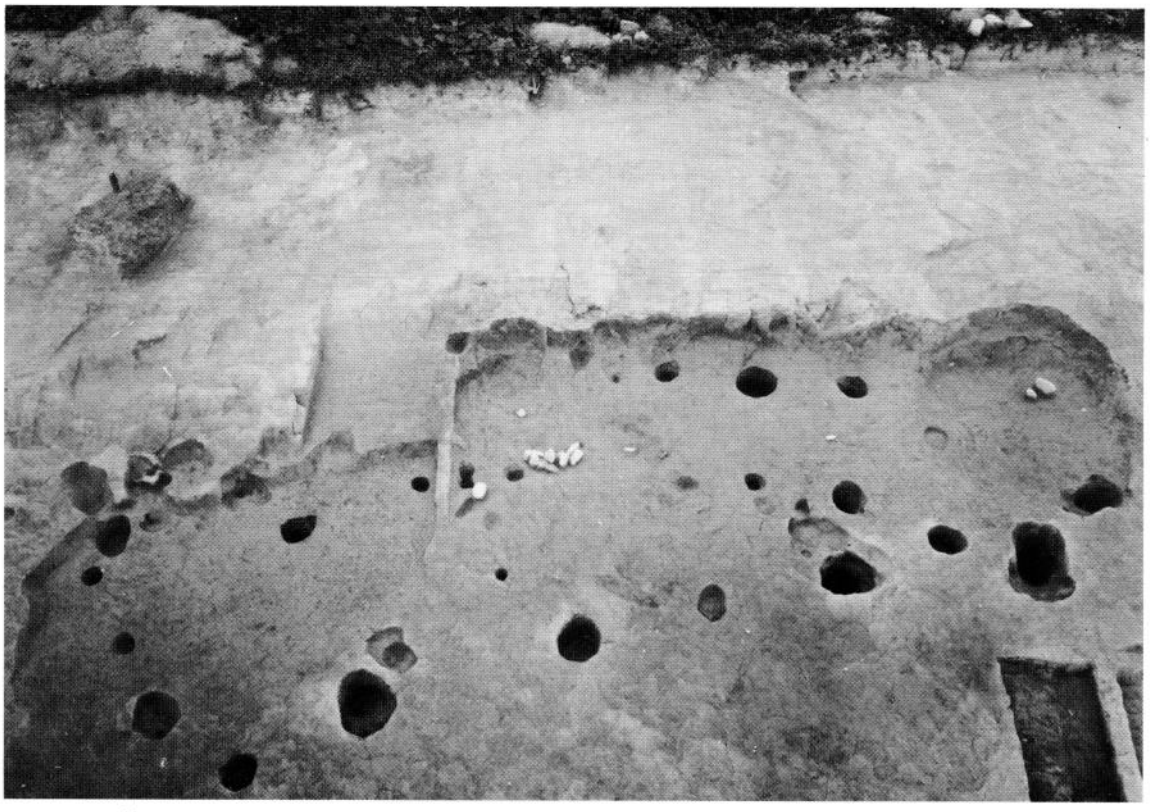
1　第1・2号住居跡



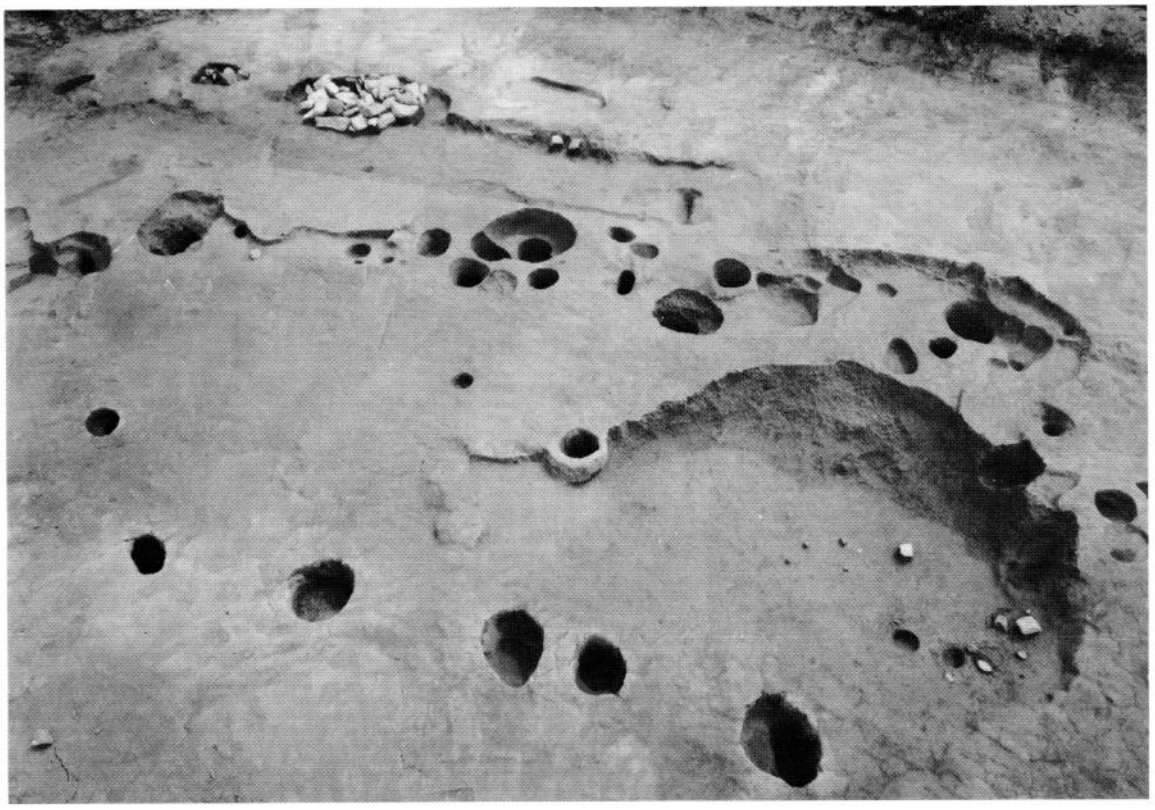
2　第1号住居跡床面土器出土状況



1　第3・4号住居跡



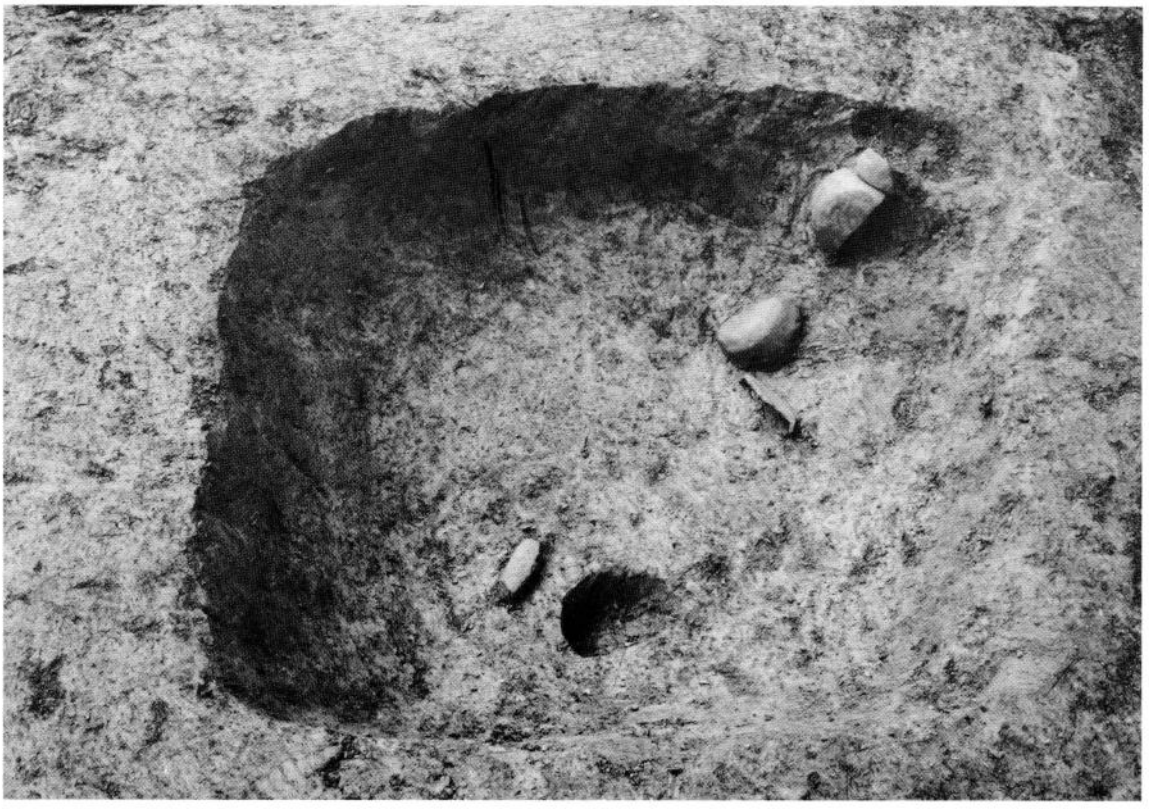
2　第5・6号住居跡



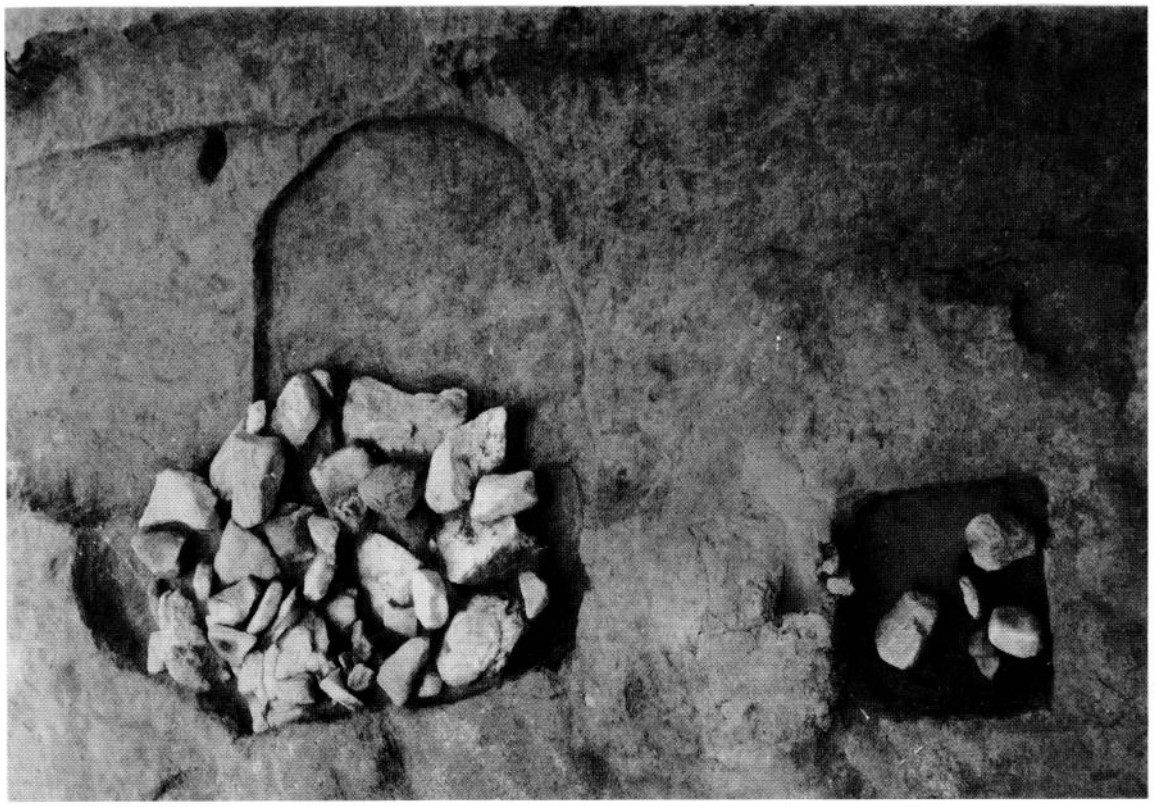
1　第7号住居跡

2　広田Ⅲ区全景（北より）

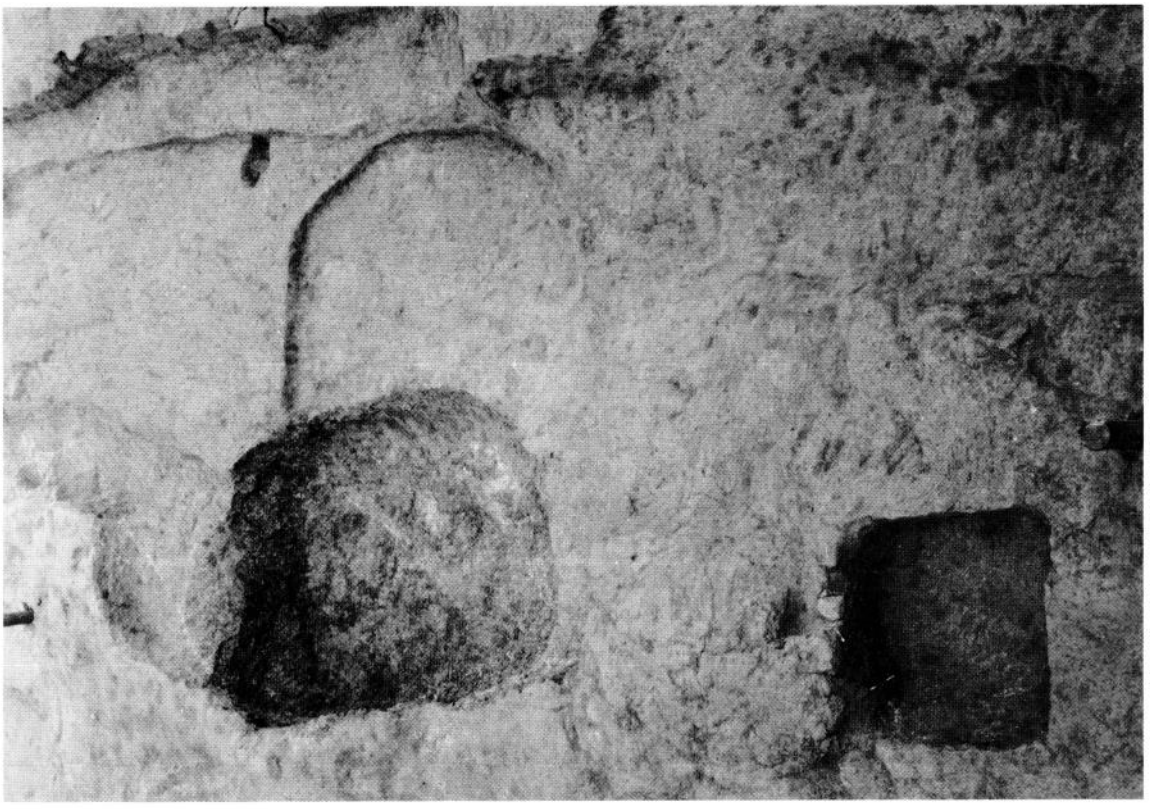
1　第4号土壙



2　第3号土壙

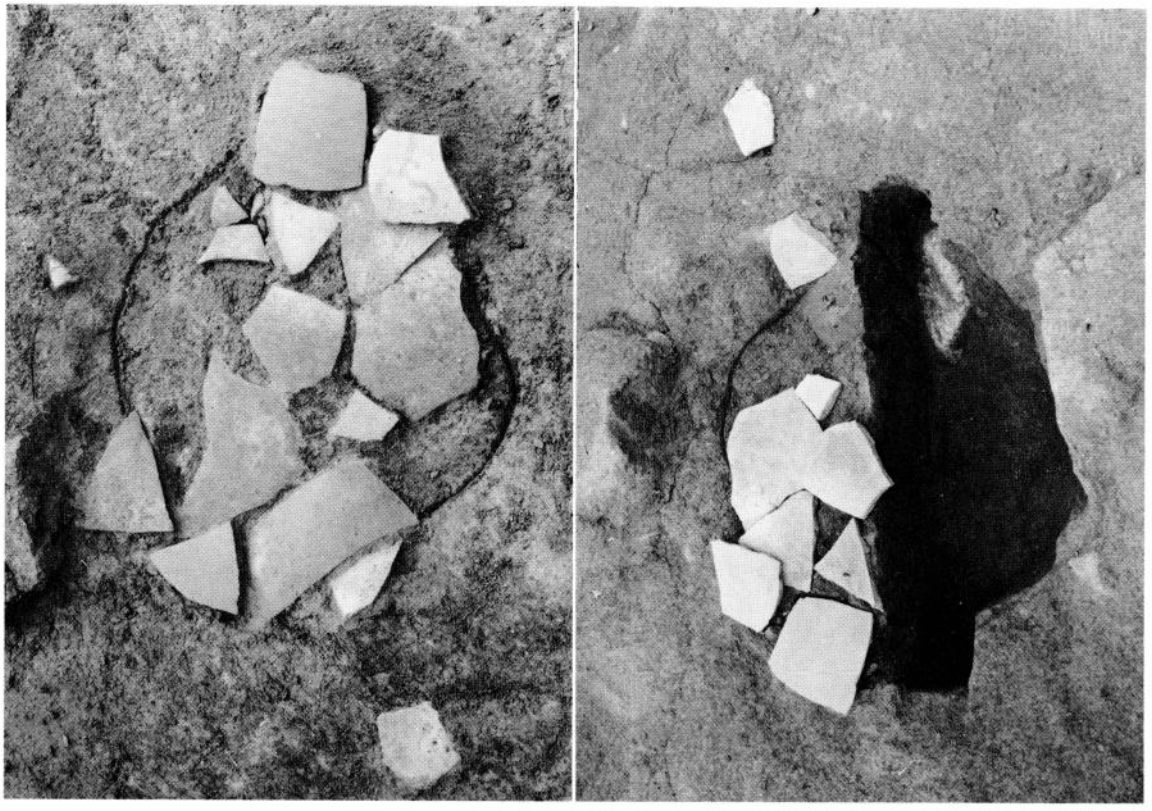


1　第５号土壙

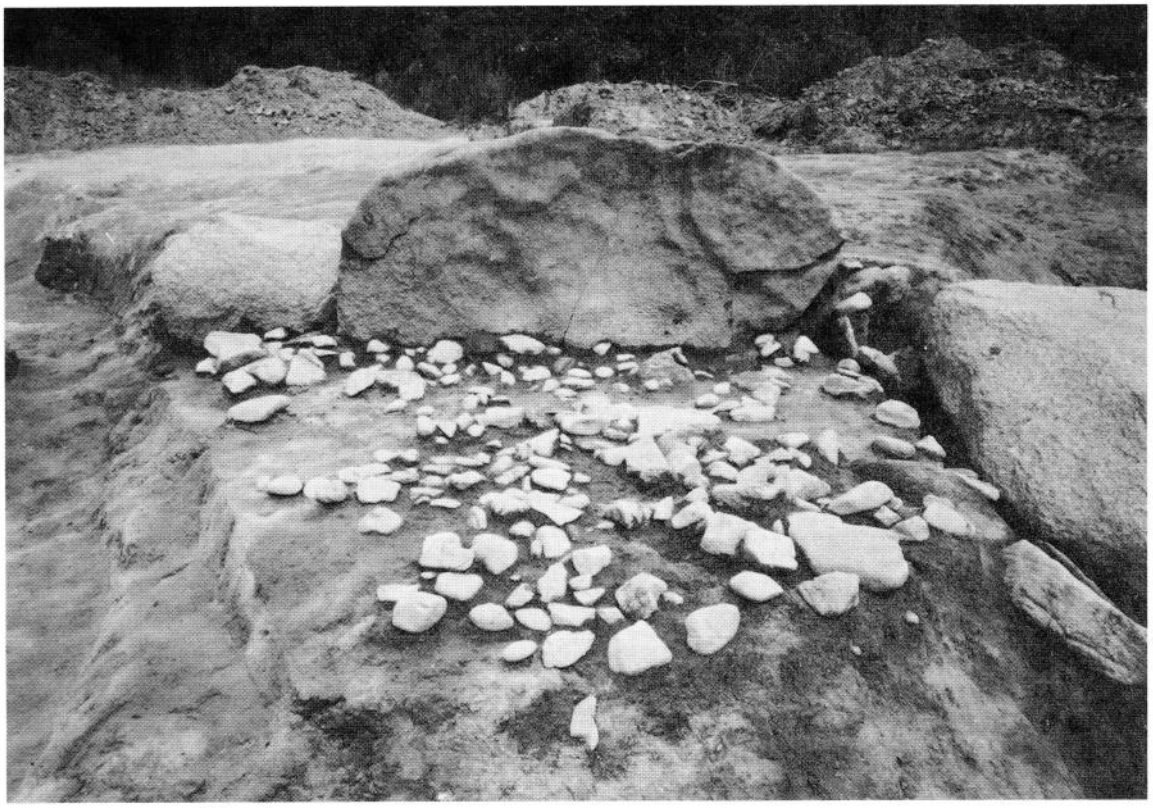


2　第５号土壙（覆石除去後）

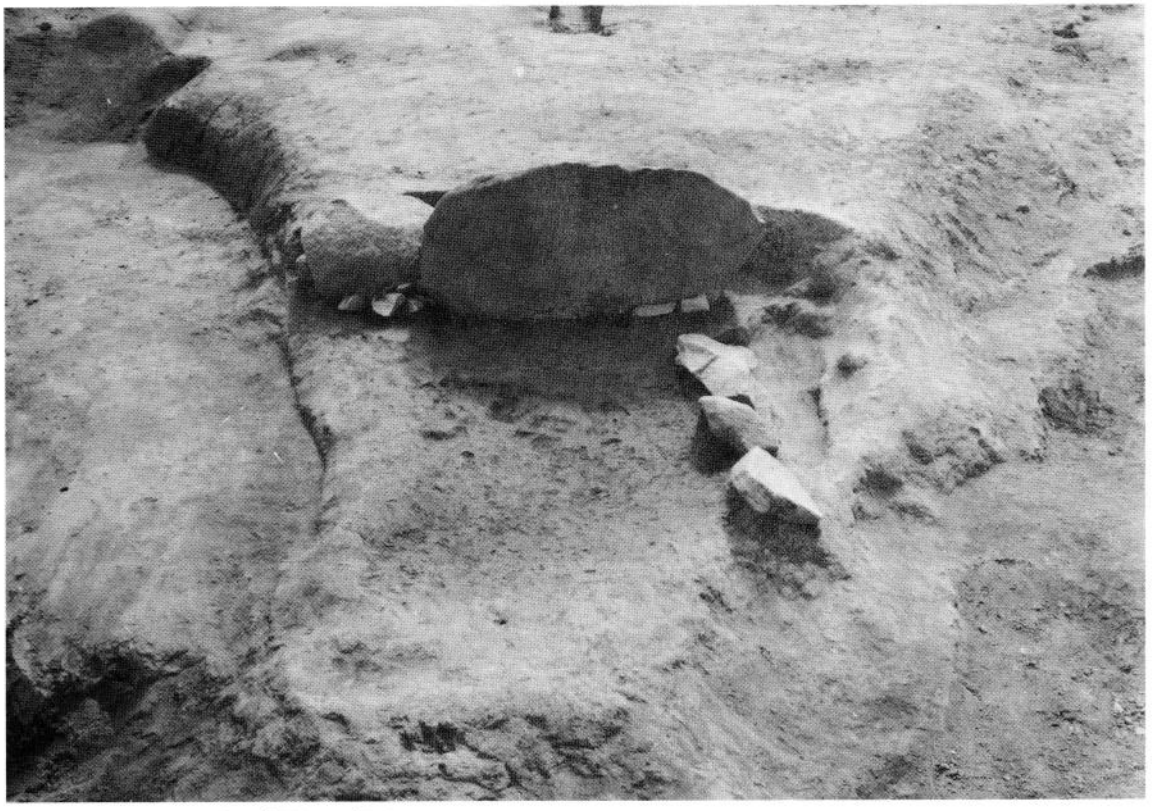
1　鍛冶関係炉



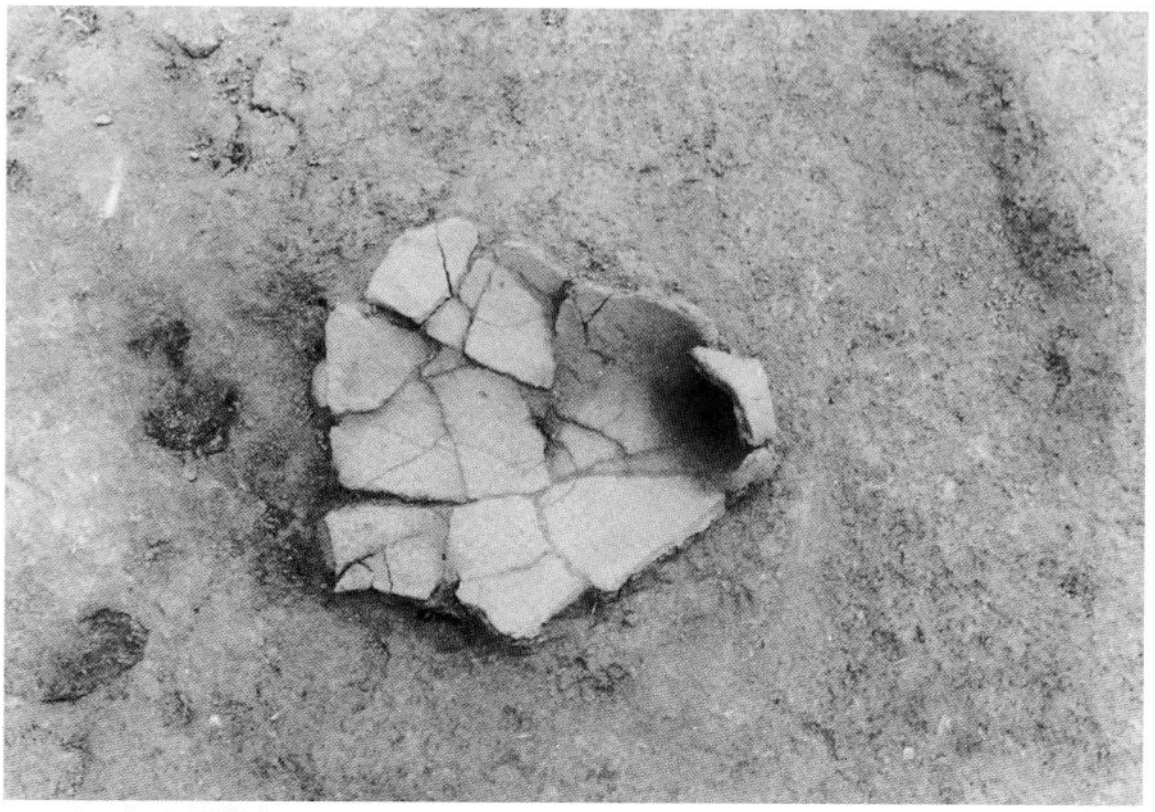
2　砂鉄溜遺構



1　広田１号墳石室

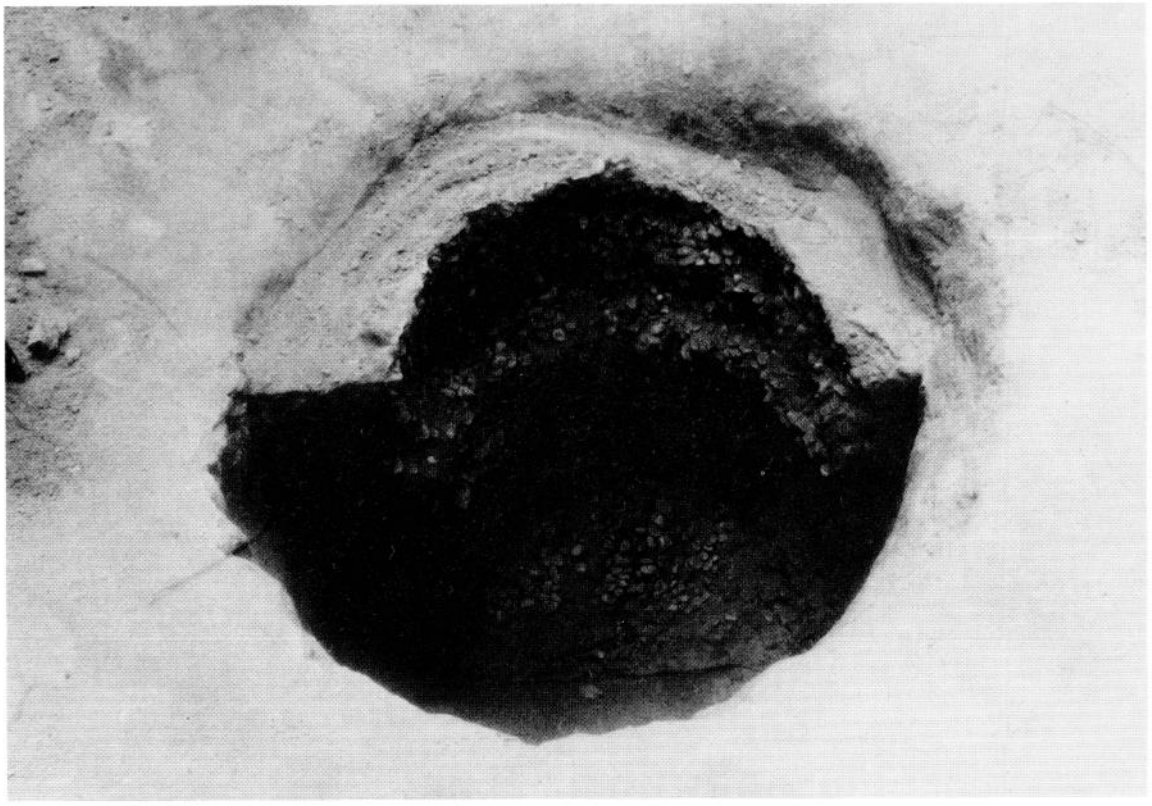


2　広田１号墳石室腰石と根石



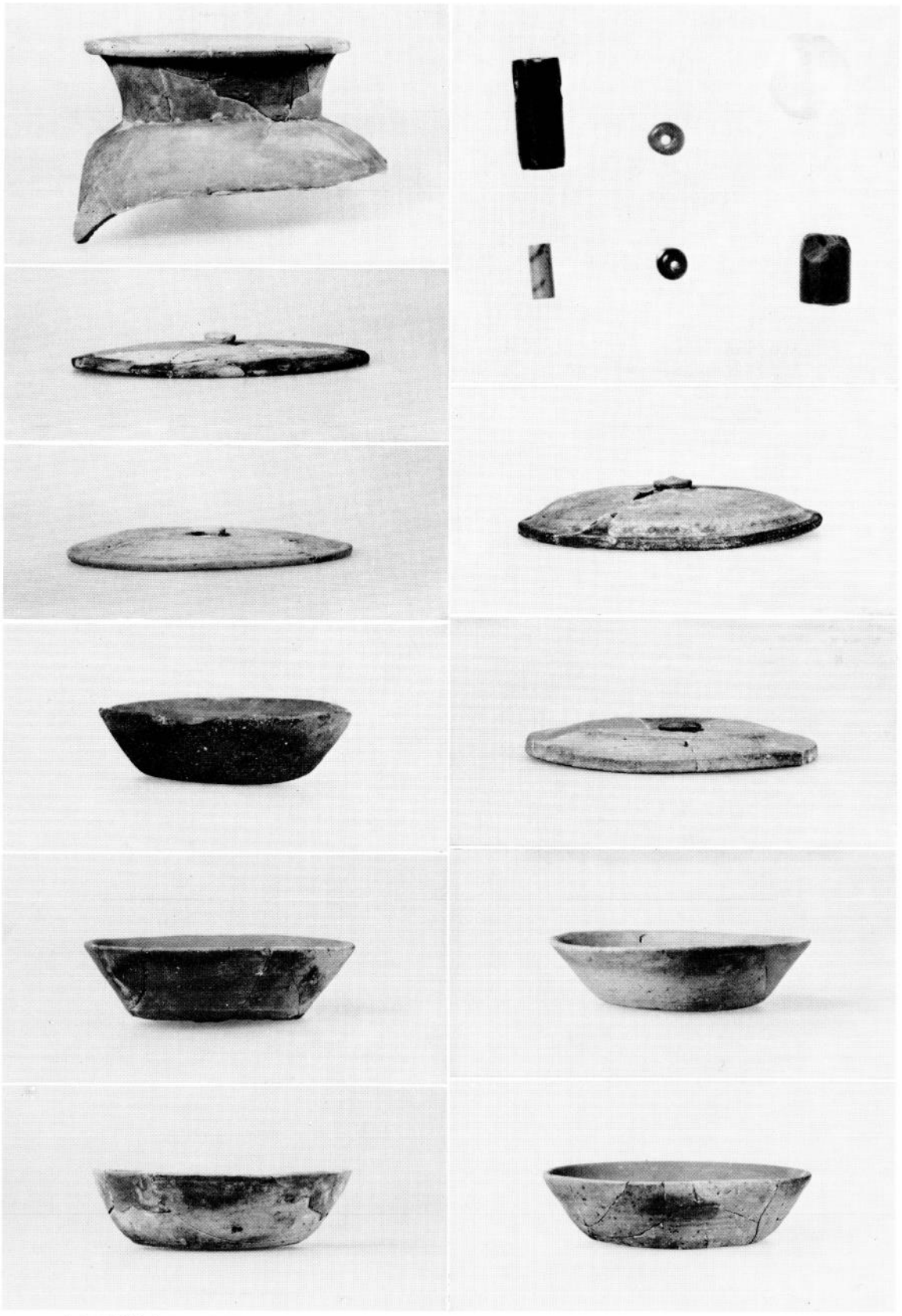
1　広田Ⅱ区甕棺墓

2　一字一石経塚

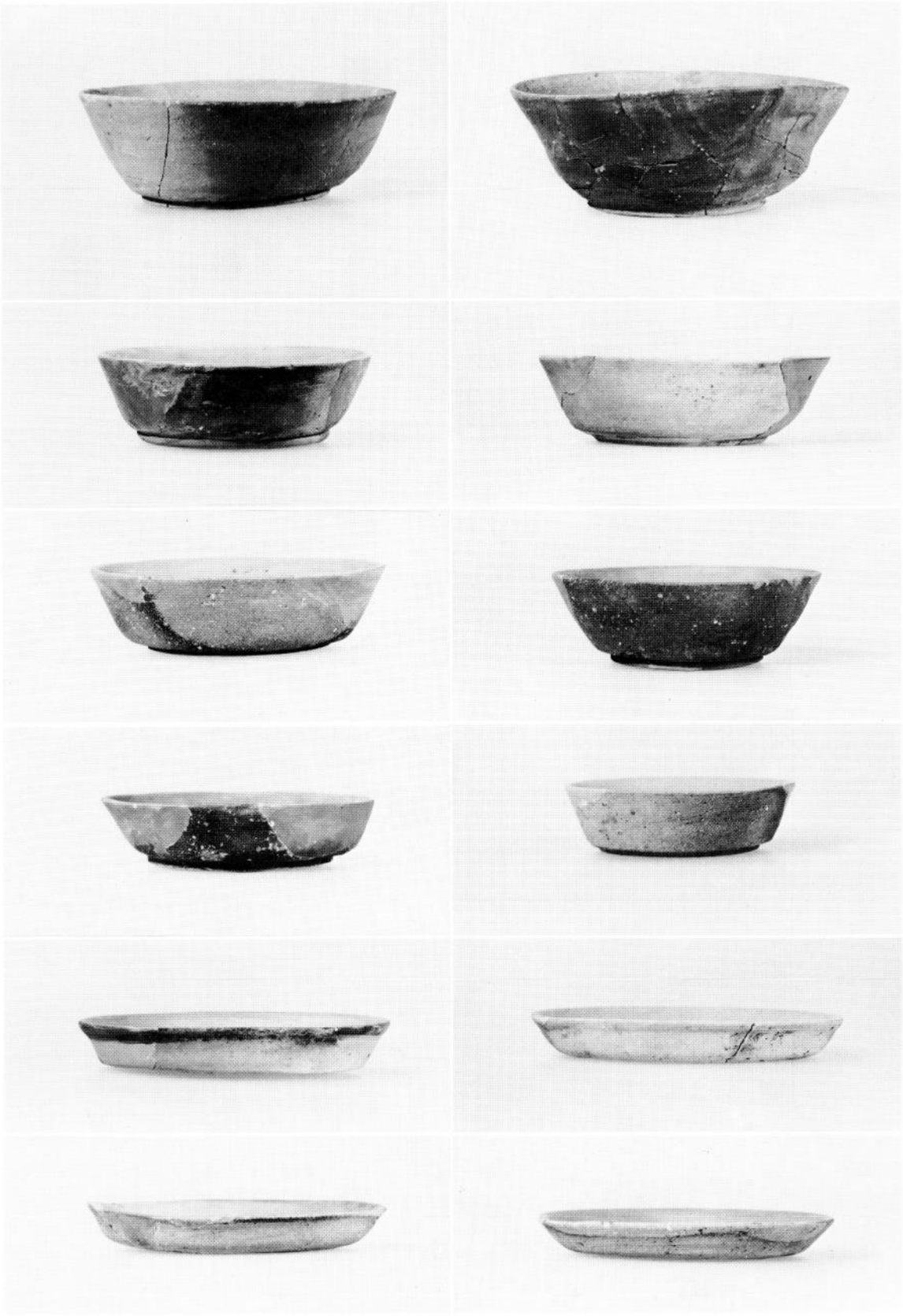


1　一字一石経塚断面

2　一字一石経塚（近影）

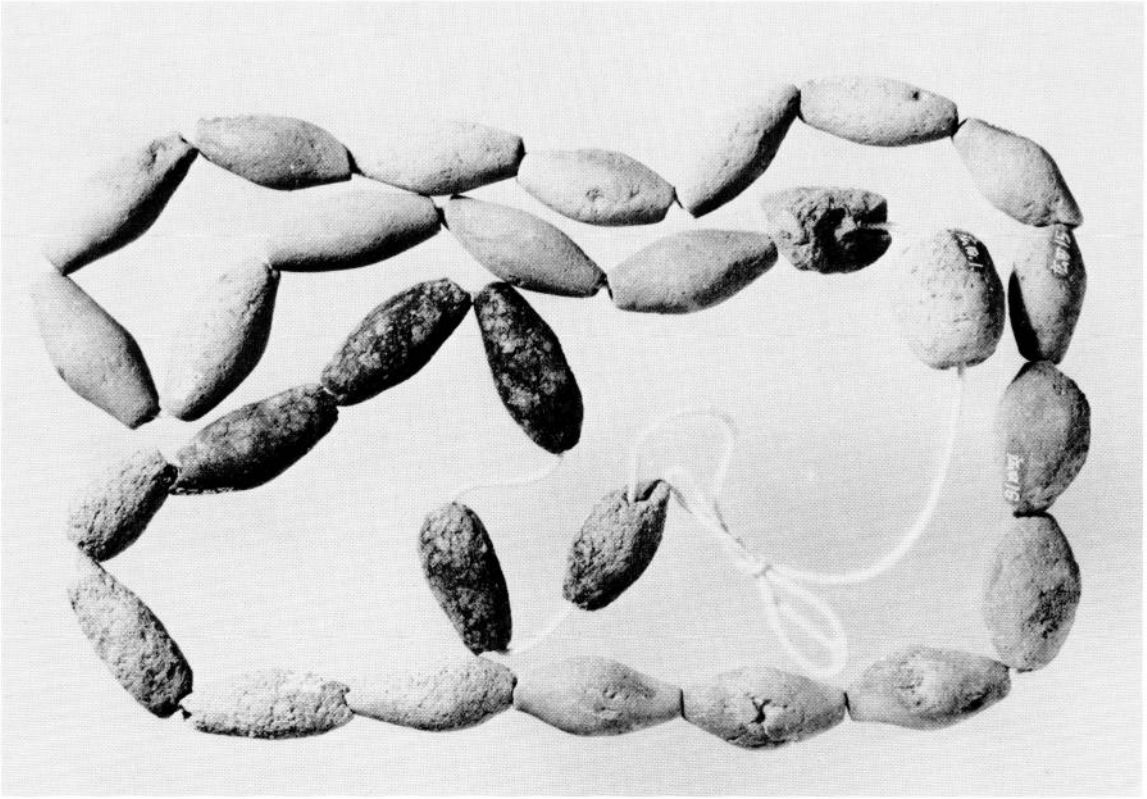


広田1号墳出土須恵器・玉類，住居跡出土須恵器

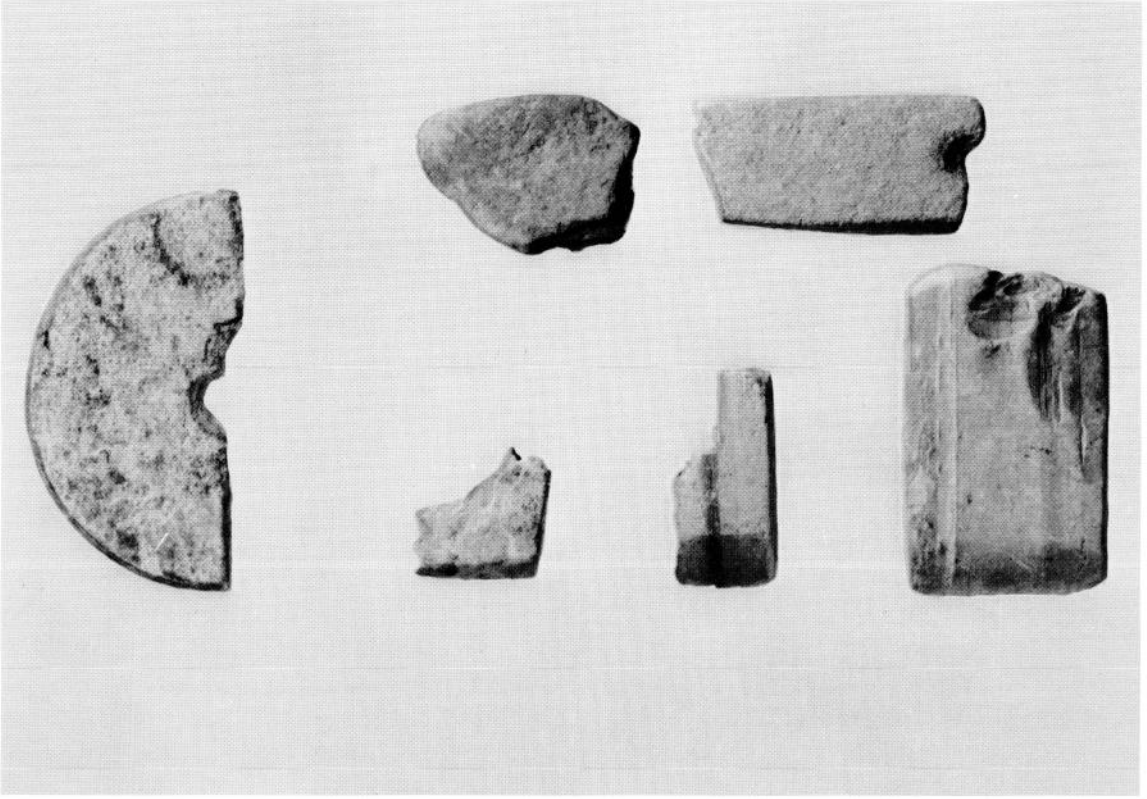


住居跡出土須恵器

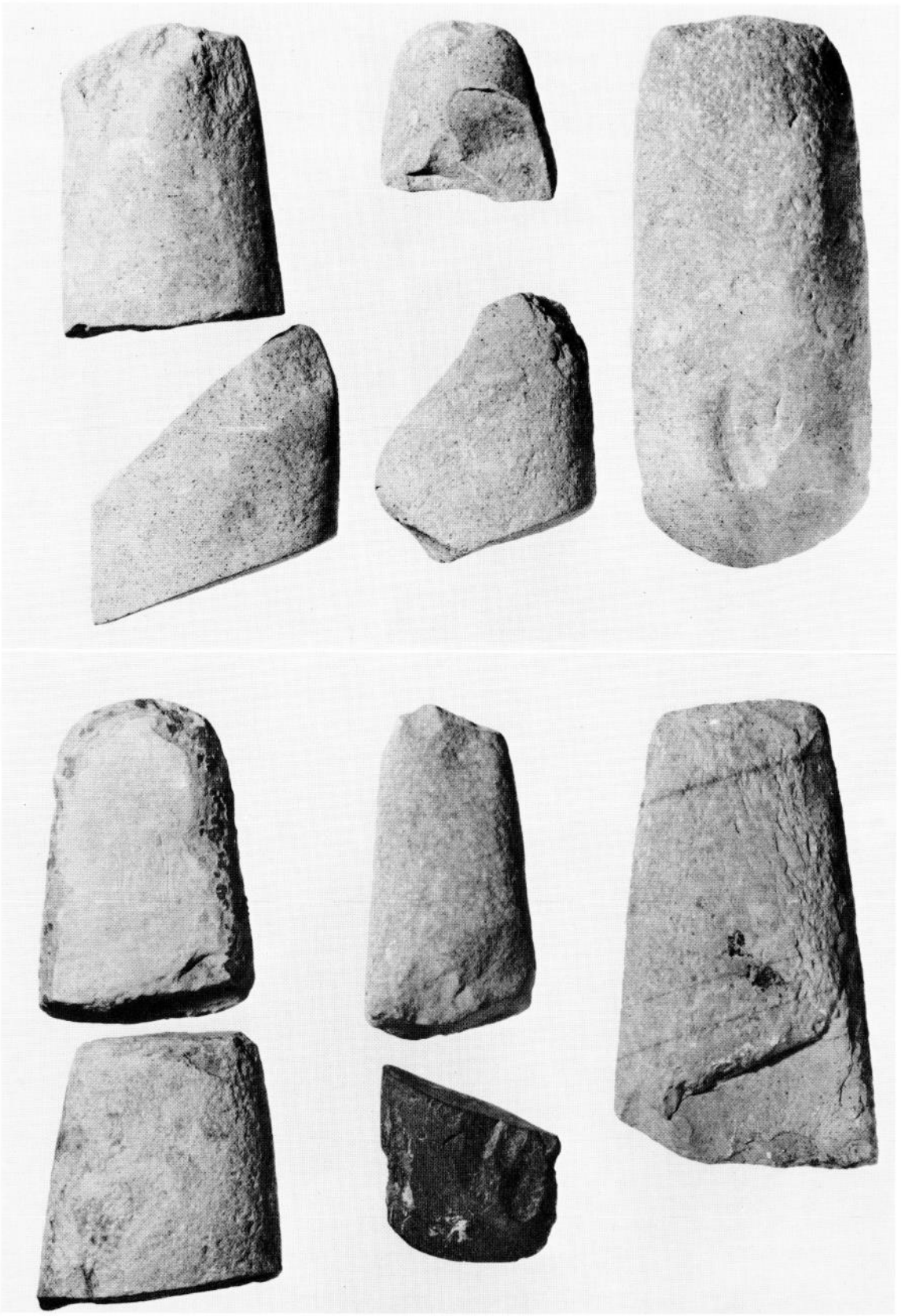
住居跡・他遺構出土須恵器・土師器



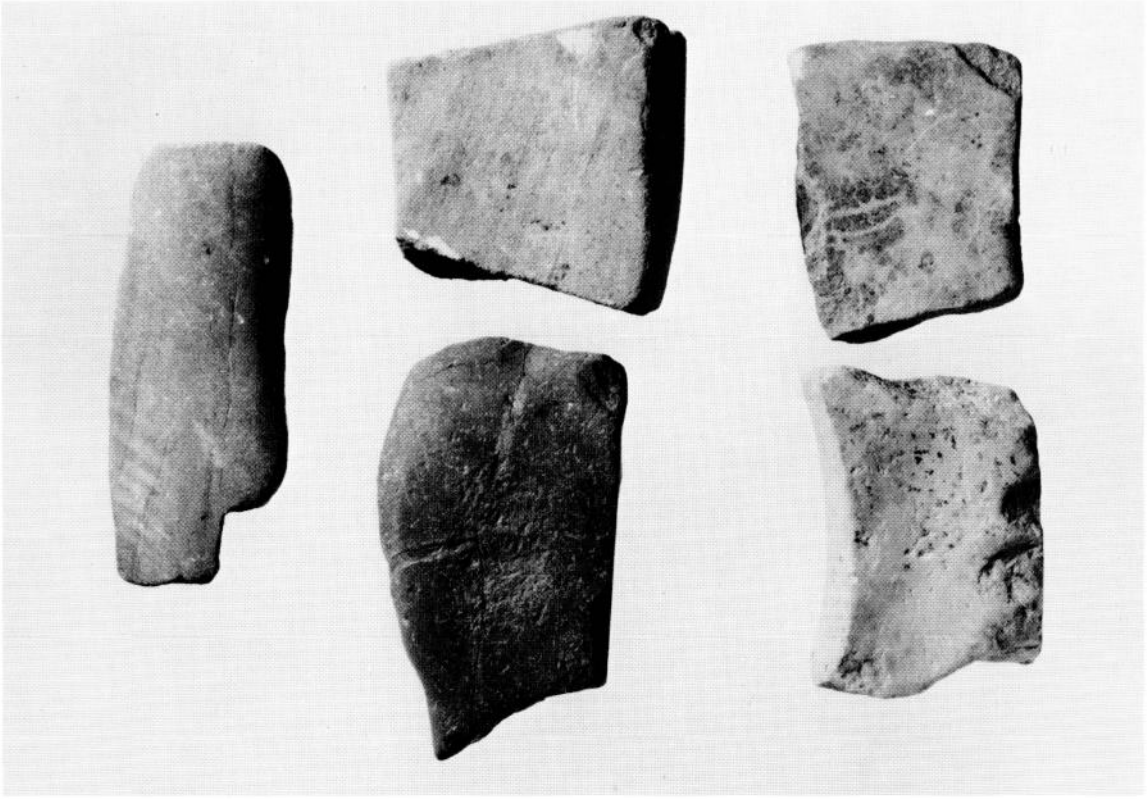
1　第3号住居跡付近覆土中出土土錘



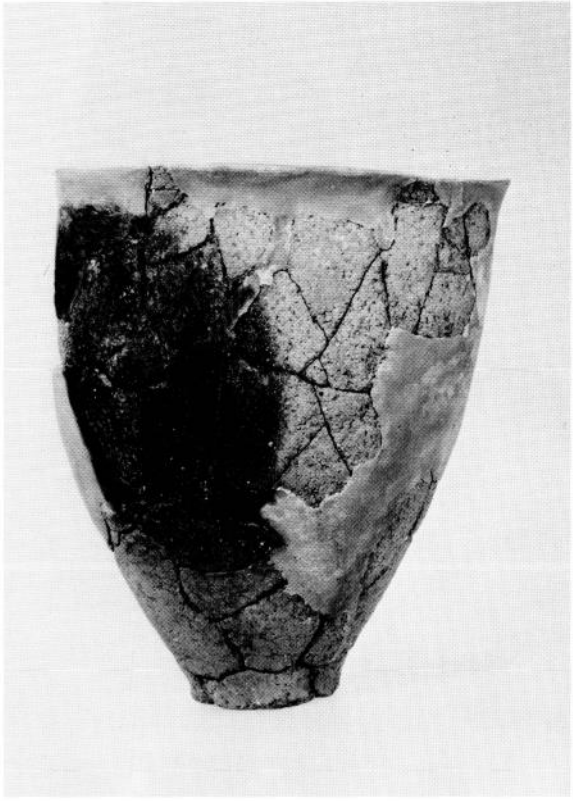
2　包含層出土石器



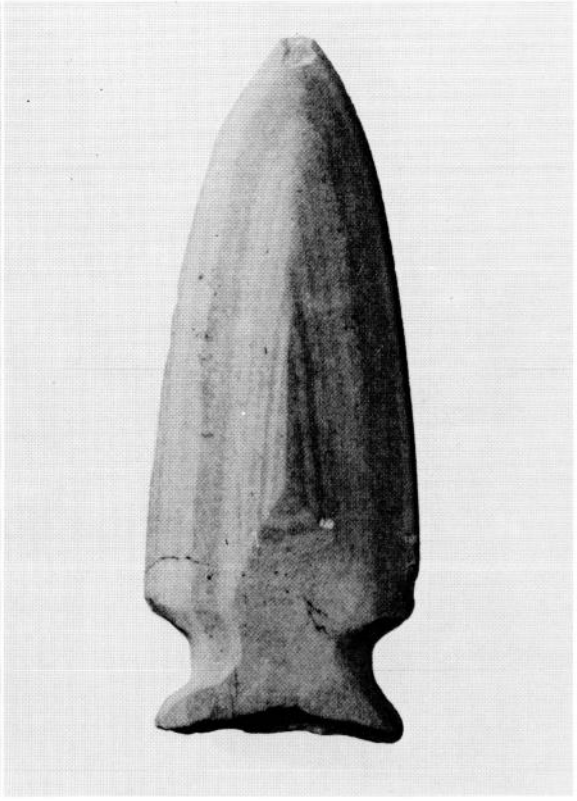
包含層出土石斧



1　包含層出土砥石



2　Ⅱ区甕棺



3　Ⅱ区出土石剣

一字一石経　（極く一部）

1　近世墓地

2　発掘調査寸景

Ⅲ　多々羅遺跡

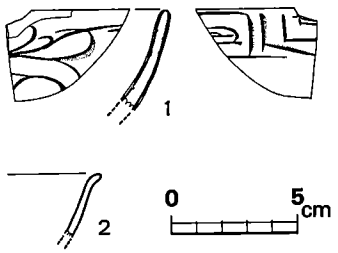
予備調査の終了していなかったこの鹿家の遺跡（12地点）を昭和53年夏の広田遺跡本調査の直前に調査した。A～Ⅰの8本のトレンチを設定した。Bトレンチ西半は谷部で落ちており，東端寄りの耕作土下の灰色砂質層より，土師器皿（糸切り底）小片，瓦器小片，青磁片（第73図1），白磁片（第73図2），捏鉢片等が出土するが，遺構はみられない。Cトレンチは河岸段丘で，下部は砂層・礫層となり，土師器小片がみられた。他のトレンチも大同小異で，遺構・遺物とも全く認められなかった。

1　遺　　物

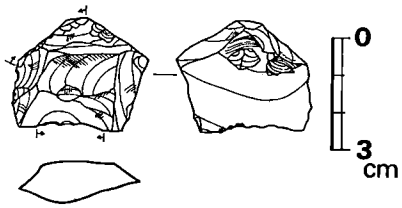
青磁椀（第73図1）　外面に雷文を施し，内面は，草文を片彫りに施す。胎土は密で，灰白色をなし，淡い暗緑色の釉を厚くかける。

白磁椀（第73図2）　口縁が短かく外反するもので，薄手である。胎土は密で，白色をなす。乳白色釉を薄くかける。

使用剝片（第74図）　良質の漆黒色の黒曜石で，裏面は原剝離面のままで，表面に若干の調整を加えて使用している。重さ10.7g。



第 73 図　多々羅遺跡出土青・白磁実測図（1/3）



第 74 図　多々羅遺跡出土石器実測図（1/2）

第75図　多々羅遺跡周辺地形図(1/2,000)

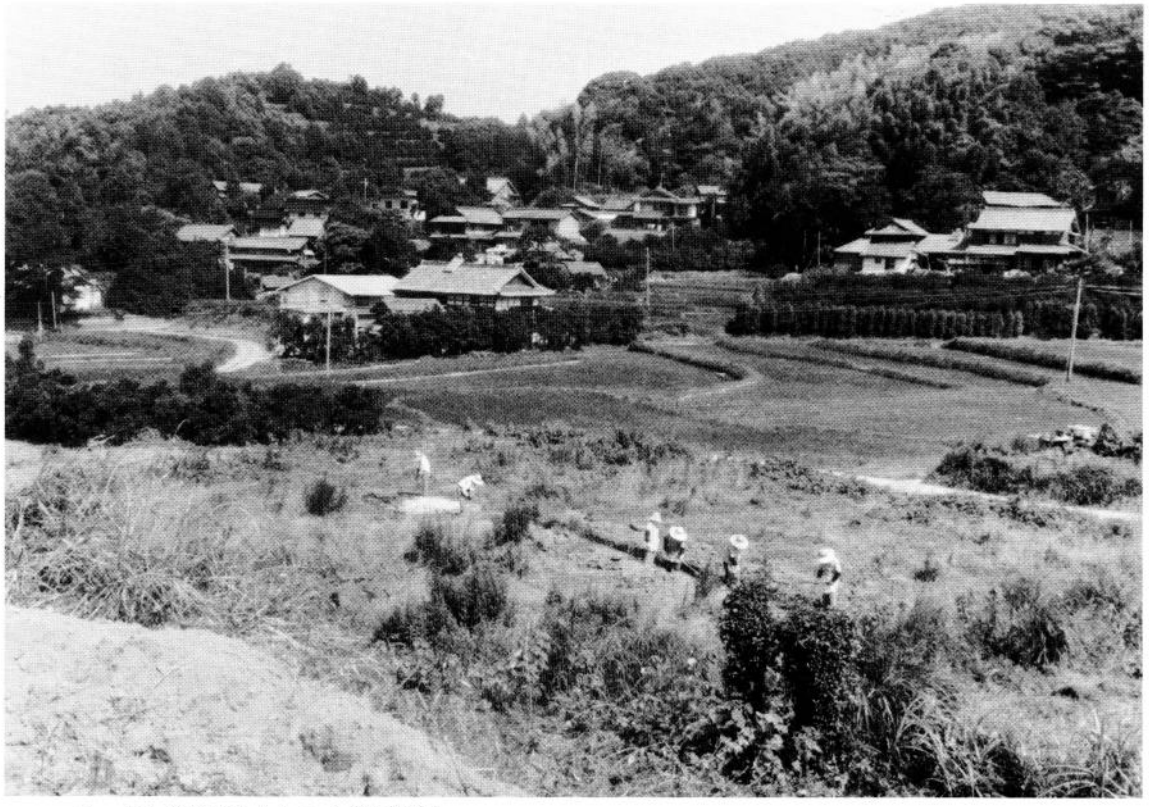
2 小　　結

結局，遺構は全く認められなかったが，字名が，多々羅（タタラ）であり，製鉄関連遺構も周辺に存在するかとも推定される。出土遺物は，赤岸遺跡と同時期のものが主体をなし，路線外での遺構の存在が想定される。

1571年（元亀２）吉井浜の合戦は，吉井岳城主吉井左京亮隆光と深江豊前守良治及び前原・小金丸・波多江等の連合軍対，草野鎮永軍の戦いであり，更に1584年（天正12）の鹿家の合戦ではここの立花峠をめぐって，原田信種と草野連合軍対，肥前松浦波多三河守信時軍との戦いである。時代の背景を考えるならば，史料に残るこれらを別にしても，小競り合いはより日常的であったろうと考えられるし，東方の中世城跡（吉井岳城）の裏側にあたるこの地で，周辺に小砦的な施設を有していたことも想像に難くない

なお，「延喜式」巻二十八に記される「佐尉」駅の地が，今回調査の近辺である「才ノ原」の小字の地に比定されているが，至近距離に関らず今回調査の限りでは全く，その片鱗すらも見出し得ない。大字吉井の竹戸遺跡（「二丈・浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告」1980所収）において調査された掘立柱建物群（総数17棟のうち平安時代前期とされるもの３棟）の存在を考えるとき，「佐尉」駅がこの地域周辺に想定されるとすれば，竹戸遺跡そのものをそれに比定すべきと考える。まして，駅家が，立花峠（標高111.0m）を西へ少し下ったばかりの山中に設置されるであろうか。立地からみても，いざこれから海岸線の峻厳な地を越えて，浜玉方面へ抜けようとするとき，小平野をひかえた竹戸周辺にて充分な支度を調えて出発する，ということになりはしまいか。

1　多々羅遺跡全景



2　多々羅遺跡Ⅰトレンチ発掘状況

1　多々羅遺跡Eトレンチ

2　多々羅遺跡出土青・白磁

二丈・浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告Ⅱ

昭和57年3月31日

発　行　福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印　刷　隆文堂印刷株式会社
北九州市門司区畑田町1－1